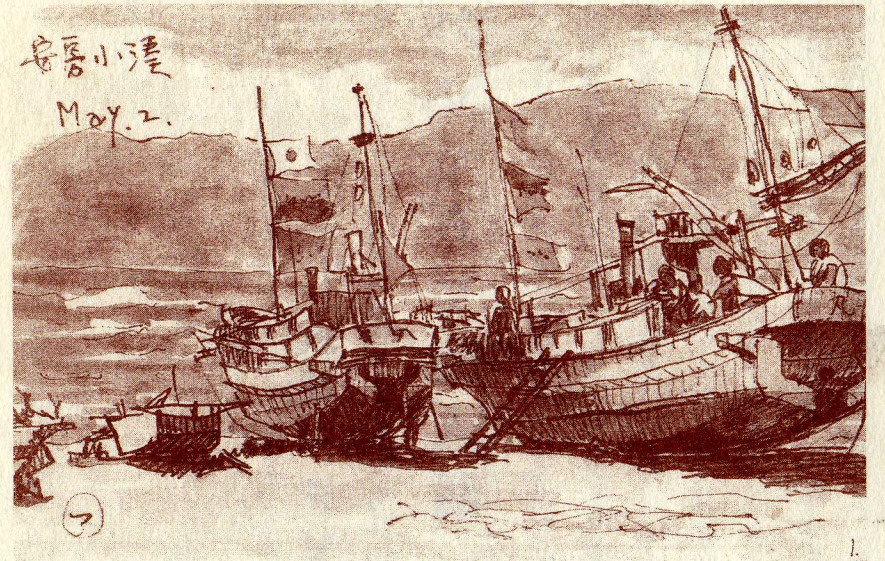


# 悠遊 創刊号



企業OBペンクラブ







## 刊行のことば

鳴澤 宏英

企業OBペンクラブの同人誌第一号が、会員各位の積極のご参加と、編集に当たられた方々の並々ならぬご尽力により、このたび上梓の運びとなりました。

名称の「悠遊」は、熟年（シルバー・エイジ）世代の生き方、とくにその明るい側面を強調したもので、会の性格を象徴する適切な命名であったと存じます。

もともと「国際ペン（PEN）クラブ」等に冠せられたPENの語は、周知のごとく、POET（詩人）、ESSAYIST（随筆家）、NOVELIST（小説家）のそれぞれ頭文字をとった頭字語（Acronym）つまりペン・クラブは、文筆を業とする専門家を意味するものでありました。

これに対して、当クラブは、同じ名称を使いながら、海外勤務を含む長年にわたるビジネス活動を通じて、多面的な知識、経験、ノウ・ハウを身につけた企業人のグループ。その意味で、文筆に関してはアマチュア集団であります。アマチュアの語を使いましたのは、何もプロに対して卑下したのではなく、アマチュアなるがゆえの特色と強みを強調したい、との思いを込めたものにほかなりません。

具体的に言えば、会員の共有する業際的な幅広い資産を活かし、チーム・プレーによる知的生産活動を

推進することが、当クラブの本領だと思っております。ここに、あくまでプロである会員各自の個人プレーを本旨とする集団との間の際立った違いがあるのではないのでしょうか。

このような基本性格を有する当クラブが、会員各位の自己表現ならびに会員相互の交流の場として、同人誌を持つことの意味は、ことのほか大きいと考える次第であります。

しかも「悠遊」第一号の内容は、多彩かつ豊富、最初の試みとしては、十分評価できる出来栄えのものとなりました。会員の皆様とともに喜びを分かち合いたいと存じます。

今後、この同人誌が、当クラブの求心力と活力を高めるよすがとなり、また、より実りある知的生産活動への励みないし刺激剤となることを念じてやみません。

さらに、「悠遊」に盛り込まれた私どものメッセージが、当クラブの対外PR活動の一翼を担うとともに、会員層の拡大への弾みとなることを心から期待する次第であります。

（企業OBペンクラブ会長）



目次

◇刊行のことば……………鳴澤 宏英

◇路のとう……………浅野 正春 6

◇ある晩のこと……………栄子・アブルカーダー 7

◇油絵に魅せられて……………新井 進 9

◇一本の掛け軸……………池田 善行 11

◇幻におわった談志の寄席……………石井 正紀 13

◇不寝番……………石川 正達 17

◇『頑張らない』すすめ……………伊庭 継也 19

◇マロニエの葉……………岩瀬 昭三 23

◇『世界遺産』指定に思う……………遠藤 俊也 25

◇国際マナー編の落第生より……………角谷 朗宏 28

◇英知結集に腰をすえる時……………上沢 準一 31

◇わが青春の一コマ……………亀井 弘次 35

◇社交術教育の必要性……………北田 純一 36

◇ガン告知……………木村 親 41

◇稽古場は役者の道場……………きりん たかし 45

◇ペンペン桜……………小林 正憲 47

◇忘れ難い人……………三枝 亨 50

◇北の王国……………斉藤 勤 54

◇急激に変化するOA機器……………佐份利 治 57

◇五倫文庫を訪ねて……………竹内 京一 59

◇アウトドアで自然と親しむ……………田中 良平 63

◇正月ラクビー随想……………中川路 明 66

◇寂しい街の怖い話……………中野 隆夫 67

◇日本人の名前……………鳴澤 宏英 71

◇父の国の恋人……………西島 力 75

◇「こめ」とベトナム……………野村 嘉彦 77

◇まだはもうなり……………福井 峻 79

◇ある戦友へ……………藤井 長治 82

◇遊休能力……………藤岡 豊 86

◇シャルロットの跡を訪ねて……………丸山 暢謙 88

◇往事漫筆……………水谷 汎 91

◇考え方の選択……………森田 茂 95

◇誰のための景気対策……………八木 大介 98

◇ある良医のつばやき……………吉葉 芳彦 101

◇悠遊の記……………小川 弘 104

許斐 義信 104

清水 喬 104

関谷 裕彦 104

中川 十郎 105

西川 知世 105

林 篤二 105

原 信 106

吉井米三郎 106

吉壽 清己 106

平間真木子 107

浅野 正春 107

石川 正達 107

亀井 弘次 107

北田 純一 107

◇一句鑑賞……………平間真木子 109

◇河村幸一郎さんを偲んで……………西島 力 112

見果てぬ夢を……………西島 力 112

河村幸一郎さんを悼む……………平間真木子 114

河村幸一郎さんと俳句……………櫻井 清治 115

◇年史・年表……………北田 純一 118

◇執筆者名簿……………北田 純一 135

◇編集後記……………西島 力 137

表紙の絵(安房小湊)……………西島 力 137

小林 正憲 107

三枝 亨 108

櫻井 清治 108

佐份利 治 108

鳴澤 秀影 108

原 青峰子 108

森田 茂 109

吉井米三郎 109

西川 知世 109



## 路のとう

浅野 正春

切り通しの道を抜けて

村境のコンクリの橋を渡って

右は溪谷に垂直に落ちる断崖で

左にはほんの少しばかりの草つきがあり

そのうしろには鬱蒼とした杉林がひろがる急な坂道を

先に歩いている親父の足どりを見つめながら登って行く。

春の信濃の山間の道の日陰には

まだ長靴の半分を埋める残雪が残っていて

親父の踏みあとを辿りながら懸命に山道を登る

ほてった顔を冷たい風が心地よくなぶり

背に負ったランドセルの中の筆箱の鉛筆が

歩くものを励ますようにカタカタと音をたてる。

親父の歩みがふと止まり、「あれをこらん」という声が

する。

親父の指差すほうをみると、

草つきの上のゆるやかな斜面の真中に

くろぐろとした小さな穴があいていて

そこだけはもう雪も溶けて黒い地肌が覗き

かすかに陽炎が立っているような幻覚にとらわれる。

その穴の真中に今生まれたばかりだともいいたいげに

仄かな若緑色の路のとうが生まれたての逞しい力で

周りの雪を溶かしてけなげにも外の世界を覗いている。

昭和十九年三月、私は父の生まれ故郷の長野県上水内郡小田切村字百瀬という山村に学童縁故疎開をすることになった。小学校五年生になる年のことだった。

戦争前には、国鉄長野駅のすぐ脇から「ガソリンカー」という軽便鉄道が、湯宿が一軒だけポツンとある山間の善光寺温泉というところまで乗せてくれたものだったが、戦争も激しくなり、その運転もとりやめとなり、やむを得ず父親に連れられて長野駅から約二里の道程を歩いて

行ったときの情景だ。

もう五十年前のことだが、第二次大戦中のことを思い出そうとすると、いつも真っ先にこの風景が目の前に現れる。

これはきっと私の戦争にまつわる多くの想い出のなかの原風景とでも呼ぶべき景色なのだろう。

## ある晩のこと

栄子・アブドルカーター

昨年も、町の中学生たちを引率してオーストラリアのシドニーにホームステイしてきた。

これはそのときの話である。

シドニーに着いて翌々日だった。電話で、

——マーガレット先生の家に泊まっていらっしゃる栄子先生ですね。はじめまして。私、彼女の友人のダイ



アナです。実は、コンサートの券が一枚残っているんで、ぜひ明晩と一緒に、と思ひまして。

——ハイスクールの生徒たちが主催の、歌とダンスのコンサートで、私の娘も踊るし、マケラ校のバレエ部員も出演するんです。

——それから、その晩は、ぜひうちに泊まってください。終演時間が遅くなって、あなたのところまでお送りするのは距離的に無理ですし。

ね、パジャマだけ持って、ぜひ私の家に……。

まだ会ったこともない、いわば全く見知らぬヒトに、気さくに声を掛け合うオーストラリア人特有のおおらかさ。私はかなり疲れていたけれど、好意を受けることにした。

翌晩、会場の「エンタテイメント・センター」(シドニー最大の劇場)は、わが子や孫を一目見ようと集まった人々であふれかえっていた。なんと、ニュー・サウス・ウエルズ州の公立ハイスクールのうち、五十校余りが参加しての歌と踊りの祭典だそうなの。

さて、舞台装置、照明、オーケストラ、司会進行など、

けられてきたということだった。「競争」でなく、お互いの学校の生徒たちの「友好」こそが目的。

今年で十五年目をむかえた、とも聞いた。

スポーツであれ、学業であれ、何事においても、ヒトを押しよける競争、競争……。それも幼いころから。個性尊重どころか、他人への思いやりもへったくれもないどこかの国とは、何たる違いぞ。

見終わって、むらむらと、なさけないやら、腹立たしいやら。忘れられない晩ではあった。

## 油絵に魅せられて

新井進

元会社の美術部に入部したのがちょうど十五年前だったと記憶する。小学、中学を通じて絵画に興味を持ち、また描くことも大変好きだったことも記憶している。小

いっさいが学生の手で進められていく。しかもそれが、どうしてどうして、学生の仕事とは思えぬ玄人舞台で、まるで、かの有名な「フェイム」や「キャッツ」の本物を目の当たりにしているようなのだ。洗練された一つの技が見事なまとまりをみせ、ダイナミックで、若いエネルギーに満ち満ちていて……。

そして、何よりも驚いたこと。それは、プログラムの進行中、出場校の名前がたった一度もマイクを通して紹介されないことだった。

わずかに、ソロのシンガーやダンサーの名前と学校が紹介されるだけで。

つまり、出場校のそれぞれが舞台上で優劣を競い合うのではなく、一つの大きな作品の、ある場面を、各校が分担し合う——という試みではあった。

そのためには、各校から教師や代表の生徒が、忙しい合間をぬって、一カ所に集い、作品のテーマについて話し合う。次に、そのテーマに相応しい場面を学校ごとに創作し合う。最後に、それらを繋ぎ合わせるといった具合で、このような作業は、およそ半年以上にわたって続

学校では絶えず出品して金賞を何回も貰った。貰えばまた励みとなって、描くことの回数も他の生徒に比べて多くなり、賞状も分厚く部屋の片隅に高く積まれていたことも覚えてる。

あることがきっかけとなり、前述のように、美術(絵画)部に入部したのだが、長年間握ったことのない筆が、何とぞこちなかったことだったろう。

毎月二、三回、夜六時十五分から八時半まで指導を受けた。先生は日展会友、光風会審査員で、勿論、旧上野の美術学校を卒業し、その道、油絵を自分の人生と心がけて四十五年、堂々たる風格を持っている。人物が得意であり、それだけではなかなか売れ筋が少ないため、風景個展を年に二回程開催されている。

小生も、回を重ねるたびに、趣味を越えてセミプロの仲間入りと相成った。

というのは、還暦を迎えた年の春、群炎美術協会の会員許可を理事長より受けたからだ。その会は、旧美校の師範部OBが造った協会で、昭和三十七年(一九六二年)に発足し、今まで三十二年経過している。総会員数は約



三百五十名で、規模としては二科会（株式会社）と比べものにならない小グループである。

プロ、あるいはセミプロと称する団体に所属して三年がたつが、従来の会社とは異なった雰囲気で、何となくプライドがお高く、「going my way」を我が信条としているメンバーの多いことよ。自分の作品が、どの他の人の作品と比べものにならないくらい立派だと思っている。勿論、个性的で「ああ、この絵はあの先生の作品だ」と、特色のある絵はなんとなく好感がもてる。

退職してから、割と余暇ができたから、裏磐梯、尾瀬、佐渡、上高地、白馬、妙高、北アルプス、八ヶ岳など関東周辺を歩き、自然の豊かさ深さに接してきたが、このところ海のある風景が気に入っている。北陸東尋坊や銚子の犬吠埼など絶壁に波が碎ける迫力は何回描いてもあきがない。

昨年（平成五）春の群炎展で、図らずもミノー賞をうけた。それは、福井県若狭の美浜を北上して五湖をこえ、半島の根っこに当たる漁港を訪問して、その自然と人工とが造りだした風景に魅せられ描いた作品だった。左右

### 一本の掛け軸

池田 善行

昨年の暮、宅配便で新潟から一本の掛け軸が私の手許に届いた。差出人を見ると、まったく心当たりがない。差出人の住所は新潟県西蒲原郡岩室村となっている。

大学の教え児たちの中にも、ゼミ生の中にも心当たりがない。私が学んだ学校の同窓会名簿の中にも、西蒲原郡というところに、縁のありそうなものはない。

掛け軸を開いてみると、漢詩で七言絶句が書いてある。私の友人の中で漢詩の素養のある者はいないから、まずは差出人の見当はつかなくなる。掛け軸の文字は白い紙の三分の二程のところに楷書で丁寧に書いてあり、下の三分の一程のところには、大きな海原とその海原を照らす真つ赤な太陽とが書いてある。全体としては品格のいい画である。

漢詩の句を眺めているうちに、面白い工夫がこらされ

と中央に突起があり、その先端にそれぞれ灯台が立ち漁船がにぎにぎしく往来していた。「ここはTVのドラマや、昔は映画のロケもきて、あまり他所では見掛けない景観を呈していますよ」との地元の人も話してくれた。

まだこの日本の中でも行っていない所も多く、出来るだけ足を運びたいと思っている。それでひと息ついたところで、十数年間行っていない欧州から米国へ行つてみたいと考えている。本当に空気が乾燥していて緑が美しいフランスやドイツは、やはり憧れの的である。昨年夏のミレー国際展がフランス／ヴァンセンヌで開催され、筆者も応募し入選の報に接した。日本支部より入選者のフランス・ツァーの案内を受けたが、他の用事と重なるため見送った。後ほどの知らせでは、日本、欧州を主に約一万点の応募に対して、三五〇点が入選したことが分かった。ことしもまた出品したいと思っている。

このところ、もの書きのほうがお留守になっているため、こちらの方も馬力をかけ、OB諸兄に追いつきたいと考えるこの頃です。

ていることに気がついた。漢詩は起承転結と呼ばれる四つの句から成り立っている。それぞれの句の最初の一語に、私の名前が割りふられているのである。私の名前である池田善行という四文句を右から左に順に並べて、それにつながる形で七言絶句が続いているのである。

たとえば、最後の行を例にとると、「行雲流水、天意を悟る」という句になっている。その前の行には、善という文字を最初の一字において、「善言功德、眞髓を極め」という句になっている。この工夫に気がついた時には、私は思わず唖ってしまった。これは漢詩の達人に違いない。

漢詩の末尾には玄志道人という署名がある。筆者は八十歳ぐらいの白髪の老人に違いないと思った。宅配便の用紙に記入されている差出人の電話番号を手がかりに、直接本人に電話してみた。その結果、次のようなことがわかった。

私と玄志道人とが出あったのは、昨年五月札幌のホテルであったという。たまたま食事の時に一緒になり、二十分ほど会話をかわし、名刺を交換した。そのときの会



話が玄志道人の心に深く残り、七ヵ月たった年末の時点で、掛け軸を送ってあげようということになったというのである。本人の説明によると、掛け軸を表装する技術はもともと持っているもので、漢詩の構想さえまとまれば、掛け軸を作ることは、そう難しいことではないということだった。電話口で、本人は謙遜を交えてそういうが、一本の掛け軸をしっかりと作りあげるのには、そう容易なことではない。私はご厚情を謝し、この掛け軸は家宝として保存し、毎年お正月には居間にかけることにしますと誓約して電話を切った。

ここで私どもが札幌のホテルでかわした二十分程の会話の内容について、少し触れておくことにしたい。玄志道人は新潟県の田舎で、玄米パンを作って売っているという。戦後みんなの食事が、雑穀をまぜない白米食になり、牛肉中心の副食や清涼飲料水のガブ飲みがさかんになったことにより、国民の健康は著しく害されてしまった。国民を健康な状態に引き戻すには、玄米を直接食べる状態にしなければならぬ。しかし、玄米は堅いし、しょやくに時間がかかるので、玄米食を敬遠する人が多

い。そこで、やむなく玄志道人は玄米パンを作って売ることにした。私のこのやり方を、大学の先生である池田さんあなたはどうか考えますかというのが、玄志道人の質問であった。

私の答えは、玄志道人のやり方はいいと思う、大局においては同感だ。しかし、いろんなやり方があると思う。私は経済学一筋に五十年間やってきたが、五年程前から健康問題を本格的に研究しなければならぬと思うようになった。健康は人生すべての問題の基本だ。人間生きていくためには、カネも欲しいし、社会的地位もほしい。いい家庭もほしいし、名誉もほしい。しかし、健康を失ったら、一切のものは消えてしまう。

玄米には、胚芽の中にビタミンやミネラルなど、四十八種類の栄養素が含まれている。それらは人間にとって、必須なものだ。白米食は、この大事な胚芽部分を切り捨ててしまつて、粕の部分だけをたべている食事法だ。これでは栄養素が不足する。栄養不足を補うために、肉類中心の副食をとるようになったが、過度に肉をとると、血液が濁つて、かえつて病氣の原因を作つてしまう。そ

れに、最近では食品添加物が食物と一緒にドンドン体の中にはいつてくるような社会システムになっている。

体の中から汚染物質を追い出すにはどうしたらよいか。それには免疫力を高めるような食事のとり方をしなければならぬ。日本古来の食事にたちかえつて、玄米食を中心とし、それに黄緑食野菜、海藻、豆類、魚類などを副食としてとるような食事体系にしなければならない。最近では、栄養補助食品が種々開発されており、玄米の胚芽を積極的に取り入れたものも作られている。私の知る限りでは、「玄米酵素」という健康食品もある。これらを積極的に研究してみられたらどうか、というのが私の答えであった。

短い時間の会話であったが、玄志道人は、そのことをよく覚えていてくれたようである。

人生の縁というものは、まことに不思議なものである。

### 幻におわった談志の寄席

石井 正紀

一九七〇年代後半のサウジアラビアといえば、当時の金で、七十五兆円という巨額が投資された第三次五カ年計画の真つただ中、まさに経済状況華やかなりしころであった。

その当時、私は、「紅海の花嫁」と称されていたジェッタに滞在しており、その地の製油所の増設工事に従事していた。

経済活動が盛んだったこともあり、ジェッタに滞在する日本人の数は多く、二百名近い人がいただろうか。その中では、建設に従事するわたしの会社の関係者ももっとも多かった。

家族を帯同し、市内に住んでいた数家族をのぞく百名ほどは、市の東北部に位置していた広大な空地にキャンプを設営し、生活していた。



住宅こそは、簡単な組み立てハウスであったが、日本食を食べさせる食堂はむろん、「女湯」の粹なのれんのかかったタイルばりの大浴場もあり、日常の生活には、ほとんど不自由しなかった。

野球やサッカーのできる運動施設、それに自分たちで造成したハーフのゴルフ場もあったので、休日ともなれば、汗をながしにくる日本人の姿が数多く見受けられたものである。

JALのジュエツダ駐在事務所長M氏を通じて、立川談志師匠の寄席をこの地で開催したいので協力して欲しいという話が持ち込まれたのは、一九七九年の十月半ばであった。

たまに日本から送られてくる「寅さん」ものの映写会のほかに、ジュエツダにはこれといった娯楽がなかったのほかに、この話は渡りに船とばかりに大歓迎であった。

話ほとんどん拍子に進んだ。談志師匠との折衝その他、興業に関する準備一切はJAL側が行うことになった。

日本人会へも連絡され、楽しみにしているむねの声が伝

手にした目付きのするどいナシヨナルガード（サウジアラビア国家警備隊）の兵士の数が大幅に増え、警備が厳しくなっていた。

いつもなら、「アッサラーム・アレイコム（やあ、ご機嫌いかが）」と声をかけさえすれば、ゲートは自由に通れたのに、その朝にかぎっては、車から降ろされて、トランクルームを開けさせられた。兵士たちは銃先で車中のいたるところをチェックし始めた。

なにか異変のあったことぐらいは、うすうすは感じとれるものの、それが何かは見当もつかなかった。厳重な報道規制がしかれたため、日本人はまったくつんぼさじきに置かれた。

翌日には、どうもマッカ（日本ではメッカと通称されている）で事件があったらしいといううわさが、現地人（この場合、サウジ人というより、出稼ぎにきている周辺国の人たち）たちのあいだでまことしやかにささやかれ始めた。そのうわさに根拠のあることは、日本からの電話連絡で確認された。

「十一月二十一日（この日は、イスラム暦のちようど一

えられた。特に、ふだんは街へも出られず、家の中に閉じこもりがちだったご夫人たちから大歓迎された。

席亭の設営は、わたし自身が担当した。たまたま、わたしは建設現場の責任ある立場にいたし、建築担当の技術者でもあったので、役に立ちそうな職人さんを動員することは容易なことであった。

食堂内に立派な舞台をしつらえ、厨房用の事務所を急拵えの楽屋とすることにした。大きな紫色の座布団をわざわざ日本から持ち込んでいた人からは、当日は貸してもらえない約束も取り付けた。

スーク（市場）で緑色と薄い茶色の生地を手にいれ、それを天幕らしく縫いあわせて、寄席の気分を少しでも出せるよう壁に張りめぐらした。マイクの用意、照明の用意もでき、準備は万端かと思われた。

思いもよらぬ事件が発生したのは、最初にこのはなしが持ちあがってから、ちようど一カ月も経ったころのことであった。

ある朝、製油所へ入構しようとしたら、カービン銃を

四〇〇年一月一日にあたる）に、聖都マッカで暴動が発生した模様であるが、詳細は不明」と日本の新聞に報道されたというのである。いわゆる第一次マッカ事件の発生であった。

日本からは、状況をくわしく知らせよといってくるのだが、あいにく、知らせようにも何もわからないのが実状であった。むしろ、何かわかったら、そちらから教えるよう、逆に頼むほどであった。

警備のほうは、厳しさを増すことはあっても、ゆるむ気配はなかった。

ナシヨナルガードの隊員は、ほとんど全員が精悍なベドウィン（砂漠の徒）であり、国家に忠実なあまり、ふだんから外国人にたいしては、必要以上に厳しい態度で接するのが常だった。

それだけに、非常事態発生下で、双方が神経をいらだたせて、つまらないことから不祥事を起こすことが多かった。百人以上の日本人と、三百人もの現地人労働者の身の安全に責任をもつ立場としては、そのことに神経をすりへらす思いであった。



そんな中で、事務所へよく出入りしていたエージェン  
トのひとり、信頼できる筋の情報として、サウジ王室  
内の反目説をもたらした。わたしたちに見れば、そ  
のことが一番おそれていたことであり、いま思えばこっ  
けいなことであつたが、最悪の場合、ジェットから日本  
人をどのように脱出させるか、所長を中心に二、三の者  
でしんげんに検討したものだ。

むろん、日本から飛行機が迎えに来てくれようはずも  
なく、陸路で国外へ脱出することも、砂漠、それも日本  
の六倍ちかい広大な国土を考えれば、不可能なことであつ  
た。ジェットが沖の紅海を航行する外国船に救いを求める  
といった冗談まがいの案もだされたが、結局は、日本大  
使館をふくめて、何のてだてもないことがわかつただけ  
であつた。

さいわい、その情報はデマに過ぎないことなんですわ  
けであるが、事態そのものは、好転することもなく、一  
週間後には、外国人に対しても正式に集会禁止令がださ  
れ、追っかけるように、日本大使館からも、そのむねの  
確認の連絡がはいつた。

め、JALの職員は急遽バーレン（ベルンシャ湾上の小島）  
へ飛んだ。

こうして、楽しみにしていた「談話寄席」は幻に終わっ  
てしまった。

事情はともかく、途中まで来た談話師匠にはたいへん  
失礼な結果となったが、師匠の心の中いかにばかりだったの  
か、いまとなつては知るよしもない。

## 不寝番

石川 正 達

節分や 星を数へし 不寝番

昨年夏、企業OBペンクラブに「俳句の会」が誕生し  
て、わたしも仲間に加えてもらった。二月の句会で、苦  
吟の末に捻り出したのがこの句である。

「不寝番って、どんなことをするんですか」

それを受けて、日本人会が予定していた運動会が中止  
になってしまった。

問題は、談話師匠の寄席をどうするかであった。寄席  
のことは、もう日本人のだれもが知っていた。なかには、  
うわさを聞いて、リヤドから空路はるばる聴きにくると  
いう好事家もでているほどだ。

せっかくの計画がふいになってしまふのは惜しかった  
し、日本の伝統的な芸能を演ずるだけなのだから、サウ  
ジ当局も理解してくれるはずという希望的な意見もつよ  
かった。

そうこうしているうちに、JAL側から、師匠は日本  
を発つたという情報もたらされた。

もう躊躇はできない。日中、白日のもとで行われる運  
動会をやめたのに、夜間、日本人のキャンプ内で、なに  
かわけのわからぬ集会が行われたというのでは、どこか  
ら密告されないともかぎらない。もし、開演中に当局  
から中止命令でもだされようものなら、遠来の師匠にも、  
たいへん失礼なことになってしまう。

けっきょく、寄席は中止とし、師匠の入国を止めるた

ご指導していただいている平間先生から、こんな質問  
が出た。軍隊時代の不寝番には、数々の思い出がある。  
いま振り返ると、そのいずれもが懐かしい。

一九四三年十二月一日、学徒出陣で島根県浜田の西部  
第三部隊に入営した。小学校の教科書で「死んでもラッ  
パを口から離しませんでした」と学んだ木口小平のいた  
名誉ある歩兵連隊である。軍律は厳しい。

消灯ラッパが、もの哀しく響いたあと、初年兵は交代  
で不寝番に立たされ、兵舎の見張りをさせられる。寒さ  
が身に沁みるひとときであった。

変わったことが起こるはずもなかった。ただ夜空を眺  
めて時間を過ごすだけである。山陰の冬は、いつもどん  
よりと曇っている。節分のころ、珍しく夜空が冴えて、  
星を仰ぐこともある。そんな時、不寝番に立つと、星を  
数えながら、さまざまなことを考えさせられる。

当時の戦況は日本にとってかんばしいものではなかつ  
た。太平洋の島々は次々と米軍の手に落ち、悲報が続い  
ていた。日本はどうなるのだろう。いや、自分自身がい  
つ戦場へ駆りだされて、いつ戦死するかも分からない。



「刃も凍る極寒の…」と歌われた山崎大佐以下全員玉砕のアツ島の最後などが頭に浮かんだ。二月六日にはクェゼリン、ルオット島も玉砕している。星は氷のように冷たく光っていた。

初年兵教育が終わり、初夏のころ伍長となって熊本・黒石原の西部軍教育隊（予備士官学校）に移った。訓練は、米軍との実戦から編み出されたア号作戦が中心であった。重火器の戦闘では対抗できない。夜、敵陣近くまで地面を這うようにして忍び寄る。匍匐前進である。円匙（スコップ）と十字鍬で一人が入れるくらいの穴、タコ壺陣地を掘って潜み、払暁に突撃する。銃よりもむしろ円匙の方が武器となっていた。

黒石原で受けた教育はハードな訓練ながら、教官が良かったせいとか、学生時代のスポーツ合宿の愉しさがあつた。トンマなことをやっても体罰はせいぜい不寝番どまり。不寝番さえ覚悟すれば、怠けても平気だった。

八月までここで教育を受けた後、それぞれ専門の士官教育を受けるため内外へ散っていった。中国大陸へ行かされる者もいた。私は、飛行場基地設定、つまり穴掘り

で、タコ壺掘りのア号作戦演習である。夜中に壕を掘って待機、命令一下、払暁に敵陣へ突撃することになっていた。ところが、珍しく早めにタコ壺が掘れたので、仰向けになって星空を眺めているうち、ぐっすりと寝込んでしまった。みんなが突撃したのも知らないで。

演習が終わって全員集合。人員が一人足りない。戦友が気付いて、慌ててわたしを起こしにきてくれた。慈悲深き区隊長も怒りの一声。「連続不寝番一週間！」。

戦友、東北盛岡の士・森本邦平は書いている。

「達チャン、円匙の神に見込まれる。査閲終わりで無き君の顔は？ 居たるなり壕の中。はや大切に円匙を抱くなら。掘るもよし作るもよし、ただ墓穴を掘る勿れ」と。

独りのんびりと時間を過ごすことは嫌いではない。連続不寝番一週間の刑罰も苦にならなかった。

七夕のころ、不寝番に立って仰いだ銀河の深遠な煌めきは今もわたしの脳裏に刻まれている。銀河は黒石原の夜空を埋め尽くすほどに輝いて見えた。牽牛・織女の物語でも思いながら、ぼんやりと眺めていたのであろう。

戦後、新聞記者となった。機敏な動作、鋭利な頭脳を

の土方部隊に回された。円匙との縁は切れない。

黒石原を去る時、区隊の同人たちが寄せてくれた「はなむけの言葉」を記した戦友録が残っている。何十年ぶりかで、これを引っ張りだしてみた。いつも隣に並んでいた安藤徹君は「不寝番の王者 連続不寝番一週間！」という見出しを付けて、こんな風に書いている。

「正達よ、汝はよくやった。しかし事故報告は決して少なくなかった。そは汝には技巧も策略もなきためなり。予はそのありの俣の姿を徳とし、今後は決して不寝番につけることなし。なぜかなら徹宵穴を掘ることいつもなればなり。（天上より円匙の神）」

生来、のろまで、のんびり家のわたしは軍隊生活に向いていなかったようだ。天皇陛下よりお預かりした銃、円匙などの兵器は手入れ不良。作戦要務令の宿題は途中でスッポかす。そのたんびに事故報告。罰として不寝番を命じられる。これだけは誰にも負けなかった。安藤君の記す「連続不寝番一週間」は最高の刑であった。それは、こんな状況で食らった罰である。

西部軍教育隊締めくくりの査閲演習があつた。例によつ

要求される職業に、わたしは向いているだろうか、と思索した。いや、のろまな性格を直すには、むしろ最適な職業だと思って飛び込んだ。だが結局、性格革命は実現せず、ゆっくりリズムを通して卒業した。

これからの生活、ぼんやりと暮らしては老化が進むばかりだという。「のろまとの闘い」は生涯続けていかねばならないだろう。さりながら、この同人誌の編集、こればかりは「ゆっくりリズム」で、楽しみながらやらせてもらいたい。

### 「頑張らない」すすめ

伊庭 継也

日常しばしば耳にして不愉快に感じる言葉の一つに「頑張る」がある。

老人から子供にいたるまで、男も女も皆「頑張る」を



連発するから、日本国中「頑張る」が氾濫して收拾がつかない状態になっていることを、ひそかに心配している。

\* \* \* \* \*  
言うまでもなく、「頑張る」の語源は「我張る」である。

「がんばる」が「がんばる」に転じたのは、「かじき」が「かんじき」になったのと同じ音便によるものと「大言海」に記されているが、一億人がこれ以上「我張り」出したら、世間には思いやりも妥協も無くなって、日本は殺伐たる我執の地獄と化してしまうのではないか。既にその兆候が随所に現れているように思う。

新婚旅行に新郎新婦を「頑張れよ」と言って送り出す光景を見ると、彼らは果たして何のために結婚するのかと疑いたくなる。生い立ちも性格も違う男と女が我を張っていては、「成田離婚」を免れ得たとしても、近い将来家庭の崩壊が待っているのは当然だろう。最近わが国に離婚が急増していると聞くのは、「頑張れよ」と送り出された夫婦が、その激励を忠実に守っているのが原因かもしれない。

主義が台頭する中で成長し、戦いに勝つために頑張ることを教えられて、波乱に富んだ青年期を送ることを余儀なくされた。

そして、戦後荒廃した世相の下では、自分や家族の生命を維持するため一日々々を必死の思いで我を張って生きてゆくことが必要であった。

少しでも高い給料を得て生活を楽にしようと、良心に目をつぶり同僚を押しつけるなどして半生を過ごしてきた多くのサラリーマンが、定年を迎えてからもなお「張り」続けようとするのは悲愴としか言いようがない。

どんなに丈夫な家具でも長年使い続けていれば此処彼処に歪みが生じる。長年働き続けて、やっと定年を迎えた退職者たちは、今こそ肩の力を抜き「頑張らない」余生を志向して生きてゆくべきではないか。もう十分過ぎるほど働いたのだ、今更無為徒食を恥じる必要はすこしも無いはずである。

\* \* \* \* \*  
働くことが生き甲斐だと昂言する人がいる。特に企業や団体の頂点にまで昇りつめ、指導的立場にいた人に多

\* \* \* \* \*  
若い女性のタレントが「ガンバリます」と絶叫したり、スポーツ選手が「ガンバろう」と言うのは、ほとんど意味のない口癖であろう。流行歌やサッカーの試合は、一片の知性も必要としないから許せるにしても、政治家が二言目には「頑張ります」では、自らの無能と教養の貧困を暴露しているに等しい。

彼らに必要なのは「頑張り」ではなくて、柔軟な思考と先見性であることを忘れてもらっては国民が迷惑する。

\* \* \* \* \*  
このように「頑張り」は意味において不愉快であるばかりでなく、音感もまた決して美しいとは言えない。音便によって「ん」が入り、少しばかり発音し易くなったとはいえ、濁音が多いために、清潔感に乏しく、相手を力で捻じ伏せようとする意図が見え隠れしているから、分別をわきまえた人間が使うにはふさわしくない言葉であると言うべきであろう。

\* \* \* \* \*  
大正から昭和のはじめにかけて生まれた日本人は軍国

いが、彼らは自らの我執と老醜を隠蔽するために、好んでサムエル・ウルマンの「青春」の詩を挙げて言い訳をしているようだ。

一八四〇年、ドイツに生まれアメリカへ移住したこの人の生涯については「青春という名の詩」(宇野収・作 山宗久著、産能大学出版部)に詳しいが、その中で松永安左衛門訳として紹介されている邦訳がお気に召しているらしい。

『年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。

歳月は皮膚の皺を増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。

(中略)

人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる。

人は自信と共に若く、恐怖と共に老ゆる。

希望ある限り若く、失望と共に老い朽ちる。』

果たしてこれが、詩と言えるものかどうか。芸術性について極めて疑わしいが、人間は心に理想や希望を持ってそれに執着していれば、いつまでも青春を保ち得ると



主張しているようだ。

権力欲、経営欲、財産欲等々、物欲にこり固まった人たちが、「俺はまだ若い。精神は青春だ」とうそぶいて、会社にしがみつき、地位に恋々とする絶好の口実になっているのは間違いない。

我を張ることは、相手の立場を考慮せず、妥協を許さないことに通じる。己を常に正しいと信じて押し通そうとすることは傲慢を生み易い。

老いの一念巖も通すというのは、決して日本古来の美德ではなく、時と場合によっては逆に頑迷固陋の悪徳となる。

\* \* \*

思えばわれわれが子供のころ、世間には隠居という美風良俗があった。落語に登場する横丁の長屋の隠居がその好例であろう。

労働生産的には全く寄与するところのない存在ではあったが、老人なりに気持ち充実に若人とのコミュニケーションも成り立っていたから、ひとたび町内で揉めごとがあったり、意志統一が必要な時には、適切な発言

をして地域や集団のモラルと平和維持のための精神的支柱の役目を立派に果たしていたのだ。

いまわが国にこの良き伝統をほとんど見ることができないのは残念である。

\* \* \*

「定年退職」は、巧まずして隠居の地位を与えられたようなものではないか。三、四十年働き続けても退職金は余りに少なく、隠居したくても経済的に不可能だという反論もあるだろうが、しかし、過去の生活に囚われなければ、還暦をすぎたサラリーマンの退職後の生活は案外費用がかからなくてすむものだ。

欲望の充足は経済学の第一歩であると心得るが、日常生活の価値観を転換してしまえば、経済問題の多くは解消するだろう。

人間が生存する上で、基本的に必要な衣食住について、寒さを凌ぐ衣服と、飢えないだけの食料と、風雨に侵されない住居があればそれで十分であると、昔「徒然草」で学んだことを、半世紀を経て漸く理解する好機を得たと考えようではないか。

### マロニエの葉

岩瀬 昭三

横丁の隠居は頑張って生きてはいなかったが、大根をかまぼこに、たくあんを卵焼きに見たて、若い衆の先頭に立って花見をする知恵を持っていた。

現代でも、年配のゴルファーたちは肩の力を抜いてこそナイス・ショットが可能であることを経験的に知っている。

\* \* \*

やがて、国民の二割近くも占めることになるかとされている六十歳以上の人々が、「頑張る」ことなく飄々乎として生きてゆくことを望みたい。

「色即是空。空即是色」

あなたもわたしも、みんな幸運にも戦禍を免れて生き残った余祿の人生なのだから。

十年程前、隣の家の大きな木の枝から墜越しに落ちてきた木の実を拾って「桐の木の種類です」と言って先輩のK氏にあげた。

生来、植木愛好家のK氏は、その実を植木鉢の中に入れて大事に育て、今では一メートルくらいまで元気に成長し、見事な葉をつけているという。

K氏宅の前庭にその植木鉢を置いていると、近所の人々が「何の木ですか」と聞くので「桐の木です」と答えている。しかし、「これは、桐でなく栃の木ではないか」と言う人や「いや、マロニエではないか」と言う人もいる。

いったい本当に桐の実だったのかね、とK氏はわたしに会うたびに聞く。

そう言われれば植木についていい加減な知識しかない



わたしは自信がない。だが、出生について疑いのある木を毎日大事に育てているK氏に対し、その種を進呈したわたしとしてはいささか気が重い。

もう直ぐ初夏だ。木が大きくなる前に今年は何んとか素性を明らかにしたいものだ。と手元の辞書をペラペラめくって見たら、桐、栃の木、マロニエはいずれも初夏に花が咲くと書いてある。ああ、これだ。これでやっと見分けがつかぬ、と早速手紙を出した。

お元気ですか

さて、例の桐の木か、栃の木か、マロニエかという問題ですが、五月に花が咲くそうですので解決して頂きました。

辞書によると次のとおりです。

### 1 桐

ごまのはぐさ科の落葉高木、葉は大型で掌状。

五月ごろ、筒状の淡紫色の花が咲く。

### 2 栃の木

周囲の植木の関係もあり、少し広い所へ移植しようと思いい掘ったところ、果たして根の張りの勢いで鉢が割れ、根がはみだしておりました。今は広い場所で大きく葉を伸ばしております。桐か、栃の木か、それともマロニエかという疑問はそのままになっております。

貴兄の辞書の調べによりますと、いずれも初夏に花が咲くことになっておりますが、まだ一度も花が咲いたことはありません。咲くのはもう少し成長してからではないでしょうか。

花が咲かなければ断定はできぬかとも思います。いずれにせよ、貴兄からの???の木は、小生の庭にすくすくと育っております。

折をみてお出でください。お待ちしております。

敬 具

六月初旬、会社の後輩が欧米に研修出張に出掛ける挨拶に来た。K氏からの手紙を見せたら、

「では、パリの街路樹のマロニエの葉を何枚か頂戴してきませう。六月下旬帰国したら、それを持って一緒に

栃の木科の落葉高木、葉は大型で掌状。初夏、白色で紅の斑点のある花が咲き、球形の実がなる。

### 3 マロニエ

栃の木科の落葉高木、葉は掌状複葉。初夏、白色の花を鐘状につける。

敬 具

一週間も経たないうちに返事がきました。

拝 啓

種を貴兄から頂戴してから何年経ちましたかね。十年くらいになりました。

鉢植えにして育ててきました。当地に引越した時も大切に持ってきました。

ここ数年来、木が大きくなりましたので、鉢のまま土に植えております。

今年、丈が一メートルちょっとくらいですが、葉は例年より大きく掌(てのひら)状とはいえ、小錦の足くらいの大きさになりました。

K氏宅を訪問し、久闊を叙するとともに、十年越しの懸案を一挙に解決しました」ということになりました。

### 「世界遺産」指定に思う

遠 藤 俊 也

久し振りに嬉しいニュースを聞いた。

昨年の十二月九日、屋久島と白神山が、世界遺産委員会により「世界遺産」の自然遺産として指定されたことである。

これで、この二つが、既に指定を受けているエジプトのピラミッド、中国の万里の長城などと肩を並べ、人類の遺産として世界に認められ、後世の人々に引き継がれることになった。日本にとって誠に喜ばしい、また名誉なことである一方、これらの遺産に対し大きな保全義務



をこれから背負っていかねばならない。

私は、これから先、日本がどのような保全措置をとって行くか非常に気にかかる。日本人の自然保護感覚は薄く、その措置は概ね手ぬるいからである。大きなパラダイム・シフトが必要とされそうである。

しかし、このことを論ずる前に、この新しい宝の現況を眺めてみよう。

まず、白神山地だが、青森県と秋田県にまたがる広汎なブナを主体とする原生林で、クマガヤやイヌワシなど稀少な鳥類が生息する貴重な未開発地域であり、一般にはあまり知られていなかった。

これに引き換え、屋久島は、九州の南方海上に位置し、観光客も最近も多く、新聞、テレビなどでも紹介されているので、その名を知らぬ人はいないくらいだ。私も、昨年この島を訪れ、その自然の素晴らしさに魅せられた一人である。

島は、さほど大きくはないが、岬々たる一、五〇〇メートル級の山が連なり、最高は宮之浦岳で標高一、九三五メートル。九州の霧島山や阿蘇山よりも高い。事実、沖

動物では、屋久鹿と屋久島猿が有名である。特に、屋久島猿は数も多く、山の中のバス道路まで出て来て観光客に食物をねだったりする。体毛はねずみ色で美しく、顔は本州猿より赤みが強い。

魚類も豊富で、石鯛ほか磯釣りのメッカとなりつつある。川では、最近ある釣具メーカー社員から聞いたところでは、試し釣りに、海から遡上した天然鮎が沢山捕れたとのことである。

以上が、今回指定を受けた日本の「世界遺産」としての自然遺産、主に屋久島の概観である。まさにその名に恥じぬ素晴らしさと言えよう。

ところが、注目すべきは、このニュースを報じた同日付の朝日新聞夕刊の記事である。そこには白神山地への登山口にあたる青森県西目屋村の収入役の談話が次のように載っていた。

「観光や学術調査で人が集り、村おこしになる」

この言葉を深く考え過ぎてはいけないうちかもしれない。しかし、今までの日本の観光誘致のやり方を振り返ってみると、余程自然保護の意識を強く持たない限り、とん

の船上から眺めると、小さな平たい盆栽鉢いっぱい、背の高い観賞石を埋め込んだ恰好である。

この島の魅力の第一は、何と云ってもその豊富な植物群である。一、二〇〇種にも余る植物、苔類だけでも六〇〇種あるという。この島は、アマゾン流域に匹敵する世界最多雨地のひとつであり、また、海岸から山頂までは亜熱帯から亜寒帯と実に幅広の気温である。これらが、天然の「植物園」が形成された所以であり、植物学者の垂涎の的となっている。

この植物の中でも、観光の目玉は屋久杉と屋久島石楠花である。屋久杉とは、樹齡千年以上の天然杉のことを言う。最も有名な縄文杉は七、二〇〇年、紀元杉は三、〇〇〇年と推定され、ほかにも有名杉は多い。

屋久島石楠花は、山の中腹から上の日当たりの良い斜面に群生している。五月のその淡紅色の花に彩られた自然の花園は美しい地上の楽園である。石楠花愛好家なら、世界一といわれる中国雲南省の大野生地域はさておくとしても、屋久島へは是非訪れてみたいと願うところである。

でもない方向に走りかねないと危惧せざるを得ない。

欧米人、特に英、独、仏などの国民は、自然保護の精神に富み、一例として、英国では、「ナショナル・トラスト」の例でもわかる通り、自然および古い文化の住民への財力などに頼らず、自分たちのボランティア精神を柱に、成功に持って行っている。

その点、今までこういう意識や活動に疎かった日本人は、ややもすれば目先の利益に走り易く、原点を見失い勝ちで、この収入役の発言も、自然の保護は後回しにして、絶好のチャンスとばかり、白神山地見学および観光の基点として自分の村を宣伝、観光事業を優先させることになって村の活性化をはかりたいとする気持ちのあらわれではなからうか。

尾瀬の湿原は、ここほど自然保護を第一に管理の行き届いたところは日本では珍しいかもしれない。その尾瀬にしても、余りにも多い観光客と生活排水のため、最近では沼の水は汚染されて植物への影響が懸念されると聞く。環境汚染は注意していても避けられない問題なのかもしれ



れない。いわんや、注意を払わねばどうということになるのか。

皆が西目屋村の収入役と同じ気持ちだと、白神山地のマタギ(昔からの熊猟師)が拓いた山道も人で溢れ、峠は空缶、空瓶などのゴミ捨て場と化し、原始の景観を損なうばかりか、原始林や生物の自然体系をも破壊してしまふことになりかねない。

屋久島は、白神山地とは比較にならぬほど観光地としての利点が多い。航空便は鹿児島から毎日一往復、四十分で行ける。自家用車族も、毎日往復のフェリーを使えば、鹿児島から片道四時間半で島に着く。旅館、民宿は既に五十軒を超える。「世界遺産」に指定される前でも、年々観光客は増えつつあった。今後、急速に増加するのは目に見えている。島の人々は、観光公害や釣り公害から、または宿泊設備増加による生活公害から、加えて今後予想される開発事業から、いかに島の大切な自然を守るか、今からその手だてを考えておかねばならないだろう。

また、地元住民だけではなく、国も鹿児島県も、島の

を出版する計画があり、執筆に参加しないか、とのお誘いがありました。私も、かつて六年近く欧州に滞在した経験もありますので、その地域を特徴づけるようなマナーとして、どんなものがあつたか、その場で一生懸命思い出そうとしましたが、残念ながら何一つとして思い付きませんでした。席上、出席された方の中からは、これこれの地域については自分が執筆を担当しよう、という発言もあり、私としては、自分の海外駐在時代の過ごし方が間違っていたのかなあ、とも感じました。

この会議のことは、これで終わりましたが、これを機会に、私としても欧州関係の本を読むときに、日本と欧州のマナーの相違の問題にも関心を持つようになりました。しかし、現実にはマナーの相違をはっきりさせようとすればする程、ますます良く解らなくなってしまい、成程、私は国際マナー論では落第生であることを痛感しました。それではどんなことが起因してわからなくなってきたか、次に取り上げてみたいと思います。

かなり昔のことになりますが、私が欧州に赴任する前、私の先輩から、外国では人にプレゼントをする時には、

開発と自然保護との調整に万全の策を講じてもらいたいものである。今まで本土に見られたようなレジャーのための乱開発などもあってのほかである。一方、島を訪れる観光客は、ひとりひとりが責任をもって、徹底した自然保護の意識をもって行動することが要求されてよい。今後も、日本の「世界遺産」は増えてゆくことが予想される。今回指定された屋久島と白神山地を試金石として、私たちはこれから、誇りを守る義務がいかに大切かを改めて自覚することによって、大切な遺産を地球の子孫々に損なうことなく伝えてゆくのではないか。

### 国際マナー編の落第生より

角谷 朗 宏

先日の企業OBペンクラブの定例会に出席したところ、議題の一つとして、ある出版社から国際マナー常識辞典

日本のように、粗末な物ですと、へりくだって渡してはいけない。むしろ、このプレゼントは、あなたの気に入ると思います、と行って渡すべきだ、と忠告されました。確かにこの忠告は、同じころ読んだ本の中にも同様のことが書いてありましたので、自分自身も充分納得し、先輩から良い忠告を頂いたものとして、私の数少ないマナー心得の一項目とし、現地の方にプレゼントをする時には、充分心掛ける積りでおりました。

ところが、現地の滞在期間が長くなるにつれ、プレゼントをする場合の慣用句として、

フランス語圏では C'est mon petit cadeau.

ドイツ語圏では Das ist meine Kleinigkeit.

という表現が良く使われているのが解りました。これを直訳しますと、フランス語では『これは私の小さな贈物です。』ドイツ語では『これは私からのつまらぬ物です』の意味になります。このように、欧州でも贈物をする時に謙遜した表現を使っていることは明らかで、現に私自身、現地の方がこの表現を使って、かなり高価な品物を差し出されている現場に出会ったこともあります。



こうして見ると、数少ないマナーの心得の項目すらも現地駐在しているうちに崩れてしまった訳ですが、最近、実にこれを混乱させるようなことがありましたので、ご紹介したいと思います。

先般、NHKのスペイン語テレビ講座を見ていたところ、講師の先生が、ゲストのスペイン女性に、日本に連れて印象的だったのはどういふ点ですか、と質問したところ、彼女は、日本ではスペインに比べ交通信号が良く守られていることです、と返事をしておりました。私はそれを見て「おやおや」と思いました。なぜなら、私はその少し前、大阪で全く逆の経験をしたからです。

その時、私は東京から大阪に出張し、御堂筋を歩いておりました。そこでは、縦横に横断する道に、それぞれ信号が設けられていますが、少なくとも横道の信号は全く無視されている様子でした。

私は、多少時間の余裕のある旅行者としての気安さもあってか、信号はしっかり守ることとして、そこに立ち止まりました。その間、ほとんど全部の歩行者が、どんどん渡って行きました。まさに『赤信号みんなで渡れば

こわくない』そのものだ、と黙って見ていたところ、突然、私の背中にどすんと何かがぶつかりました。驚いて振りかえってみると、若い女性の乗った自転車が、私に突き当たって来たのです。私はとっさに『今は赤信号だぞ』と叫びましたが、その女性は、何も言わずに『おっさん、何もたまたやってんのや』と言う顔で私を憎々しげに睨みつけ、自転車のスピードを早め、行ってしまいました。

同じ日に会った大阪人の友人に、この話をして『赤信号守って危ない御堂筋』ではないか、と皮肉を言ったところ、東京だって守られていない。大阪の悪口は言えない筈、と反論して来ました。

なるほど、東京に戻って、良く観察すると、東京も、銀座四丁目や日比谷交差点のように、違反すると生命に危険があるところでは守られておりますが、少々横道に入れば、御堂筋とあまり変わらないのが解りました。

こんな日本の交通信号に対して、NHKゲストのスペイン女性は、日本のどこの信号を見られたのか解りませんが、日本人は、信号を良く守る国民だという印象を強

く持って帰国され、恐らく多くの人々に話されると思います。

この実例から見ましても、国際的な定説を作ることの難しさをつくづく痛感している次第です。

## 英知結集に腰をすえる時

上 沢 準 一

### (1) 骨肉の争い

人類の歴史四〇〇万年の中で「紛争」のなかった日というものが、はたしてあったであろうか。有史以来五〇〇〇年、人類史は紛争・闘争・戦争の繰り返しでいっぱいである。

村社会から都市社会へ、さらに複数の都市や地域を統一した国家社会へと集団の規模が拡大する。それにつれて紛争も拡大した。闘争は組織化され、武力衝突がうま

れ、戦争となった。

封建時代にみられる小国家間の戦争では、親子、兄弟、親戚同士が敵味方にわかれて戦う図式があらわれる。いわゆる骨肉の争いである。宗教的には罪悪であったにせよ、大義名文があるかぎり、大義にしたがうことが優先された。

「戦争は罪悪である」として、ハッキリと人類の英知に意識されるようになったのは、きわめて最近のことである。航空機、戦車、化学兵器、核弾頭、誘導ミサイルなど大量殺戮兵器の発達が地球生命全体の滅亡を予見させたからである。

核不拡散、核軍縮から核廃絶へと世界政治の流れが大きく変わろうとしているのも「滅亡への予見」が軸となっている。

ポスト冷戦で一挙にふきだした世界各地の紛争は、ボスニア・ヘルツェゴビナ、カンボジア、ソマリアはじめ世界中で百十二もの騒動をかかえ、一部は泥沼内戦の状態にある。

民族紛争、宗教紛争、独立紛争など入り交じったの武



力闘争ではあるが、「骨肉の争い」が主流となっている。ボスニア・ヘルツェゴビナでは、ギリシャ正教のセルビア系とカソリックのクロアチア系にイスラム・スラブ系が、三つ巴の内戦をくりひろげているが、もともとはバルカン・スラブの同族である。

カンボジアでは各地でポルポト派とヘン・サムリン派の対立、衝突があり、親子兄弟が両派にわかれて戦っている姿がテレビで報道された。

ソマリアの人口七十一万人のうち、九五%がソマリ族であり、九九・八%がイスラム教スンニ派に属する。それが一九九〇年末、バール政権の崩壊と共に、八派にわかれて武力闘争を続けている。正に「骨肉の争い」である。

二〇年ほど前、アルジェリアに出張した時、よく通ったアルジェの中華レストランで、アラブ・イスラムの老婦人に出会った。アルジェの町中に「ユダヤ教会」をいくつか見かけるので、わけをたずねてみた。

老婦人が若かったころは、アルジェ人たちはユダヤ人連中と結構なかよく交流していたし、ユダヤ教会も、もつざるを得ない部分もある。しかし、人道問題のように、放置しておけない部分もある。大量難民の発生とそれらの他国への流出は、関係諸国にとって重大な社会問題であり、政治経済問題でもある。

リビア、イラク、インド、北朝鮮などのように核兵器導入の恐れのある国が、突如周辺国を威嚇するようになると、世界政治にとって重要問題となる。その予防策として、核査察はじめ国連の平和維持機能も問われてくる。だから放置はできない。

古来「骨肉の争い」をふくむ乱世の平定は「天下統一」の大事業として世の中にとめられてきた。そのほとんどすべてが、より高度の軍事力を背景としておこなわれている。

経済力も、産業革命で産業資本が立ちあがるまでは、軍事力に直結していた。近代にいたっても列国は、富国強兵の言葉どおり産業を起す一方、強兵策をやめなかった。

とどのつまりは核武装である。核爆弾を世界でいちばん先に開発し、広島／長崎で使用したアメリカが世界の

と見晴らしのよいところに建っていたとのこと。彼女も友達と話を聞きにいったことさえあると語ってくれた。砂あらしや早魃飢饉のとき、難儀したユダヤ人牧師たちをアラブ老婦人らが助けた。逆に、疫病流行のときはユダヤ人牧師側が医療医薬で献身的奉仕をするなど、家族ぐるみで助けあっていたともいう。

人種や宗教をこえた人間的交流が中東社会に存立した立派な証拠である。アラブ老婦人は嘆いた。それが、どうして第二次大戦後イスラエルだPLOだと血なまぐさい騒ぎになったのかと。

(2) 頭をひやしてから

核軍縮から核廃絶へ、大量殺戮兵器削減から常備兵力の縮小へと、世界政治の大きな流れの中で人類英知のひらめきが見える。だが、一度「骨肉の争い」ともなると、宗教的罪悪感も人間的英知もかなぐりすてて、なぜ血なまぐさい泥沼闘争にあけくれするのか。

それは理屈ではない、人間のもつ「ゴウ」のようなものだとしまえばそれまでである。たしかに放置せざるを得ない部分もある。指導勢力の頂点に立った。ついで、核武装をした旧ソ連がアメリカに対立する形で世界を二分し、東側の盟主となったのである。

全世界は東西いずれかの陣営に加わるか、または両極の間を微妙にゆれながら、あるバランスをたもつ。核抑止力の効果もあって、東西は緊張しながら直接の武力衝突は避けた。しかし、多くの国々で「骨肉の争い」に火をつけ、米ソは裏から介入することとなる。

代理戦争は半ば公然とおこなわれ、国連の表舞台では「冷戦」という名の対立関係が続けられた。ところが、軍事力をバックにした「乱世の平定」という構図は、究極の攻撃兵器／核とミサイルの高度化によって、皮肉にも、その影をうすめることになる。

核とミサイルの高度化によって、東西いずれの側からも核を使えなくなったのである。

南北ベトナムの内戦鎮圧に乗り出したアメリカが、七年もかけたあげく、結局、腰砕けになった一九七二年ごろの姿が象徴的である。

一九七九年アフガニスタンの内戦鎮圧に乗り出した旧



ソ連が一〇年かけて鎮圧できず、八九年全面撤退した姿も同様である。

両国が払った犠牲の大きさにくらべて、得たものがいかに少なかったか、その無力感は、実は今日の紛争や内戦の処理にもつながっている。軍事力をバックにした、大国による武力鎮圧という仕組みは、一般的にはもう成立しなくなったのだ。

一九九一年の湾岸戦争にしても、一月十七日から僅か三日で勝負をつけた。アメリカを中心とする多国籍軍は五〇万を半年かけて動員したものの深追いはせず、さっさと引き揚げている。

ただイラクに対する経済制裁やイラク軍機の飛行制限、核査察など国連決議にのせた締め付けはおこなわれているわけで、特殊ではあるが、新しい枠組みに属する。

今、世界中でおこっている武力紛争には、放置しておけない部分があることは前にも述べた。しかし、大国による「武力鎮圧」の仕組みはもうない。仮に、国連軍を強化して、国連事務総長の指揮下においたとしても、その戦闘能力はきわめて限られたものであり、「武力鎮圧」

## わが青春の一コマ

亀井弘次

「グライダーの訓練が始まるそうや」

「それに行けば、動員は勘弁してもらえら」

「陸士、海兵の一次試験合格者は優先的にやらせてくれるらしい」

渡りに舟と手をあげた。大空への憧れといった高尚な動機ではない。工場の騒音から逃れたい一心であった。

昭和十九年六月。川崎造船所へ勤労働員に引っぱり出された。朝から晩まで、ボルトのネジを切ったり、水圧試験をやらされたり、いい加減いやになっていたところである。

参加者は約二十名。それからというもの、弁当を持って武庫川の河原へ出勤することになった。

えらく威勢のよい、若い教官だった。

グライダーは、初心者用のプライマリーだ。

に成功する確率はゼロに近い。  
したがって、放置できない紛争の解決には人類の英知  
結集しないのである。そのところを、まず頭をひや  
してクールにしてから取りかかる必要がある。

滅亡への予見と、莫大な核装備費が経済力の足かせと  
なるという認識にたつて、核不拡散、核軍縮、核廃絶へ  
と世界政治の新しい枠組みが創りだされつつあるように、  
紛争当事国に対する対応策にも、新パラダイムを創りだ  
す必要がある。

すべてを国連で、という国連中心主義には、多々限界  
があることも、少しクールに考えれば十分理解がつくは  
ずである。そのうえで、紛争解決に向けての効果的指導  
力なり圧力のあり方に工夫がなされることが、人類にとつ  
ての新たな課題である。

パチンコの要領で、太いゴム紐を、エッサエッサと引  
張る。傾合いを見て、教官が合図をすると、シッポのと  
ころにある尾索を放す。と、サーッと滑走して飛び上  
る仕掛けになっている。なにしろ、オール人力だから、  
12〜13回引張って、やっと乗せてもらえることになる。

最初は地上滑走だけ。ついで地上2〜3メートルから  
5メートル、10メートルと、段々に高度を上げていく。  
なれないうちは、着陸がうまくいかず、どかんと接地し  
て、尻の痛い思いをしたり、左右のバランスがとれず、  
翼端で地面をこすって教官にどやされたり、と色々あつ  
たが、工場へ行っているより遥かに面白くて楽しかった。  
そのうちに、段々と上達し、ゴム紐をダブルにつなぎ  
合わせて、高度15メートルの直線滑空から、内緒で、教  
程にない旋回の初歩までやらせて貰えるようになった。  
なにしろ、風防も何もない機体に、ベルトで縛りつけ  
られているだけだから、飛び上がると、顔に猛烈な風圧  
がかかり、つらの皮が引き伸ばされるようになる。

いよいよ、3級滑空士の試験を受ける日が来た。本番  
前の練習で、T君が搭乗者になり、次の番の私は尾索を



支持していた。

教官の合図で手を離すと、機体は勢いよく飛び上がり、ぐんぐん高度を上げていく。と思った途端、突風にあおられたのか、失速した機体が大きく弧を描きながら、プーメランのように私の方に向かって落ちてくる。あわてて飛んで逃げた。機体は、翼端を地面について急旋回し、続いてどかんと叩きつけられた。

驚きの余り声も出ず、丁君のところに駆けつけた。てっきり、腰の骨でも折って人事不省になっていると思いつつ。ところがどうしたことか、彼はカスリ傷ひとつせず、ニヤリと笑ったのには、安心を通り越して、拍子抜けしてしまった。

余程彼はタフに出来ていたのか。あるいは強運の持ち主か。いずれにしても、3級滑空士の夢は破れ、兵学校入校の時期を迎えた。

この齢になっても、まだグライダーをやりたいと思うのは、あの頃の後遺症が残っているのかもしれない。グライダーには、上記のプライマリーの上級機にセカンダリー、ソアラールとある。

の技術開発競争に勝ち残るためだとすると、そもそも発想の段階から間違っているのではないだろうか。

エコノミック・アニマルだのワーク・ホーリックだのと国際社会から袋叩きに遭っているのに、さらに競争力を強化する改革なら、従来のアニマル路線から一步も出ていないではないか。教育改革はあくまで教育本来の姿に立ち返るのが目標でなければならない。

日本人は原理原則に弱いといわれている。基準がはっきりしないから外国人には理解し難い。成功すれば神秘めと言われるし、失敗すれば野蛮人扱いされてしまう。

三十年ほど前、南米のコロンビア共和国に駐在していた時こんなことがあった。コロンビアというと、コカインの本場、麻葉マフィアが暗躍するところでもない国だと思っている人が多いと考えるが、首都ボゴタの歴史は江戸の歴史より古い。コロンビアはなかなか侮り難い文化の持ち主である。

ある日、コロンビア人夫妻を自宅に招いて日本料理をご馳走した。ご主人は電話局の局長、夫人はボゴタ大学の生物学教授である。夫婦ともフランスに留学した経験

かもめのような恰好をしたソアラールとなると、飛行機に引張られて上空に昇った後、引索をはなし、大空に上昇気流を求めて、何時間も飛び回ることが出来る。

先日、テレビに、ハワイのレジャー用一人乗りソアラールの場面が出てきた。専門のパイロットが操縦をする。費用は確か50〜60ドルといった。これに是非とも乗ってみたいと思う。

青春の思い出を、かみしめながら。

## 社交術教育の必要性

北田 純一

日本の教育制度が間違っていることは今や定説になっている。しかし、その改革論議はまことに日本的で、本末転倒の愚を犯している。詰め込み主義を排し創造性を尊重するところまでは良いが、改革の目的が国際社会で

があり、夫人はバスツール研究所にいたそうである。

その夫人が、たまたま飾ってあった五月人形を目敏く見付け「これは何であるか」と質問してきた。

武者人形の説明は簡単に済んだが、鯉職が引掛かった。彼女は生物学教授の名譽にかけて、鯉の滝登りは承服しかねると言う。鯉は沼などの澱よどみに生息する魚で、急流には決して棲まない。時々水面上にジャンプすることはないかと言う。鮭の間違いで

それに、順番がお父さん、お母さん、子鯉となっているのも間違いで、魚が川を遡上するのは産卵のためだから、雌が先行し雄は後からついて行くのだと言う。

確かに彼女の言う通りである。しかし、こんな初步的な科学知識も持ちあわせないので言われては日本人の沽券に関わる。とはいえ、相手は専門音痴の大学教授。いくら伝承だの文学的比喩だなどと言いつても聞き入るはずがない。早々に議論を打ち切ったが、見事に一本取られてしまった。

しかし、考えてみると、確かに鯉の滝登りだの鯉がい



さぎよい魚だなどというのは極めて情緒的な話で、全く科学的根拠がない。誰がいつごろ言い出したのかわらないが、どうして幾世代にもわたって男児の節句には男らしい鯉職と思込んでいたのだろうか。あるいは彼女が言う通り、日本人は根っから科学的探求心のない民族なのかもしれない。

そんな日本人だから、戦後の復興期に、大量に必要となった産業戦士を速成するため、手っ取り早く必要知識の詰め込み教育を行ったのだろう。教育の基本が忘れられ原理原則がないがしろにされてしまった。

こういう日本に比べ、コロンビアは科学技術よりも人間関係を重視した教育をする。

コロンビアに赴任して最初に直面した問題は、小学校二年生だった娘の教育である。もちろん日本人学校はないし、アメリカンスクールは日本人を入れてくれない。

幸いにもヒムナシオ・フェミニノ（女子学校）という名門女子校を紹介してやろうという人が現れて、私を校長先生に引き合わせてくれた。

挨拶してみせたことである。

西洋人の子供はもとも可愛らしいが、挨拶のタイミングの良さ、はきははした言葉遣い、それに優雅な身のこなしには目を見張るものがあった。

学校教育の成果なのか、それとも家庭がしっかりしているのか。とにかく相当な訓練を経て身につけたものであることは確かだ、この国の躰教育の徹底ぶりには驚嘆せざるを得なかった。

日本人の子供なら親に促されて渋々コンニチワと挨拶するのがやっつである。私の娘を含め、日本人のマナー教育は全くお粗末極まりない。一体、両国のどちらの教育がより進んでいると言えるだろうか。

童女たちのスペイン語は聞き取れなかったが、見てみると、どうやら娘が今日学校で貰った教科書にカバーをかけ名前を書いてくれているらしい。先生の指図だろうとは思いますが、それにしても、小学校一年生が言葉の分からない初対面の外国人の家に押しかけ、いろいろと面倒を見るのだから、命じる先生も立派だが、ちゃんとやるのける子供も大したものである。どう考えても日本の

校長はドニャ・アナ（レディー・アン）という立派な中年婦人であった。ドニャというのは貴族の尊称で、貴族のいない南米では専ら身分の高い婦人を呼ぶときに用いられている。

「ご息女はスペイン語を解されるや」

「否、日本語も定かでない」

「ならば幼稚園コースに入れるのが妥当と思うが如何」

「否、学校は学業よりも友達をつくるころである。幼稚園では年齢が違いすぎ友達が作れない。」

「ティエネ・ラソン（その通りだ）。ならば一年生に編入しよう」

というわけで即日入学を許可してもらった。

最初の登校日、泣き虫の娘は当然泣きながら帰って来るものと覚悟していた。ところが、数名のクラスメイトに伴われニコニコしながら帰ってきた。

それだけでもほっとしたが、さらに感心させられたのは、童女たちが一斉にスカートの端を摘んで腰をかため「ブエノス・ディアス・コモ・エスタ・セニョール（今日は、小父さん）」と、満面に微笑を浮かべて一丁前に

小学校一年生には出来そうにない。コロンビア人の方が能力が高いのだろうか。コロンビアの教育の方が程度が高いのだろうか。私はすっかり考え込んでしまった。

ある日、娘あてに次から次に電話がかかってきた。その日、娘は学校で教科書を朗読し「スペイン語が立派に読めるようになりましたね。良くできました」と先生に褒められたのだそうである。電話はそのことを祝うクラスメイトのものであった。なにしろ、ほとんどクラスの全員が電話してくるのだから、日本ではとても考えられないことである。

このように、コロンビアの学校は助けあったり喜びあったりすることを徹底的に教えるのである。日本の学校が子供の競争心をあおり、知育一辺倒であるのとは全く違って大違いである。

ヒムナシオ・フェミニノが特別なお嬢さん学校だからそうなのか、それともドニャ・アナの教育理念がしっかりしているのか、またはコロンビアがカソリック教国だからそうなのか。おそらくその全部が理由だと思われるが、コロンビアの小学校では算数や国語などの知育より



も立派なレディーとしての躰教育の方が重視され、その結果、あどけない童女にして早くも日本人の大人でも敵わない見事な社交パフォーマンスを体得しているのである。

一方、日本の小学校はどうであらうか。娘は帰国してすぐに普通の公立小学校に転入学した。だが、一週間もたたないうちに、「みんなで苛める」と言っついに学校へ行かなくなってしまった。理由は娘が変な日本語を喋るからで悪意はないが、日本人は先生も生徒も思い遣りに欠け、人の心に鈍感すぎる。

妻が思いあまって白百合学園に頼みこみ、途中編入させて貰った。娘はマスール(修道女の先生)が「オーバーコートをお召しになって」と言っつたから白百合は良い学校だと喜んで通うようになった。

ヒムナシオ・フェミニノも白百合も、共にカソリックの学校だという共通点もあっただろうが、娘には不躰な公立校の雰囲気がい慢出来なかつたに違いない。

躰を無視した教育で成長した日本人が海外でいくら知識をひけらかしても、身についた品位がなければ決して

社会的尊敬を受けることはないだろう。

社交術というと、日本人は何か善からぬことを連想するが、マナーと言い換えれば人と人との関係を良好に保つ重要な潤滑油であることに気付くだろう。複雑な現在の社会を円滑に保つためには社交術は欠かすことのできない技術であることを何人も否定出来ないだろう。

戦後の日本は産業戦士の育成を急ぐあまり、教育が科学技術に偏り、社会の潤滑油とも言うべき社交術をなおざりにしすぎた。その結果、競争心ばかりが強く、人と仲良くやっていくことも、人生を楽しく味わうことも出来ない唐変木ばかりが育ってしまったのではないだろうか。

早急に教育の原点に立ち返り、技術と社交術のバランスをとらなければ、本当に味も素っ気もない日本になつてしまひ兼ねない。

## カン告知

木村 親

旧制中学校の同窓会に出た。だれ言うとなく「還暦記念文集を作ろう」という話になった。六十歳という年齢は、社会的にも一つの区切りであり、肉体的にも壮年から老年への移行の節目である。この辺で人生を一括りして見たいという気持ちはだれしも持っている。全会一致で取り掛かることになった。

その中で、私は「美しく老いる」という小文を書いた。私が一番嫌な言葉は「老醜」の二字である。肉体的に老いるのは仕方がないにしても、清々しさの漂う老年を過ごす…、またそのための努力を惜しまないというのが、六十歳を迎えたときの私の気持ちであった。六年前のことである。

× × × × ×

最初のアタックはそれから三年後にやってきた。六月

の長女の結婚式を控え、家族全員がハワイ・マウイ島のカパルアに集まって、のんびり過ごそうと計画した。商社勤めで忙しい長男も何とか休暇を取って参加した。

カパルアはマウイ島の西北端にあるリゾートで、カパルア湾はハワイの中でも、二番目に熱帯魚が豊富な場所である。カパルア湾を望んで立っているカパルア・ベイ・ホテルは、ワイキキなどの喧騒を離れた静かな優雅さで知られている。

カパルア湾自体は、ヤシの樹と白砂に囲まれた、美しくはあるが何の変哲もない入江である。だが、いったんゴーグルを着けて水中をのぞくと、数十種類の極彩色の熱帯魚が乱舞している。フェアリーテールの世界である。特別な高等潜水技術はなくても、浮輪とスノーケルとゴーグルだけで夢の世界に遊べる。

素人の私も、明るい陽光の下でたっぷりスノーケリングを楽しんだ。

ショックがやってきたのは、その後だった。

ゴーグルの中に入った海水を捨てて、もう一度掛け直したときに起こった。何か鈍い、しかし奥深く突き刺さ



るような鈍痛が鼻柱の横を走った。それまで経験したことがない異様な痛みである。何か嫌な予感が走ったのは、今から考えると自衛本能ともいえる警告だったのだろう。

× × × ×

帰国後、嫌な予感に押されて病院の診察を受けた。初めの病院では何ら異常はないとの診断だった。納得出来ないで病院をハシゴ。三つ目の病院で粉瘤と診断された。粉瘤とは脂肪が皮膚の中に袋状にたまる一種のオデキである。

カバルアの海岸での不吉な予感をすっかり忘れて、月一回の通院を続けたが、オデキは悪化の一途を辿るばかり。文句を言ったら、耳鼻科から皮膚科に、それから外科へと、いわゆるトライ回しになった。その挙げ句、外科の先生は一目見て、即刻手術が必要と宣告した。

年が明けて入院。すぐに手術を受けた。左の小鼻の上をちょっと切除するだけの簡単な手術で、術後一週間もすれば退院できるとのことだった。生まれてから外科の手術など受けたことがない私にとって、手術室の光景は珍しい方が先だった。テレビドラマの主役にでもなった

T先生は心配そうに私の顔をのぞき込んだ。

「有り難うございました。それにしても、眼だけは何とか助けていただけませんか」

これがいわゆる「告知」というやつか、と思った。それにしても、眼と鼻を取ってしまえば、

ナースステーションから、どのようにして病室に帰ったか分からない。

鼻のない顔ってどうなるのか。小学生のころに見た、梅毒で鼻の落ちた人の顔を思い出しながら、鏡に鼻を映した。そんなに高くもなく、鼻筋が通っている訳でもない。ただ、在り来たりの鼻だが、六十余年、私の顔の真ん中において、私の人生に君臨してきた。幼いころの娘や息子が膝に乗っては摘まんでいた鼻。それがなくなる…。取り留めのない想いにふけてみると、いつの間に来たのか、担当の看護婦さんがベッドの傍に立っていた。

「何とも申し上げがありませんが、先程平静に告知を受け止められた態度には、私たち看護婦一同、感激いたしました」

と、慰めてくれた。そして、

積りで、はしゃぎ気分で手術台上に登った。

ところが、手術後一週間たった日の夜、担当医のT先生に呼び出された。看護婦がナースステーションへどうぞというので、「ああ、退院の打ち合わせかな」と軽い気持ちで赴いた。

いすに座った途端に、T先生が淡々とした口調で話し出した。

「実は若干気になったので、切除部分を組織検査に回したんですが、今日その結果が分かりました。残念ながら、悪性の腫瘍と判断されます」

「悪性って、ひょっとして、ガン？」

「そうです。扁平表皮ガンの細胞が発見されました」

「それで…、どうなるのでしょうか」

「鼻は全部切除し、左頬と副腔も切除することになるでしょう。手術して見ないと何とも言えませんが、場合によっては、左目も取ることになるかも知れません。今まで拝察していて、あなたなら、はっきり申し上げた方が良いと思いましたが、本当のことを説明した次第です」

「要らないかと思ったのですが…」と言いながら、睡眠剤をくれた。そのお陰でようやく眠りに就けた。

× × × ×

手術は容赦なく行われた。

麻酔が覚め、意識が戻って、一番初めにしたことは、まず鼻に触って見ることであった。しかし、当然のことながら、手に振れるガーゼの下には、何もなかった。予定通り私の鼻は永遠に形を亡くしていた。

「病巣はギリギリまで切除しましたが、眼は残しました。百パーセントとは言えませんが、まず大丈夫と思います」

主治医は「手術後の顔を見ますか」と聞いたが、固辞した。自分でも比較的気に入っていた目鼻立ちが、無残に破壊された姿は、どうしても見る気になれなかった。

顔面復元の形成手術は二か月後になるというので、いったん退院することになった。ただ、傷口のガーゼ交換は毎日行う必要がある。

「一体だれがどのようにして行うのか」

「奥さんにやってもらえば良いでしょう。やり方は充



分に指導して置きますから」

紆余曲折はあったものの、結局は女房がやってくれることになった。

家に帰った翌日、ガーゼをさっと取り去った瞬間、ハッと息をのむ気配に目を開いてみると、ピンセットでガーゼをつまんでいる妻の眼からホロホロと涙が滴り落ちていた。妻の心中を思っ、告知以来初めて私の目にも涙がにじんだ。

× × × × ×

顔面復元手術が完了したのは、最初の手術から一年三か月後であった。最長十二時間の手術を含め、数回の手術を重ねて一応の完了を見た。

左腕の皮膚でまず左頬を作り、額の皮膚で鼻を作った。最近の形成技術の進歩は驚くべきものがある。自由自在に切り張りして形成を行っていく。

「身体髪膚、これを父母に受く。敢えて毀傷せざるは孝の始めなり」

と言った孔子が現在に生きていれば、目を見張って、自らの意見を訂正したに違いない。

## 稽古場は役者の道場

きりん・たかし

「おっさん」。劇団員の誰もが、親愛の気持ちを含めて呼んでいた。「稽古場は役者の道場」……これが文化座の思想であり、理念であった。稽古場での佐々木隆は、仁王のごとく吼え、人間心理の壁の奥深く入り込むまで、飽くことなく俳優達に演技指導した。生きた人間が表現されるまで、執拗に食い下がる演出は、手抜きや妥協を許さない。

『科白は口先だけで出すもんじゃない。「お母あが死んだ！」自分の最愛の人が死んだんだ、身体が引き裂かれるような気持ちから、声が出てくるものでしょう。沈痛な、体全体からしぼり出されてくるものでしょう。金魚が水槽の中で、パクパクやっているような科白にはならない筈だ！　そうでしょうが……！』

しかし、いかに巧みに作られていても、父母からもらい、自らの人生経験を積み重ねて来た顔に比べると、見劣りするのはいやむをえない。

ガンの療養生活は闘病と言われるが、とてもそんな生易しいものではない。自ら戦おうとしても、戦いようがない。一方的に攻められて、新たにガン細胞が発生すれば、それを除去するだけである。除去し損なえばそれまでである。いつも、次の発生が致命的な場所でないことを祈りつつ、ただ待つしかない。しかも、除去するたびに、何らかの後遺症が発生する。私も、その後三回の手術で、嗅覚と味覚の大半を失い、左頬は笑っても動かない。

最近、こんな言葉が私の心を捕らえた。

「自分を見つめたいなら、鏡を見てはならない。そこに映るのはただ影なのだから」

シレニユース 真実に寄せる歌

出番を待つもの、見学している人達も、「おっさん」の熱っぽい演出に、引き込まれてゆく。私語を囁く者さえいない。稽古場は、演出家と俳優の真剣勝負の場であった。

時には、上演台本の一ページ目から全然進まず、毎日、同じ俳優の同じ科白だけの稽古が続くこともしばしばだった。俳優と演出家の根くらべだった。泣き出す俳優もいる。すると、『泣いて芝居ができるのか！台本に、ここで泣けと書いてあるのか！君が泣いているのは、水ヘンに立つ、つまり、女の立ち小便と同じだ。泣くにしても、涙を流す泣き方もあるし、涙が一滴も出ない泣き方もある。その時の状況で、様々な表現がある。この台本の役どころを理解することが先決なんだ！わからないければ、何回も何回も読み直してみるんだ！』おっさんの演出は男女の差別もなく、厳しく容赦しなかった。初日から終演日（楽日）まで、おっさんのねばっこい舞台作りは続き、駄目出しがおこなわれた。

そして、「僕の三分の一は、井上正夫で、次の三分の一は三好十郎で、あとの三分の一が佐々木隆だ」と語っ



ていた。

## 二

昭和十七年二月二十六日、井上正夫演劇道場の若手俳優達（山村聡、山形勲、山形三郎、荒木玉枝、鈴木光枝）は松竹の商業主義的な傾向にあきたらず、演出の佐々木隆を中心に文化座を結成した。創作劇を積極的に取り上げた。しかし、戦局は激しくなり、中国東北部（旧満州）に疎開を命ぜられ、慰問劇団として活躍した。

昭和二十一年、命からがら日本に帰国した。その日の糧を得るため人々は四苦八苦していた。こんな世相の中で、映画・演劇は唯一の娯楽として連日大入り満員の盛況であった。しかし、「おっさん」が目にした新劇界は、翻訳劇一辺倒なのに驚かされた。たとえ、連合国軍（GHQ）の占領下とはいえ、創作劇に取り組もうと決意した。戦前から交遊のあった数人の劇作家を尋ね歩いた。そこで、三好十郎と再会し、「その人を知らず」の作品を知ることが出来た。この作品は、町工場で働く青年が、徴兵を拒否、キリスト教信者として意志を貫いた、共産主義者でもない一市人がいたという事実には、作者は

畏敬しつつ書き上げたものである。「おっさん」は直ちに上演を決意した。

ところが、当時はGHQの検閲があり、いかがわしい作品ではないかと疑われ、三好十郎と佐々木隆はGHQに再三出頭させられた。勿論、書き直しやカットされた箇所も沢山あった。一時は、モンキーハウス（米軍の留置場）に入れられることも覚悟しながら、検閲官と論争を続けた。そんな状況下にあったため、他の劇団は、外国の翻訳劇を取り上げた方が無難だったわけである。開演日の数日前に上演許可が出たが、科白直しに取り組みねばならなかった。山形勲と山形三郎による芝居は、演劇史に残る名作の一つとなっている。

## 三

スポンサーが持てない新劇団は、上演する度に赤字で、その赤字を埋めるために、ラジオ・映画の出演か、地方巡業公演によって稼ぐ他なかった。しかし、生活の苦しい状態からは脱却出来ないでいた。そんな時、演技者として円熟し始めた山形勲が結核で倒れた。三年間の闘病生活を経て文化座に復帰したが、経済的に恵まれない中

堅勇優達が、山形勲と共に退団した。

「おっさん」とっては分身を失ったも同然で、この時ばかりは、稽古場に姿を現さず、酒を飲んで荒れていた。次回の公演のメドさえたらず、劇団が消滅してしまふと、囁かれてもいた。

ところが、事態を憂慮した若い研究生達（鈴木昭生、森幹太、加藤忠（研究一期・二期生））が立ち上がった。マネジャーを買って出て、各放送局を回り、ラジオ出演を依頼し始めた。「おたくの劇団は売れる役者がいない」と拒否されながらも、毎日毎日通い続けた。

たとえ、ギャ（端役）でも、台本を貰い、無名の新人の登用に努力していた。ちょうどその頃、中国から帰国した映画界の巨匠・内田吐夢が佐々木隆を訪ねてきた。二人は旧交を温め、内田吐夢は劇団の後援会長を引き受けた。更に、内田吐夢の帰国第一作は新東宝でメガホンをとることになり、小杉勇、島津恵子主演「たそがれ酒場」が決定した。文化座全員三十五名も出演出来ることになった。新東宝は当時、資金不足で、撮影所の所長が、早撮りの名人渡辺邦三監督であった。「たそがれ酒場」

はロケーションなしの、スタジオ内のワンセットという設定での映画作りとなった。経費をかけない安い映画作りの見本でもあった。

一方、著作権の期限切れとなった森鷗外や菊池寛等の作家の作品を脚色し、「高瀬舟」「仇討以上」等を、ラジオ・ドラマのニット作品として仕上げた。こうして文化座は経済的に稼げる劇団として一步一步成長した。やがて昭和二十七年には、GHQの占領時代も終わり、検閲制度も廃止された。

## ペンペン桜

小林 正憲

明日は台風に見舞われそうだ、ひょうたん島へ行く船は十時に出航する、今日はそのあとの船便がないので、これに乗らなければ目指すペンペン桜が眺められないだ



ろう。

いま九時である、ここから埠頭まで歩けば五十分以上かかるので、三十分前にはゲートを通らねばならないからちょっと無理だ。

そのときリーダーの六木(ムツキ)氏が声をかけて駆け出した。「みんなで助け合えば大丈夫だ、とにかく行くこう」、群衆のなかから四十名が六木氏に従って走った。

群衆というのは高齢者の旅行団である。そのなかで特にペンペン桜にご執心な者たちがついていったが、この人たちには個人差があった。六木氏のように体力があふれた人もいるが、足が悪かったり心臓が弱くて息切れしたりで、満足に駆けられない人が大部分である。

六木氏は比較的強そうな人をサブリーダーにして、「荷物を持ってやれ」、「靴を履きなおせ」、と叱咤激励しながら、自分もたくさんの荷物をついで進んだ。それでも途中で落伍したり、六木氏に叱咤されて隊列をはなれる者がかなりでた。

一方、船に乗ろうとして駆けているこの集団を見つけて途中から隊列に参加する者もいた。いずれもペンペン

いった。

また、男女に分かれている船室の空気が、女性の方にしかなかったので、一人の男を女にしてみました。乗船後にそれを知った本人はふんまん遣る方なかった。

まぎれこんだならず者に言い掛かりをつけられたこともあったが、忙しい六木氏が簡単に蹴ったので、「ならず者が復讐を考えるかもしれない」と言って心配する者もいた。

いささか乱暴ではあったが、いずれもこうしなければ全員が船に乗れないと考えた六木氏の善意の焦りからおこったことである。

改悪でも、じっとしているよりはましだ、と主張する六木氏は、積極的なものごとを先行させたが、それが独断的につり、「六木商店の慰安旅行じゃあないんだぞ」といいます者もいて、次第に反発が潜在した。

六木氏がそこまでしなければ、みんなが船に乗れなかったかどうかは結果論であるから分からない。

みんなが一生懸命に走ったようだが、この集団には泣きどころがあった。なんといつてもみんながご老体であ

桜に関心があるので船に乗りたいたいと思った人たちである。

六木氏たちは快くその人たちを迎えた。人数が多い方が埠頭に着いたときも目につきやすく、船の側でも多少の便宜をはかるだろう、という目算であり、途中から参加した人たちの心根も同じだった。

そんなわけで、去る人があっても加わる人がいて、人数は若干ふえた。

とにかく出航に間に合い、ひょうたん島のペンペン桜をちょっとだけが見ることができた。しかし、本当の桜の美しさは険しい山の上にあるので、これからの山登りは容易なことではない。急いだ疲れもあるし、船酔いが残った者もいる。まさに前途多難である。

いろいろなことがあった。実際に埠頭に着いたのは規定の時刻より数分おくれたが、大勢が走ってくるのを見付けた係員はゲートをしめないで待っていてくれた。

先についた六木氏は、みんなが着くまでに全員の乗船名簿を書いた。ところが、分からない人の名前を勝手に偽名でかいて、自分ではハンサムだと思っているご当人が到着すると、「おまえは鬼太郎だ、そう名乗れ」、と

る。歩きかたの癖もさまざままで歩調があわない。そしてペンペン桜を見たいといふものの、桜を見ないからといって生活に影響があるわけではない、いわば物見遊山で迫力が乏しいのである。

そうは言っても、この人たちは比較的仕事に忠実だった。仲間の荷物運びや船室の割り振りなど、それぞれが苦勞しながらも分担した。今の若者ならば気の合った者だけでグループをつくり、要領よく先がけをしてしまいうようなときでも、その気配はなかった。

一方、みんなが一緒に行動するためには、組織を作ったり規定をもうけたりすることには殊のほか熱心である。聞くところによると、このメンバーは、昔はサラリーマンだったらしく、しかも、かなりの地位にいた者が多いから、タテ社会で命令をする立場に慣れている。

無理をして乗船させてもらったので、若い船員のいうことを聞かねばならないが、それは我慢するとしても、意地や面子があるから仲間同士の調整が大変である。ヨコ社会の長所も頭ではわかるが、上手に取り入れることが出来ない。



苦勞は買ってもするものだ、という世代感覚を持ち合わせているが、歳のせいでは身体が動かない。

島に着いてからは、不満がだんだんに表面化していった。「すこし休んでから山に登ろう」と言いだす者や、「ほかの方法で登ろう」「山に登らなくてもいいじゃないか」「遠くの桜を眺めて宴会をしよう」と言いだす者もあらわれて、積極的に六木氏に従う者がいなくなり、六木氏はいらいらした。

とうとう六木氏が、「誰か勝手にやれ、俺はリーダーをやめる」、と言いだしたときに目がさめた。

ここまでお読み戴いた方には申しわけないが、この話は昨夜私がみた夢である。

企業OBベンクラブという集団がある、企業をリタイアした人たちが社会にも申そうと筆をとった。私も末席に加えて戴いているが、ペンの道は素人であり年老いている。

出版界も不況で、欠航を余儀なくされる台風前のよう

「よう来てくれた。日本の代表的会社と直接に取引するのがワシの夢じゃった。昔のカタールは貧乏で、時おりボンベイからくるインド人行商人から買っていたが、インド商人には随分ばられたものだ」と、初っ端からオーブンかつ豪快に喋る。

一九七七年の暮に、ジャーセム翁に初めて会ったが、翁は七十歳の半ばをすぎていた。商事会社や自動車輸入販売業など手広く事業を展開していたが、会社の実務は、長男のユーセフおよび他の息子たちに分担させて、翁自身は第一線から引いていた。

体験豊かな翁の昔話やよも山話は、なかなか面白い。だから、駐在先のクウェートからカタールへ出張して、翁と面接するのが楽しみになった。

ダーウィシユ家は、古くから相当な商家で、真珠採取船も所有して真珠玉の商売を大きく手がけていた。このような商売柄のために、翁は、若い頃からダイバーに交じり、真珠採取の苦勞を味わってきた。

ダイバーの仕事は、生やさしいものではない。足に石重りをのせて一〇メートルあまりの海底へす早くもぐり、

な気配である、これからが大変だ、と思いつながら寝てしまったので、ペンペン桜の夢をみてしまったのかもしれない。

### 忘れ難い人

三 枝 亨

海外の駐在から帰るとき、その土地の友人たちから思い出のよすがにと、珍しい土産をいろいろ貰った。

その中に、カタールの老友、ジャーセム・ダーウィシユ翁から贈られたアラビア湾の天然真珠がある。「ワシが若い頃採った」という真珠は、小指の先ほどの大きさだが、薄墨いろの美しい玉である。

この真珠に比べると、老友は粗野なベドウィンの風貌を擁していたが、付き合えば付き合うほど魅力が増す砂漠の紳士であった。

そしてアコヤ貝を探し集める。

大食いはダイビングによくないので、朝食や昼食は、ナツメ椰子の実を数個とお茶一〜二杯の簡単なもののみませる。シーズンは、五月中旬から九月中旬までの酷しい盛夏で、この間毎日、日の出から夕方まで何回となく潜水作業を繰り返すのである。

さらに日没後、採った貝を開く。それを終えてから漸く夕食となる。夕食はお米のご飯に魚などのカレーで、これがダイバーの唯一の楽しみである。

真珠がとれる確率は、日々まちまちで、アコヤ貝一、〇〇〇個に一つということもある。大粒に出合つと、どっどと歓声があがり、疲れがふつとぶ。

真珠採りには、確かに海のロマンがある。だが、その裏には強靱な体力と、言葉に絶する忍耐がある。昔のアラブ人は、このような過酷な仕事によく耐えてきた、と述懐する。

そう言えば、古い写真にみられる昔のアラブ人は総じて、骨と皮とに痩せこけて、目は鷹のように鋭く、あごには針金のような髭を生やして、見るからに精悍な構え



である。ジャーセム翁は、この古典的な風貌を有していたが、市中に出会うアラブ人には、ただ飽食ででっぷり太り、目もまなじりがだらりと下がって、精悍という言葉とは全く縁遠いというものが多い。アラブ人は様変わりである。

天然真珠の採取業は、日本の養殖物の出現や一九二九年の世界恐慌のために没落の道をたどる。そして、続く石油の発見が湾岸の、この伝統的な産業にトドメをさした。すなわち、ダイバーたちは、酷しい苦海から楽に儲かる陸に上がっていった。

ジャーセム翁は、真珠船に乗りこんだ頃から、このアラビア湾の天然真珠の蒐集を始め、それがいつの間にか素晴らしいコレクションになる。天然真珠を採るものが少なくなるにつれて、希少価値が増し、翁自慢の宝物になる。

翁には、もう一つの宝物がある。子だくさんである。私に知られるのが恥ずかしいのか、最後まで触れなかったが、長男のユーセフによれば、長逝した妻を加えて計七人の女性と結婚した。勿論、聖典コーランの教えに従

い、同時には四人以内である。

これらの妻たちとの間に、男女計三十七人の子どもをもうけた。末子は翁が七十歳過ぎて生まれ、孫よりも小さい。この末っ子を可愛がり、その溺愛ぶりは、翁は私との面談中に末っ子が顔出しすることを許すほどであった。

ところが、真珠のコレクションのことにすると、話が変わり、この末っ子にもタッチさせない。「親父は、どうしたことか子供よりも真珠のほうが一段と可愛いようだ」とユーセフが苦笑する。そして、翁自身で後生大事に真珠のコレクションを日々管理する。

このように大切に扱ってきた真珠のコレクションであったが、思いがけないことから、そっくり国王に献上する破目になる。

当時、カタル政府は国造りの一環として、民俗博物館を建設していた。後世に貴重な民俗資料を残し伝えるのが狙いである。しかるに、陳列品の目玉の一つと考えていたアラビア湾の天然真珠は、八方手を尽くして探したが全く集まらない。もう売り物がなくなっていた。

そこで、ジャーセム翁に白羽の矢が立った。ある時、翁が慣例に従い、ご機嫌伺いに王宮を訪ねると、国王から翁に対して直々に「お金は出すから、真珠の集買を頼む。お前の知恵と力を貸してくれ」と懇請があった。

そのとたん、翁の背筋に冷たいものが走る。結論は分かっている。だが、満座の中で国王に頭を下げられては、むげに断れない。暫くの間、あちこちと心当たりを探したが、やはり予感通り、全く不首尾におわる。

だが、かつて真珠王と言われたジャーセム翁としては、今さら集まりませんでしたと答えられない。また長老としての面子がある。そこで、思い切って「コレクション」をそっくり寄贈することにした。

家重代の宝物ともなるべき天然真珠のコレクションを、あっさり献上する、と聞かされて、ユーセフ他息子たちがびっくり仰天した。だが、平然として翁曰く。

「確かに苦勞して集めた真珠じゃ。しかし、この献上で、真珠たちもよき安住の場所を得る。その上、ワシの名も共に残る。めでたいではないか。アラアの神のお陰じゃ」と、悔いることなくさばさばしている。

アラブ人は、金銭問題にはトコトン酷しい徹底した商人根性の持ち主であるが、同時に誇り高き名誉を重んじる民族である。ただ、あくせく稼ぐにおわらず、必要に応じて儲けた利益の一部をもって、いさぎよく社会に貢献する。こういうことを誇りにする伝統がある。

こういう古典的なタイプなので、ジャーセム翁は会社では煙たい存在である。また、翁の話には、よく「今の若いものは苦勞を知らぬ」という訓話のオチが伴うので、会社では敬遠されていたらしい。ところが、アラブに興味を覚えはじめた私には、翁のよも山話は、ちょうどよい勉強の材料となるので、積極的に聞く。これが翁には嬉しかったのであろう。

「次回はいつくるのか」と、話相手として私を待っていてくれた。このようにして、翁とは意気投合して、別れるとき、分身のアラビア湾の天然真珠一粒をくれた。一昨年の暮、クウェートの友人を訪ねた時、ジャーセム翁と真珠を思い出したので、帰途カタルに立ち寄った。

「ちょっと遅かった。ジャーセム親父は、ずーっと元



気ですごしてきたが、三か月前に、バツタリ倒れて、そのまま天国に行った。九十三歳だった」と、長男のユージェフに残念がられた。

もう一度ジャーセム翁に会いたいと念じながら、気がつくと、すでに十年あまりの歳月が流れていた。そして、カタールでも、ユージェフの他には知り合いもいなくなり、すんでのところ浦島太郎になるところであった。

## 北の王国

齊藤 勤

青森県西部の津軽半島の日本海側に十三湖という平凡な湖がある。この湖を村内に持つ市浦村より、戦後「東日流（ツガル）外三郡誌」なる書物が「市浦村史資料編」として出版された。

前九年の役の主役、阿部貞任の子孫と称する、秋田孝

を求める、畿内政府との戦いの歴史でもあった。七世紀半ばころより始まった畿内政府の北方経略は、九世紀はじめの坂上田村麿等の活躍で、九世紀の終わりに現在の岩手、秋田両県の全域を、ほぼ支配するに至った。この時期における、正史に記載された津軽の記事は極めて少なく、斉明記（六五八〜六六〇年）の阿部引田臣比羅夫の遠征記事、養老四年（七二〇年）渡島津軽津島の靺鞨（マツカツ）国派遣記事、貞観十七年（八七五年）蝦夷が水軍で出羽国秋田郡などの襲撃記事等である。ただ、これらの記事より、後の安東水軍王国に至る基礎が徐々に形成されつつあった状況が見られる。

津軽十三湖のほとり、十三湊を本拠として、十五世紀初頭に至る中世の水軍王国を築いた安東氏に関しては、その出自についても疑問が多く、その一族の活動が長期かつ広範囲であるため、それらの相互関係を調べ、異同を明らかにするのは極めて困難である。

安東氏の初代は、阿部貞任の子高屋（安東、秋田、藤崎系図）とされているが、別の名を記す系図もある。いずれにせよ、津軽の豪族たちは、奥六郡の覇者、阿部一

季とその縁者の和田長三郎が、十八世紀末から十九世紀はじめにかけて、古代東北の歴史、民俗の資料を集めたもので、長く和田家に秘蔵されていたものとされている。この書物は、明治中ごろに加筆せられた形跡がうかがわれ、高い評価はされていない。

同書によれば、伝説の神武天皇と戦って敗れた長髓彦（ながすねひこ）は、その兄、安日彦と共に東日流に退き、稲作を教え、荒朝吐（アラハバキ）王国を建て、安日彦を初代国王にしたと伝えている。

津軽の稲作の歴史は古く、弘前市郊外の砂沢遺跡から紀元前後の水田跡が発掘された。科学技術の発達した現代ですら、冷害の影響が大きいことを思えば、古代の稲作の定着には数世紀を要したものと考えられる。

また、アラハバキの名は、関東より東北一帯にかけて多く見られる神名で、正史に記載されない性格不明の神であるが、蝦夷（エミシ）の神であるとされ、最近特に注目されている。

古代の東北は、蝦夷の国として、畿内の中央政府にとっては異国であった。古代東北の歴史は、豊富な鉱物資源

族の血を受け継ぐことで、家格を高めようとしたものと思われる。

近時、岩木山麓一帯で、平安時代の多くの製鉄遺跡が発見された。その規模から、これらは北海道を含む北日本一帯への鉄製品の供給源と推定され、十三湊を中心とした交易により、富が蓄積され、安東水軍王国に発展したものとと思われる。

十二世紀には、安東水軍は平泉藤原氏の日本海交易を担ったものと思われる。平泉三代の秀衡の弟、秀栄が十三湊に養子として入り、神社、仏閣を建て、湊を整備し、大船を建造したと伝えられている。北条幕府の時代、蝦夷管領に任せられ、日ノ下將軍または日ノ本將軍と自称するようになった。十三〜十四世紀はじめには、十三湊は壮大な福島城と十三千坊と称される多数の美麗幽玄な神社、仏閣、多数の商家、民家を有する大都市であり、湊には、本土各地の船、異国の船が多数入港し、東日本随一の繁栄を示した。その交易圏は、中国大陸はおろか、南海にまで及んだと伝えられ、「十三往来」等の多くの文書に記されている。北の王国―蝦夷王国の最後の輝き



とも言うべきものであった。

鎌倉末期の元亨(ゲンコウ)二年(一二三二年)から嘉暦三年(一二三八年)にかけて、中央で蝦夷蜂起と認識された、いわゆる津軽大乱という安東一族の内乱が起った。この内乱は、執権高時の時代であり、二度の派兵の不行際等、北条幕府の弱体化を証拠だてた事件であり、幕府滅亡の一因となった。同時に、安東王国の落日の始まりでもあった。

興国二年(一三四二年)八月、十三湊は地震と大津波に襲われ、湊とその周辺は一夜にして壊滅した。死者数万と伝えられている。安東一族は蓄積された財力をもって、復旧をはかったが、湊の回復はならず、再び昔日の繁栄を取り戻すことは出来なかった。

応永十七年(一四一〇年)南部守行は関東管領より陸奥守兼国司に任ぜられ、津軽合併の兵を進めた。爾来三十年、嘉吉三年(一四四三年)ついにこれを掌握し、安東一族は北海道の松前と秋田に逃れ、北の王国は滅亡した。即ち、蝦夷の地は、完全に畿内政府に併合され、室町幕府は本州以西の統一を達成した。

縄文時代の意識につながると考えざるを得ない。

特に、十三湖の南、亀ヶ岡は三千年前、縄文文化の発達の極限とも言われる亀ヶ岡式土器を出す文化の中心地帯であることは、何かの因縁を感じさせるものである。

北の王国、それは日本の先住民である蝦夷が最後の光を放った舞台であった。王国の滅亡は、蝦夷の名も北へ移す結果ともなった。

現在の十三湖は、訪れる人も少ない過疎の、寂しい村落である。最近の発掘は、かつての北の王国の栄光を偲ばせる遺跡を、ようやく人々の前に表し始めている。

秋の一日、半島の先端、竜飛岬より十三湖へ車を走らせた時、海に沈む壮大な落日に遭遇した。この太陽こそ、縄文文化の華、亀ヶ岡文化の盛衰を、最後の蝦夷文化―北の王国―安東一族の栄光と没落とをながめた太陽と同じ太陽であった。

明治の世になり、秋田家は華族に列せられ、宮内省に自家の系図を提出した。それには、

兄 安日王  
弟 長髓彦

安国 安日後孫

致東 号奥州日下將軍

安東

長国

高丸

継人

安堯

国東―頼良―頼時―貞任―高星……

とある。多くの大名家がその先祖をほとんど源平藤橘に求めているのに対し、ひとり秋田氏が初代天皇と伝えられる神武天皇と争った、長髓彦の兄の安日を系図の筆頭においた系図を提出した。この異族の末裔を敢て宣言して恥じることのない秋田氏の精神の奥には、先住民族としての蝦夷の血と、その誇りの意識が流れているためと推測される。この先住民意識は、約一万年の時間を持つ

## OA機器の変貌

佐份利 治

昨年(一九九三年)秋、ちょっと新しい経験をした。十数年愛用してきた電動タイプライター(オリンピア)の調子が悪くなったので、修理に出そうとした。

ところが、八年前に一度修理をしてくれた代理店の名前は、電話帳を繰っても見つからない。それどころか、タウン・ページの見出しに「タイプライター」の項目がなくなっている。

近所の文房具店や友人の勤める商社会社等、色んなところへ照会したが、ついにこのタイプライターを修理してくれる店は見つからなかった。

一方、この十年近くの間、日本では「ワープロ」という機械が大変な勢いで普及した。ワープロの入力部分であるキーボードはタイプライターのそれと同じであり、英文を打つことも出来るので、ワープロを使って英文の



手紙を作ることは可能である。

しかし、一般に使われているワープロのプリンターでは専用の英文タイプライターと同等な品質の印字が打ち出せないで、私は自分の好みもあり、パソコンに組み合わされたプリンターで英文の手紙を打とうとしなかった。

ところが、プリンターも熱転写式、ドットマトリックス、インクジェット、レーザープリンターというように急速に進歩し、レーザープリンターだと印字の質も極めて良く、価格も十万円程度と、家庭に入れるものになった。

しかし、最近のレーザープリンターが手持ちのパソコンと接続できるか否かという問題がある。もし、接続出来ないとなると、パソコンを買い直さなければならない。パソコンを買い直すと、手持ちのソフトも買い直さねばならなくなる。

電動タイプライターの故障から、問題はとめどもなく発展してしまつた訳であるが、「これは、ワープロが異常に普及した日本の特殊事情ではないか。昔から各家庭

機械印字であり、スペルチェック機能や液晶ディスプレイまでついている。

電動欧文タイプライターは健在であったが、最近の十年程の間に、メーカーも機能も様変わりしているのである。

### 「五倫文庫を訪ねて」

竹内 京 一

#### ◆世界的な教科書文庫

千葉県御宿町にある「五倫文庫」の専務理事・伊藤治昌氏のお招きを受けて、十月二十六日、訪問した。

五倫文庫とは、現代日本の教科書はもちろん、外国のものまでも収蔵する教科書文庫で、寺子屋時代にこの地方で使われてきた貴重な和とし本や、戦後、占領軍によって読むところもないほど、墨で塗りつぶされた軍国主義時代の教科書、世界六十六カ国から集められた教科書な

で手動または電動のタイプライターが広く使われていた欧米では、こんなことはあるまい」と考えて、アメリカの同年輩の友人に聞いてみたところ、電動タイプもたまたに使うが、普通はコンピューターに付属したプリンターを使っているとの返事であった。

OA機器は、最近十年ほどの間に大変な勢いで変化していることを改めて実感し、自分の不勉強を知つた訳である。

この話には後日談がある。

タイプライターを扱う業者は、タウンページで「OA機器」のところに分類されていることを発見した。またかつて私のタイプライターを修理してくれたK商会は、名前を片假名のKに変えていたことも分かった。

しかし、Kではもはや私の持っているオリンピアの製品は扱っておらず、代わって日本製のキャノンやブラザーが全盛を極めている。かつて名前をとどろかしたオリンピア、レミントンスミス・コロナ等は、日本の市場から姿を消してしまったようだ。

最近のタイプライターは、デジターホールを使った

ど三万二千冊が、きちっと分類、整備され所蔵されていることに驚かされた。

膨大な収蔵資料の中には、約三百年も前の近郷、村内に関する三百通以上に及ぶ古文書や論語、孟子、大学などの古い漢籍書、さらに江戸時代に寺子屋で使われた教科書など貴重なものが多く含まれている。「よくぞ、ここまで——」の感を深くした。実に貴重な存在であり、世界的な教科書文庫といえる。研究者にとつてはこのうえない資料である。

しかし、残念なことはこのかけがえない、少し大げさに言うなら国民的財産を、貸し出しから戻ったあと調べてみると、切り取られるなどの被害が多いという。こともあろうに、大学の研究班とか、テレビの取材チームとか、分別のありそうなグループの犯行だというからあきれ果ててしまう。

#### ◆三代百年にわたる収集

それはさておき、治昌氏のお話によると、明治二十五年、治昌氏の祖父で御宿小学校の校長を務めていた鬼一



郎氏が、それまで伊藤家に集められてきた古書類や教科書をもって伊藤文庫を設立、以後、百年余、伊藤家三代、多くの協力者特に御宿町民による収集が今日の五倫文庫を成した。二十四歳の若さで郷里御宿小学校長に就任した青年校長・鬼一郎氏の教育にかける情熱はあつく、特に「子供達を教育するのに使う教科書には特別の関心を抱いたようだ。父はこれらの教科書を毎年、手元にあつめて絶えず比較・検討するとともに、自らの意見を文部省に具申することも考えていたようだ。単なる物好きの教科書収集ではなかったように思う」と鬼一郎氏の子息、中島茂（伊藤）氏は後年、書き残している。次代を担う子供達にとって初等教育がいかに大切かを、鬼一郎氏は早くから感じとっていたに違いない。

#### ◆夢は郷里に図書館の建設

ヨーロッパを焦土と化した第一次世界大戦後、鬼一郎氏は「人類の共存共栄の課題は初等教育において（人類平和の理想を）児童の心に植え付けることだ」と強く思い立ち、世界各国の教育事情を研究すべく初等教科書の

収集に乗り出した。記録によると、第一次大戦終結から六年後の一九二四年には、イギリスなど四カ国に教科書の交換を申し入れている。鬼一郎氏も偉かったが、昭和七年、父の遺志を継いだ二代目の庸二氏の功績もまた大きい。庸二氏は、もともとは日本海軍の職業軍人だが父とはまた違った観点で、文庫を発展させていったように思える。庸二氏は生涯に四度、留学あるいは出張し、ドイツを中心に五年弱の生活を海外で送っているが、教科書収集にも奔走している。

弟の中島茂氏は「諸外国での収集の努力が実りはじめ、本家も隠居所も教科書で埋まり、置き場所にも困難を感じはじめたころ、東京都の教育部門で、百万円で購入してもよいとの話が持ち込まれてきた。だが、私達は郷里御宿に図書館を建設する以外何も考えてはいないと、断った。当時の百万円といえば現在の数億円に相当する」と、後年、書き残している。

#### ◆文庫名の起りもユニーク

「五倫」という文庫名の起りもユニークである。

校と呼ばれるようになった。

#### ◆故きを温ねて新しきを知る

私はこの世界的規模の教科書文庫を訪問し、貴重な資料の山を目の当たりにして、もっともっと広く社会のために役立てるべきではなからうか、との感を深くした。それこそが「郷里に図書館を——」と、三代にわたって夢を追い描き続けてきた伊藤家の人達の努力に報いる道であると思う。

教科書はその時代を移す鏡だと思う。今日、地球規模で騒がれている環境問題や人種差別の問題、さらには第二次大戦終結まで日本が統治してきた樺太や韓国、中国及び南洋庁などで何が実行されてきたかなど、その国々や地域で発行された教科書をたどる時、私達は多くの間違いに気付くはずである。

さる十一月下旬、米シアトルで開かれたAPEC（アジア太平洋経済会議）では、APECの強化を確認して閉幕したが、今後、わが国がこれら環太平洋の国々との協調を進展させていくためにも「故きを温ねて、新しき

明治三十五年（一九〇二年）九月、房総地方を直撃した台風で、御宿小学校は倉庫一棟を残して全校舎が倒壊。教室を失った子供達を、寺などに分散させて、とりあえず授業を始めたが、新校舎再建への見通しは立たなかった。当時の御宿村はわずか八百五十戸の寒村で、村の財政ではまず無理。とって、国からの援助も、日露戦争のさなかでは期待は持てなかった。

時の校長、伊藤鬼一郎氏は村長の式田啓次郎氏と共に「毎日五厘（一銭の半分）の日掛け貯金を子供達のために実行しようではないか」と村民を説いて回り、六年後、全村民賛成のもとに、日掛け貯金をスタートさせた。明治四十五年からは倍の一銭に増額。実に六年間にわたって一人の脱落者もなく成し遂げられた。倒壊してから実に十二年の歳月を要して七百三十七坪の新校舎を完成させたのである。当時、たまたま御宿町を訪問した佐倉連隊区司令官・黒田善治少将は、この話を聞いていたく感服し「五厘は人倫五常の五倫に通ずる。五倫の道を教える小学校の名にふさわしい」といって「五倫賢」と名付け、扁額を贈った。以来、御宿小学校は五倫賢御宿小学



を知る」必要があるはずである。また、裁判にまで発展した教科書検定をめぐる是非、校内暴力、非行、偏差値偏重、登校拒否問題など教え上げたらきりが無いほど現代の教育は多くの問題を抱えて、教育システムをめぐる論議が盛んである。わが国の教育がたどった歴史を検証し、また世界各国の教育システムのあり方を調べ、国際化をも視野に入れた大きな枠組みの中で「あすの教育」のあり方を模索することが今こそ、求められているはずである。

#### ◆五倫文庫が果たす役割

こうした状況の中で五倫文庫の膨大な資料が果たす役割は大きい。一般に公開されているとはいえ、東京からJRで往復三時間という御宿町では、地理的条件からも制約を受けざるをえない。また、PRの点でもその範囲は限られてこよう。世界でも特異な五倫文庫の存在をどれほどの人達が知っているだろうか。そこで、私は次のようなことがらを提案したい。

一、利用者の利便を考えて、東京で公開できないか。

### アウトドアで自然と親しむ

田中 良平

いくら優れたライフワークのテーマを持っていても、ワイフの厭がる資料・書物の山になった書斎籠りだけでは、陰気臭くてとても心の豊かさなど生まれっこない。それ故にタイミングを見て随時外出し、生きとし生けるものの息づく自然との対話が必要だ。

戦前と違って乱開発と環境破壊が進んだ都心では、むかし幼な子が夢中になって追った蜻蛉や蝶の姿すら消えてしまった。しかし、心すればこのカオスに充ちた大都會の中に心安まる自然のオアシスを再発見できる。

武蔵小山の小宅は、もと荏原村で品川区の最深部にあり、目黒区と接する。自宅から徒歩十分、緑深い目黒不動尊と隣りの都立の林試の森公園が、我々の愛する散歩ルートとなっている。

明治三十八年開設された山林局林業試験所の跡地で、

例えば、檜林社の世田谷ビレッジなどで利用者の希望を聞きながら展示する。

二、フォーラムの開催。五倫文庫の知名度をあげるだけでなく、フォーラムを通じて教育者や教科書執筆者・制作者との交流も図れ「教科書の将来あるべき姿」を模索することも出来よう。

以上、五倫文庫を訪問した感想と私見を述べたが、この特異な文庫をさらに充実・発展させていくためには、これからも多くの外国教科書の収集に努めるべきである。特に隣国・中国の教科書が少なく、両国の相互理解を深めるためにも、今後、努力すべき課題だと思し、私達もできる限りのお手伝いをしなければならない。

平成元年開園された。面積約三・六万坪、周囲約二・三キロメートル、楠・樺・榎・外国種など三二〇種八、〇〇〇本が常時緑に映えている。

コジュケイ・シジュウカラ・ヒワ・メジロ・オオルリ等の野鳥が早朝からさえずり、水辺には蛙・ヤモリも見られる。蜻蛉や蝶も多彩で、見学の幼稚園児を楽ませる。四〇メートルにも及ぶ亭々たる樹木には一本一本説明板が打ちつけてあり、私を含め植物図鑑を携え、じっくり観察する高齢者も多く、友の輪は広がる。

この森から三〇〇メートルで目黒不動尊に至る。八世紀初頭慈覚大師が開基された関東最古の不動尊場で、慈母のごとき八尺立像の聖観世音菩薩が併祀されている。大師が堂塔敷地に独鈷どくこを打ち込んだ時、滝泉湧出し千百有余年ひとときも涸れず、その霊水を戴く善男善女も多い。

裏山墓地には「青木昆陽甘藷先生」の墓があり、門前に振袖火事の白井権八・小紫の墓もある。不動尊縁起や両区の区誌も興味深く読んだが、これら二カ所は朝夕の一時間くらいは散歩には好適だ。そこはかとなく江戸時



代のロマンの香りも感ずる。

それにしても東京都など都市部の公園面積は、人口一人当たり僅か二・〇八平方メートルと欧米諸国に比べ余りにも貧弱だ。ちなみにワシントンには約二十三倍、ロンドン約十五倍、パリですら約四倍である。明らかに貴重な自然に接する場所が、偏った都市開発によって圧迫されている。せめてもの救いは、かなり広大な面積を持つ三十七カ所の国立公園と五十四カ所の国定公園のあることだ。

小宅は決して広くないが、二十年前に設営した（長野県南佐久郡小海町天堤）の山荘も併せると、居住空間と自然との交わりに関する限り、心は常に豊かである。英国勤務から帰国した五十歳の時、昭和三十年代に印度ボンベイで苦楽を共にした三井系・住友系の親友二人と語らい、ゴルフ場つき別荘地を買い、三家族三様の山荘を建てた。小海町は人口約六、八〇〇人、海拔八六五メートルで周囲は山に囲まれ、町の中心を千曲川の清流が北上している静かな町で、我々が設営した前年まで小海線にSLが走っていた。

し、多数の紅葉・躑躅・楓等が濃密に植生している。天堤地帯の林相も豊かで山野草の豊庫でもある。小海町誌によれば三百種類もあるという。朝霧を踏んで摘む季節々々の花、桔梗・竜胆・撫子・笹百合等が食卓を飾ってくれる。開発が進んで熊は深山に逃げてしまったが、幸い禁猟区であり、兎・栗鼠・雉子が時折樹間に見え隠れする。早朝から多種の野鳥の飛来も楽しい。

晴れた日は早朝、小荘から往復十キロを下町の新聞屋まで芭蕉を想起しつつ歩く。彼は病身ながら四十八歳で、奥の細道を一日二〇キロも歩いたという。

途中は、引き揚げ満州開拓民が営々として開墾した高原野菜畑であり、時には花豆畑の可憐な花が目に入る。小荘の近くで採れる蕨・山蔞・たらの芽等の手料理も、山の香りを満喫させてくれる。交流の深まった里人は親切で、時折蜂の子や千曲川の支流で投網で獲った鮎・山女等をどっさり差し入れてくれる。

四方を山で囲繞された小海を含む佐久地方の、春の霞彩・夏の夕立・秋の月・冬の霧氷等からの便りは四季千変万化で、自然と親しみ心をこらし凝視すれば、学生時

小荘は小海駅から約六キロ。車で十数分、一、一五〇メートルと一番高いところにある。五十万坪の別荘地の中、僅か二百坪弱だが、裏が松茸の採れる止め山保安林で、全山我が家の感がある。四百区画中で別荘の建っているのは僅か五十二軒、大部分は過剰流動性時代の落とし子だ。蓼科のような整備された別荘地と違い、生き活きとした自然環境がある。実業家は少なく、芸術家・教育者・医者・弁護士等々で、中には宇宙ロケット打ち上げの責任者五代富文氏や、その夫人で有名な評論家、五代利矢子女史もおられ、皆自然を愛する仲間だ。

正面に薄い白煙が棚引く浅間山（二、五六八メートル）が遠望でき、右手にご来光の素晴らしい御座山、やや正面の秩父山系の茂来山と山並みが連なる。左手に八ヶ岳山系が山裾を引き、見はるかす一八〇度の景観は絶佳である。町の中心部も眼下に見え、千曲川沿いにディーゼルの高原列車が、一時間おきに牧歌的な汽笛を鳴らし走り過ぎて行く。

自然環境の生態系が損なわれておらず、別荘地の林叢の規模広大で、赤松・白樺・樺・柏・栗・山桜等が林立

代柳原白蓮女史から受けたわが歌どころが湧き立つ。

暁明の漂う中に啼き出でし

諸鳥の声我が山に満つ

山の雨夜半は寂しき音立つる

黙し聴きいる老い行くわれら

南佐久の夜空で、神秘的な無数の星座が瞬く。先年南アルプスの上に怪しく光るハレー彗星を見たが、今年八年ぶりに壮大なスケールで降り注ぐペルセウス流星群を見た。

ペルセウス流星群を恋い求め

いねず過ぎしき冷夏の一夜

名コラムニスト天声人語の荒垣秀雄氏は、十八年間六千回朝日新聞のコラムを書いたが、何と約一割を自然描写や花鳥風月に費やしている。



(うまし国) 日本の本来の美しい風物や季節の微妙な  
移り変わりをもっと愛情をもって体感し、ライフワーク  
(印度研究)の支えにもしたい。

## 「正月ラグビー随想」

中川路 明

今年も、元日の初詣について、二日は大学ラグビーの  
テレビ観戦を楽しんだ。競技場へ行くのもよいが、良い  
席が取れないのと、あの嬌声を考えると足がすくむ。準  
決勝は、久し振りに特色あるチームカラーを持つ東西の  
対決となった。勝敗では、いずれも関西勢が敗れた。し  
かし、基本プレーを大切にした爽やかな新風を、ラグビー  
界に送り込んだ二チームに、拍手を送りたい。

第一は、京都産業大学のFW(フォワード)が、スク

ルとはいえ、悠々としたゴールを狙うキックが、全く試  
合を冗長なものとしてしまった。

ある人は、ラグビーはプレーするものであって、観客  
のためのものではないという。しかし、ゲームが面白く  
ないと人気は出ないし、好選手も集まらない。

日本のラグビーは、実力では世界のトップレベルには  
ないが、連続した素早いプレーが特色であり人気があっ  
た。今日的にも、ゲームのスピードアップが意図され、  
五か国対抗でも作戦が変化してきている。日本のラグビー  
の指導者が、この二試合から何を汲み取ったか。来シー  
ズンの好試合を期待しているラグビーファンにとって今  
後の興味ある課題だ。

ラムの基本に徹底したことである。最近では、展開ラグビー  
とかで、FWの第三列がスクラムに参加しない風潮があ  
る。その中において、京産大は、FW八人の総力でスク  
ラムを押し、相手のFWに圧力をかけ続けた。そのため、  
関東学院大学は、すっかりペースを崩された。押し込ん  
でボールを支配するスクラムの重要性を見せつけてくれ  
た。

第二は、同志社大学の目を見張るスピーディーなゲー  
ム展開だ。相手のゴール前の反則でも、キックによる得  
点を狙わずトライを取りに行く同志社の戦法は、昨秋の  
関西リーグの時から話題となっていた。この戦法の、現  
在のルール下での適否は議論があるかも知れない。しか  
し、このゲームでみせた息をもつかせぬ選手の集中力は、  
観客の目を惹きつけた。ラグビーのような格闘技で、試  
合のスピードがいかにゲームを面白くするか、その大切  
さを知らしめた。

昨年のルール改正で、反則による得点で勝敗が左右さ  
れることをなくすため、トライによる得点を多くした。  
これが逆にトライを防ぐための反則を増やし、フットボー

## 寂しい街の恐い話

中野 隆夫

「もう看板ですが…」

黄昏れた六坪ほどのバー。黄ばんだ、海原に行く船の  
リトグラフが飾ってある。古びた檯のカウンターには、  
スツールが五つ。磨り切れたバーコートに、黒い蝶ネク  
タイを絞め、切りそいだような精悍な片頬を向けて、バー  
テンは夜遅く店に入ってきた客を断った。

「警察がうるさくて。うちは一時が門限です」

「密告があつてね……。協力してもらえんかな」

高圧的な言い方に、グラスを片付けていたバーテンの  
眼が、反射的に振り向いた。ちょっと構えた顔つきになっ  
た。

「刑事さんかい？」

「ああ、ちよっと店を借りるよ」

彼は、思案してからカウンターに戻った。「何か飲み



ますか」

「そうだね、スコッチでも貰おうか」

バーテンは、ウイスキーグラスを警部の前においた。

「何があったんです」

「このあたりは、Y組が強引な地上げをしていてね。立退きを承知しない連中の一人が、今夜この近くで殺される。わたしの家に、そんな電話があった。このバーの上で彼らの事務所だったよね」

ガタガタガタツと、腹に響いてくる音がした。壁が揺れ、グラスが一つ棚からころげ落ちた。

「ブルドーザーです。地下鉄の駅が出来るとかで、深夜になるとひどいものですわ」

バーテンは舌打ちをして、グラスを拾いあげると、ナプキンで磨きはじめた。ギョツとして手を止めた。

店の近くで、甲高い女の悲鳴があがった。

警部は、飲みかけのスコッチを一息で干すと、グラスを置いて、スツールを下りた。同時に二階から、派手に階段を駆けおりる、足音が響いた。

「なんだ、なんだ。あの声は……」

ドスの効いた男の声がした。

バーテンは磨いていたグラスを、丁寧に棚に戻すと、部屋の中を見回した。不審そうに小首を傾けている。

「どかんかい」

外で、男の喚きたてる怒声がした。バーから出た警部と、入口でぶつかりそうになったらしい。すぐに警官と気づいたとみえ、言葉遣いが改まっている。

「何です、いまの悲鳴は？」

警部は、鋭い視線で男を一瞥した。ザンギリ頭の、すぐに筋ものと分かる男の頬にはヤッパの深い傷跡があった。Y組でも幹部クラスであろう。

二十メートルほど先、掘り起こされたアスファルトの上に、ポロ切れの塊のようなものが見えた。

「あれだ……、女らしい」

目ざとく異常を発見した男は、駆けよって抱き起こした。文化包丁様の凶器で、背後から左胸部を刺し貫ぬかれていた。

「うわっ、こりゃひどい」

男が開いた掌からは、生臭い血の臭いがした。女は五

十歳絡み。唇が小さくわなわなして、がっくりと頭を落とした。警部は、脈を取り懐中電灯で眼底を調べた。瞳孔

が開き、即死に近い。

「これは、手慣れた、プロの仕事だな」

ポツポツと街灯が点る寂しい街。今夜は月明かりが綺麗で、二百メートル先の街角まで見通すことができる。

周囲はシャッターの降りたビルが並んでいた。間隔は狭く、犬の潜りこむ余地さえない。六メートル幅の道路上に、人影は見えなかった。

「ビルに逃げ込んで、シャッターを下ろしたんだ」

男が喚いた。下山田警部は眉をひそめて、男を見た。

「君は、犯人がシャッターを下ろすのを見た、とでも言うのかね。われわれがビルから飛び出したのは、悲鳴を聞いて五、六秒しかたっていない筈だ」

「ははあっと、納得した顔で頷いた。」

「そうか、その時間内で犯人が逃げこめる場所は、Y組の事務所以外にないな。貴様、犯人を隠したろう」

下山田は、胡散臭そうに男を睨んだ。

バーテンは、ビルの入口に立って、二人のやりとりを

眺めている。

「じゃ、じょうだんじゃない。だんな、じゃあ、調べてみてくださいよ」

「よおし」

警部は女を横たえると、その足で戻り、ビルの二階に向かった。バーテンが通報したとみえ、パトカーのサイレンが、遠くで聞こえている。

「何だ、これは」

下山田は狭い階段の途中で足をとられ、忌まじまじそうに、細長いコードを蹴飛ばした。「ああ、工事の連中が放りこんだんでしよう」男が、一纏めにして隅へ寄せた。

「最近の若いもんは、人の迷惑を考えよらん。あとでやきを入れておきます」

「君、暴力はいかんよ。暴力は……」

Y建築事務所は、バーのあるビルの二階と三階にあった。警部は舐めるように部屋の中を眺めたあと、机の下を覗き、ロッカーの扉を乱暴に引き開けた。作業ズボンやポルノ雑誌が散らかっていたが、人の潜む気配はなかつ



た。警部は奥の窓を開いた。狭い土地に建てられたビルは、隣のコンクリート壁に面し、隙間は二十センチほどしかない。念のため調べた屋上も、高い金網で囲われていた。他の組から襲撃される用心であろう。隣のビルに飛び移る余地は、まったくなかった。

「何か強い酒を頼む」

パトカーで刑事たちが到着し、現場検証を終え、救急車が死体運び出したあと、警部は疲れた顔でバーに戻った。

注がれたバーボンを一息にあふった。

「もう一ぱい……」

ゴマ塩頭を掻きむしって、拳骨でカウンターをたたきつけた。

「失態だ。大失態だ。こともあろうに、捜査一課の鬼課長とまでいわれた、わたしの目の前で、みすみす殺人を犯させてしまった。それも犯人の手がかりさえない。バーの入口から現場までは、ほんの二十メートル。ドアを出たわたしが、この月明かりで、人影を見落とす筈はない。周りのビルには、シャッターが下りているし、唯一怪し

いと睨んだY組の事務所には、人っ子どころか、子猫一匹の姿もない。犯人はビルの壁に溶けてしまったとしか、考えられん」

バーテンが笑いながら、口を出した。

「犯人は、小細工がすぎました。殺人を予告したのは、警部をこのバーへ招き、完全殺人事件の証人にするつもりだったでしょう。警察庁の下山田捜査一課長の証言なら、疑うものはいませんか。勿論、犯人は……」

——さて読者の皆さん。ここまでの伏線で、犯人の口口が分かれますか？ そう、少々犯人はヒントを残しすぎましたね。

バーテンは目をパチクリする警部のグラスに、バーボンのお替わりを、並々と注いだ。「あの男が階段を駆け降りた時、わたしはすぐに、棚のグラスを見ました。このビルももう寿命でしょ。あれだけの大男が走れば、部屋はお祭りですよ。長い習性で、埃やグラスが落ちないか心配でした。ところが、カタツとも、グラスの揺れる音がしない。ははぁと思ひ当たりました。この騒音は、作られたものだね。そうになると、答えは一つしかない。

男は被害者を呼び出し、店の前で刺し殺すと、すぐに、コードで階段の途中に置いた録音テープのスイッチをONにした。そのあと、入口に引き返した。二階から駆け降りたように見せ掛けて、警部さんと出会い頭にぶつかってみせた。警部さんは、彼が階段に投げ込んだコードを、足に絡ませましたね。……それに、今一つ、男はすぐに被害者に駆けよって抱き起こした。ルミノール反応検査を強要された時の、用心だったんですね」

警部は、転がるようにドアに向かうと、大声で刑事たちを呼んだ。男を逐って、二階へ駆けあがった。ガタガタガタツと大きな音がして壁が揺れ、棚のグラスが小さいリズムを奏でた。

「いやあ、お蔭で面目がたった。録音テープは、コードから外してビルの間に落としてあったよ。おれたちが引き揚げたあと、処理するつもりだったんだ。刑事たち在家捜しをさせた折は、すっかり見落としていたよ」

満面に笑みを浮かべてバーに戻った警部に「しかし……」と、バーテンは寂しそうな表情を見せた。

「殺された女性は、百メートルほど先で小料理屋をやっ

ていました。アメリカにハーフの男の子がいるんです。彼女の店に飲みに来たGIとできましてね。ひよっとして、二人が帰ってくるんじゃないか。そう思って、二十年守ってきた店が地上げ屋に取られる。二、三日前カウンターで泣いていました。大手業者に頼まれたY組の勇み足ですが、何とか助けてやれなかったものですね」

もの侘びた小部屋の中で、バーテンの湿った声に、警部は洗面を作った。

## 日本人の名前

鳴澤 宏英

欧米人の間では、子供が生まれると、瞳（ひとみ）の色と髪の毛の色を訊ねるのがしきたり（儀礼というべきか）となっている。両親の遺伝と簡単には割り切れず、結構意外性がある上に、もうひとつ、彼らの場合、目と



髪の色は多種多様という事情もある。それゆえ、本人確認の有力な手段となり、旅券や身分証明書にも記入欄の設けられているのが通例だ。

それに比べると、日本人の場合は、単純というか既定事実というか、おおむね黒ときまっているから、こうした質問はそもそも無意味である。そればかりか、とんでもない非礼に当たることにもなりかねない。

ところが、子供に命名する段になると、わが国（中国や韓国も同じだと思わう）が明らかに優位（？）に立つ。欧米では、原則として、既製のリストの中から選ぶだけなのに對して、わが国では、名前をつけることに、やや大袈裟に言えば、創造の喜びがある。表意文字である漢字の特色を活かして、親の願いをこめた、意味のある名前を作ることができるからである。その結果、日本人の名前の数は無限大となり、その多様性は欧州やアメリカの及ぶところではない。

こうした日本人の名前の優位も、国際的な場に出ると、思わぬ障害にぶつかったり、悩みの種になったりする。そのひとつは、ローマ字書きしたときの発音。昨年、ド

そういえば、世界の青木功も、それほど名前の売れていないころは、テレビ放送などで、「アイサオ・エイオキ」と呼ばれていた。「ISA O A O K I」を英語式に発音すると、こうなるのである。ゲーテの研究で有名な慶応大学の茅野教授（故人）が、大著「ギョエテ研究」をものされたときの川柳にならえば、「エイオキとは俺のことかと青木言い」となる。

つぎに厄介なのが、音読みと訓読みのちがひ。漢字で表示する限り問題は生じないのだが、ローマ字書きとなると、綴りが全くちがひ赤の他人になってしまう。私自身、このことで大いに迷惑した被害者（？）のひとりである。海外店勤務のころ、日本からの送金の受取人が訓読み（HIROHIDE）となっており、担当の英人行員は、いくら音と訓の違いを説明しても、別人だと言いつけて納得しない。彼は送金係として職務に忠実なのだから、文句は言えなかったが、とにかく、日本名の問題点を浮き彫りにする一幕であった。

映画評論家の淀川長治さんは、「ながはる」と読むのが正しいが、世間はもっぱら「淀長（よどちょう）」の

イツのシュットガルトで開かれた世界陸上選手権大会の女子マラソンで、浅利純子さんが、日本人女子として初めて金メダルを獲得するという快挙をなしたげたのは、まだ記憶に新たなところ。ところが、表彰式のときの場内アナウンスは「ユンコ・アサリ」。テレビの画面に写し出された彼女は、私のことかしら、と一瞬げんな表情をした。ドイツ語ではアルファベットのJ（ヨット）は英語のYの発音になるから、アナウンスをしたドイツ人を責めるわけにはいかない。だが、聞く側の日本人にとっては、異和感がある。第一、響きはなはだよくない。

また、日本人の名前には、外人にとって発音しにくい、長たらしいものが少なくない。その点を考えてか、プロゴルファーの中島常幸は、外国のトーナメントでは、「トミー」をみずから名乗っているし、同じく倉本昌弘も「マッシー」と呼んでいる。外人サービスのための知恵といってよい。ついでだが、樋口久子は、愛称の「チャコ」をもっぱら使っていた。これも気が利いていると思う。

愛称で呼ぶ。日本国内なら、こうした使い分けもかまわないが、外国では通用しない。

もうひとつ、横文字で表示するときの姓名の順序の問題がある。文明開化の時代に、欧米流を直輸入したためであろうか、あえて姓の前に名前（first name）をもってくる習慣が定着している。ところが、最近、本来の姿に戻すべき、との議論がさかんである。

ひろく世界を見渡せば、日本と同じ姓・名の順序を慣例としている国が少なくない。また同文同種の中国や韓国でも、国内流をそのまま対外的に使っている。韓国の大統領（金泳三）は、海外でもキム・ヨンサン、中国の最高指導者（鄧小平）は、デン・シャオピンで通っている。なぜ日本人だけが、わざわざ逆にしなければならないのか、というのが論者の言い分である。たしかに正論だとは思わうが、今になって順序を変えると、過渡期の混乱が大きき、有害無益となりかねない。その意味で、実際問題としては、長年の慣例を尊重するという現状維持論に歩があるように思う。

日本人の名前には、外国に出たとき、いろいろ問題が



髪の色は多種多様という事情もある。それゆえ、本人確認の有力な手段となり、旅券や身分証明書にも記入欄の設けられているのが通例だ。

それに比べると、日本人の場合は、単純というか既定事実というか、おおむね黒ときまっているから、こうした質問はそもそも無意味である。そればかりか、とんでもない非礼に当たることにもなりかねない。

ところが、子供に命名する段になると、わが国（中国や韓国も同じだと思うが）が明らかに優位（？）に立つ。欧米では、原則として、既製のリストの中から選ぶだけなのに対して、わが国では、名前をつけることに、やや大袈裟に言えば、創造の喜びがある。表意文字である漢字の特色を活かして、親の願いをこめた、意味のある名前を作るができるからである。その結果、日本人の名前の数は無限大となり、その多様性は欧州やアメリカの及ぶところではない。

こうした日本人の名前の優位も、国際的な場に出ると、思わぬ障害にぶつかったり、悩みの種になったりする。そのひとつは、ローマ字書きしたときの発音。昨年、ド

そういうえば、世界の青木功も、それほど名前の売れていないころは、テレビ放送などで、「アイサオ・エイオキ」と呼ばれていた。「ISAO AOKI」を英語式に発音すると、こうなるのである。ゲートの研究で有名な慶応大学の茅野教授（故人）が、大著「ギョエテ研究」をものされたときの川柳にならえば、「エイオキとは俺のことかと青木言い」となる。

つぎに厄介なのが、音読みと訓読みのちがひ。漢字で表示する限り問題は生じないのだが、ローマ字書きとなると、綴りが全くちがひ赤の他人になってしまう。私自身、このことで大いに迷惑した被害者（？）のひとりである。海外店勤務のころ、日本からの送金の受取人が訓読み（HIROHIDE）となっており、担当の英人行員は、いくら音と訓の違いを説明しても、別人だと言いつ張って納得しない。彼は送金係として職務に忠実なのだから、文句は言えなかったが、とにかく、日本名の問題点を浮き彫りにする一幕であった。

映画評論家の淀川長治さんは、「ながはる」と読むのが正しいが、世間はもっぱら「淀長（よどちょう）」の

イツのシュツットガルトで開かれた世界陸上選手権大会の女子マラソンで、浅利純子さんが、日本人女子として初めて金メダルを獲得するという快挙をなした。また記憶に新たなところ。ところが、表彰式のときの場内アナウンスは「ユンコ・アサリ」。テレビの画面に写し出された彼女は、私のことかしら、と一瞬げんな表情をした。ドイツ語ではアルファベットのJ（ヨット）は英語のYの発音になるから、アナウンスをしたドイツ人を責めるわけにはいかない。だが、聞く側の日本人にとっては、異和感がある。第一、響きはなはだよくない。

また、日本人の名前には、外人にとって発音しにくい、長たらしいものが少なくない。その点を考えてか、プロゴルファーの中島常幸は、外国のトーナメントでは、「トミー」をみずから名乗っているし、同じく倉本昌弘も「マッシー」と呼んでいる。外人サービスのための知恵といってよい。ついでだが、樋口久子は、愛称の「チャコ」をもっぱら使っていた。これも気が利いていると思う。

愛称で呼ぶ。日本国内なら、こうした使い分けもかまわないが、外国では通用しない。

もうひとつ、横文字で表示するときの姓名の順序の問題がある。文明開化の時代に、欧米流を直輸入したためであろうか、あえて姓の前に名前（first name）をもってくる習慣が定着している。ところが、最近、本来の姿に戻すべき、との議論がさかんである。

ひろく世界を見渡せば、日本と同じ姓・名の順序を慣例としている国が少なくない。また同文同種の中国や韓国でも、国内流をそのまま対外的に使っている。韓国の大統領（金泳三）は、海外でもキム・ヨンサン、中国の最高指導者（鄧小平）はデン・シャオピンで通っている。なぜ日本人だけが、わざわざ逆にしなければならないのか、というのが論者の言い分である。たしかに正論だとは思いますが、今になって順序を変えると、過渡期の混乱が大きく、有害無益とみなかねない。その意味で、実際問題としては、長年の慣例を尊重するという現状維持論に歩があるように思う。

日本人の名前には、外国に出たとき、いろいろ問題が



あるとの認識に基づくものか否かは別として、日本人で、ユニークな命名をした例が結構ある。真っ先に思い出されるのは森鷗外。於兔（おと＝OTTO）、杏奴（あんぬ＝ANNE）、普烈（ふりっつ＝FRITZ）、いづれもドイツ名に漢字を当てたもの。ドイツに対する鵠外の思い入れの深さを読み取るべきであろうか。

そうかと思うと、讓治と名乗り、英文の名刺にはGEORGEと書いている知人もいる。さしずめ和洋折衷の妙と言えるかもしれない。

また令息を亜幌（あぼろ）、飛龍（ひりゅうす）、令嬢を美奈子（びーなす）と命名した英文学者もある。三人ともギリシャ神話に出てくる名前。父親の意図はともかく、ご本人たちの気持ちはどうなのか。とりわけ「びーなす」さんの場合、ご本人が名前負けしなければよいが、と余計な心配までしたものである。

いろいろ考えて、私は長男を直樹、次男を正樹（英国に永住）とそれぞれ命名した。これなら、音と訓との混同もまず生じないし、外国人にも比較的発音し易く、それを聞くわが方としても、異和感がなからうと考えたか

らである。

この判断はまずまず正解だったと思うが、後年、英国人女性と結婚した次男の子供の名付けを頼まれたときは少々苦労した。英国名と日本名の双方をつけたい（向こうではごく普通のこと）、との次男の希望で、まず長女は美紀（みき）と命名した。日本で人気のある女名前ということのほかに、英国名（Esther）の後にくるから、なるべく簡潔かつ発音の容易なもの、との着眼で選んだ。かなり得意になっていたところ、当時たまたま泊っていたロンドンのホテルに、英国人の友人から電話が入った。お前の初孫の名前は「Three trees」の意味か」とのお訊ね。彼には三木某という知人がおり、その名の由来を聞かされていたに相違ないと瞬間気づいたが、美紀が三木に通ずるとは思ってもみなかったところ。いささか自信を傷つけられる仕儀となった。

その後、長男誕生のときは、二度と失敗を繰り返さないよう、万全を期することとした。熟慮の上志郎（しろう）と命名した（英国名はSamuel）。簡潔で読み易く、しかも志のある男の子、なかなかいいではないかと酔いもいっぺんに吹き飛んで愕然とし、そしていささか狼狽した。

「とんでもない電報を打ちやがって、あのトンチキ野郎め」

花嫁キヨ子さん側の勤務先の来賓として、私はお勤めのスピーチを既に済ませて、あとは飲むばかりとリラックステしたところなのである。しかし放っておく訳にはいかない。私は立ち上がると、司会者に向かって手を挙げて発言の許可を求めた。

予定に無い二度目のスピーチとして私は次のように述べた。

「ただいまバンコックの鳴門君からの真情あふれる祝電のご披露がございました。はなはだ僭越ではございますが、これにつきまして私よりひとことご説明を申し上げますと存じます。と申しますのは、当の鳴門君を知っておりますのは、本日の参会者の中では私一人でありまじょうし、祝電の宛先の新婦キヨ子さん自身も会ったこともない人物であるからであります。

「鳴門君は私どもの会社のバンコック事務所に勤務して

思ったものである。ところが、あとでローマ字書きしてみ、後悔することになる。

SHIRO白、これではまるで犬の名前と同じではないかと気付いたが、時すでに遅し。例の友人から、今度はどうな電話がくるのか、いささか気になったが、幸い何の音沙汰もないままだ。

とにかく日本人の名前はむずかしい。

## 父の国の恋人

西 島 力

「コイシイコイシイ キヨコサン ボクハ アナタガ  
ワスレラレマセン・・・」

バンコックから国際電報で祝電が参っておりますのでご披露いたします、と言って結婚披露宴の司会者がローマ字で書かれた電文をただどしく読み上げた時、私は



おりますタイの青年であります。日本名を持っておりま  
すのは、実は鳴門君のお父さんは日本人でありました。  
ありましたと申し上げるのは、お父さんはお医者さんで、  
戦争前からタイに居住してタイの女性と結婚されたので  
ありますが、戦時中に鳴門君が少年時代に亡くなったの  
であります。

「戦後、同君はお母さんの国、つまりタイ国籍に入って  
成人を遂げたのでありますが、同君にとりましては、日  
本は依然として父の国、すなわち半分は祖国という思い  
であらうかと存じます。

「さて、本日の花嫁キヨ子さんは、先程から数々のお祝  
辞にもありましたように、学業優等でたいへんな努力家  
であります、特に英語の勉強に熱心でありまして外国  
の人と英語の文通がしたい、適当な相手がいまいだろ  
うかと、つまりペンパルでありますな、そういうご相談が  
私にありまして、私がたまたま二、三年前まで勤務をい  
たしておりましたバンコック事務所にパッシーさんとい  
うキヨ子さんと同年輩の若い女性がおりますので、これ  
を紹介した次第であります。

皆様の温かいご理解をこめ、杯をあげられることをお願  
いたします」

あれからもう三十年経った。最近のように、それこそ  
地球の隅々まで若い日本女性が蝗の大群のごとくうごめ  
いている時代では、仮に鳴門君のような運命の青年がい  
ても、夢まぼろしに日本女性を想い焦がれることは却っ  
て難しかろう。

鳴門君はその後、プロの写真家の道を歩み日本の新聞  
社のバンコック支局の嘱託カメラマンとして活躍してい  
る。今でも時々紙面で彼の名前入りの報道写真にお目に  
かかると、私はあの祝電を思い出して独りニヤリとする  
のである。

いっぽうキヨ子さんの方も三十年の歳月は争えず、ご  
亭主が定年になるのに未だ娘が結婚する気にならないと、  
月並みな愚痴をこぼしている。

「ところが、どうもパッシー嬢はこれを逃げたらしい。  
一体にタイの人で外国系の会社に働きに来る人は男女を  
問わず高校出でも達者に英語を話しまして、日本の大学  
出よりもはるかに上手なのでありますが、それじゃレポー  
トを書いてくれと言いますと何のかのと言って書きたが  
らない。どうも喋ることと書くことは別のようです。

「恐らくキヨ子さんの立派な英語の手紙を見てパッシー  
嬢は自信喪失し、ちょうどそこへ半分日本人の鳴門君が  
入社してきたので、渡りに舟とこれに押しつけたのでは  
ないかと思われます。

「こうして鳴門君がパッシー嬢の代役でペンパルを務め  
ているうちに、とにかくタイに来ている日本人は男ばっ  
かりで、日本女性といえば大使館員かごく一部の商社の  
駐在員の奥さんで、それもあまり若い女性はおりませ  
んで、それに鳴門君自身は日本に行ったこともありませ  
んから、キヨ子さんが夢に見る父の国の女性の理想の象徴  
になってしまった、ということには想像に難くないのであ  
ります。

「この数奇な運命を辿った青年の夢まぼろしのために、

### 「こめ」とベトナム

野村 嘉彦

「こめ」は生きものである。しかも、ある意味で魔物  
である。

一九三九年、初めて外米、いわゆるサイゴン米の輸入  
に従事してから五十五年の長い間、多少の断絶はあつた  
が、ベトナムとの経済交流をライフワークとしてきた。  
今また米の輸入で日本国中が騒いでいるのを見て、感無  
量なものがある。

サイゴン米の輸入をやりながら、当時、フランスの悪  
逆非道の限りを尽くした野蛮な植民地政策の犠牲となっ  
ていたベトナム、特に、仏印総督府の過酷な搾り取り政  
策の下で、飽くなき利潤追求の華僑と精米業者、及びそ  
の間に跳梁したインド人の金貸しらの蹂躪に泣いていた  
ベトナムの、農民を中心とした安南人たちの悲惨な実情  
を見て、ベトナムは一日も早く解放されるべきだ、と痛



感した。

フランス総督府の飢餓輸出により、日本人は当時、救われたのである。それが奇縁となって小生は、ベトナム研究に入り込んだ。一九五四年ベトナムが独立した直後からベトナムとの貿易に従事して現在に至っている。

そして今、はからずも米の輸入問題がクローズアップされて来た。

わが国では戦前、農村特に東北の農村の悲惨な状態からの救出を主原因として食管法が制定され、過去において多くの貢献をしてきた。

同時に、戦後は自由化が進んで、食管法のなかで現在の社会経済事情にそぐわない点が多々あらわれて、兎角批判的となりつつあるのが実情である。

一方、ベトナムでは、ここ十年余りの間、いわゆるドイモイ政策による「こめ」の自由化が経済の活性化を促して、ベトナム経済は邁進を続けている。人は皆、ドイモイの功績という。しかしながら、やはり「こめ」は魔物であり、それを作り、売り、買い、消費する人間は極めて生臭いものである。

### まだはもうなり

福井峻

「まだはもうなり」という題で、証券時評を書いたのは、二年前の一九九二年三月のことであった。

八九年十二月、史上最高の三八、九一五円をつけた日経平均株価は、その後いわゆるバブルのつけが回った形で急落を続け、二月には半値に近い二万円の抵抗線を割り込み、どこまで下がるのか、市場は総悲観、総弱気の状態であった。

このような時に、証券会社の顧客向けレポートが、周章狼狽しても始まらない。騰るも相場、下るも相場。その時点、時点で適切なアドバイスを提供するのがその使命である。

この時評では、「サービスとはなにか」ということから始めて、株式、公社債、投資信託、信用取引、先物取引から外国証券まで、多種多様の商品を、客のニーズと

ベトナムでは、米は自由化されたが、農民は売る方法を知らないものが多いため、そこに当然、利益を貪る階級が跳梁し、かつてわが国にあったような一部の富農と多数の貧農が現れてきた。

食管法のないベトナムでは、これが大きな問題となりつつあり、下手をすれば、ドイモイの推進役であった農民が反対に回る恐れも出て来ている。

半ば天候を相手とする気の長い農業を、単に机上で、思いつきにも似た議論によって、結局、現在の為政者のみを批判し、その結果、元来魔物である米の暴走を許す危険のある一部マスコミの報道ぶりは、誠に反省さるべきと思う。

「こめとベトナム」で随想とした。機会があれば、今後更に突き進んだ分析をいたしたいと思う。

情勢変化にマッチするタイミングを選んで、証券会社はうまく説明することが出来ているのかと、反省を促し、特に天下の情勢に敏感に反映する株式相場の見通しが至難な技とはいえ、あえて「まだはもうなり」の古語をひいて、「半値」近くなった株式投資を考えるべき時が来たと訴えたのである。

ところが、「半値、八掛け、二割引き」と、ここまで下がった株式は、断固買いである」と書いた原稿は、売買監査部からストップが掛かった。証券法第五〇条一項の断定的判断に当たるとか。(証券会社が営業に使用する印刷物はすべて証券業協会に届け出て、投資家をまどわさないようチェックされることになっている)

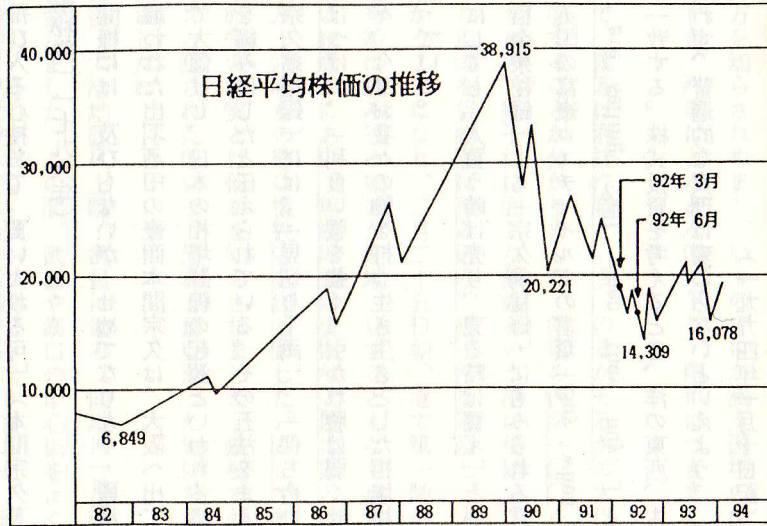
今、自信喪失した営業マンや、株式はもうこりこりと縮こまった投資家を動かすには、断固、絶対！と迫力ある推奨銘柄を打ち出して、奨めない、とても買い注文は来ない。「半値、八掛け、二割引き」といえば、六八%の値下がり、一般商品は、三割引き、五割引きと値引きすればするほど、喜んで買ってもらえる。ところが、どうも株式だけは反対で、値が下がれば下がるほど、買



いの手は引つ込む。上がれば上がるほど、今まで株に馴染みのない人まで、バスに乗り遅れまいと、借金してまで買ってくる奇妙な商品である。閑散な市況の時、将来性のある株式を買う。これが株で儲ける秘訣である。ところが、売買監査部は「絶対、これを買えば儲かる……」「断固、いまこれを買いたくない……」と客に言っていない……というのである。

八二年から七年間、株は騰り続けた。そして熱狂の後の暴落。そして起こったトラブルの数々……。証券会社は、マスコミの批判的となり、その結果は、証券行政の網の目がいよいよ細かくなり、角を矯めて牛を殺し、水清くして魚住まずの兜町が出現している。このようないきさつで、表現を柔らかくして「ここまで下がった株式は買い場と考えられないか」と……。なんとも歯切れの悪い表現となった。そしてその一か月後の四月九日、一六、五九八円と一応よい買い場を提供してくれた。

続いて同年六月には「まだはもうなり・パート2」として、安いところで買って下されば絶対儲かりまっせ、とは言えないので、古今東西の格言の中から、現在にふ



さわしいものを選んで、ご参考に供し、買いをすすめた。そして、その二か月後の八月十八日、一四、三〇九円の最安値を示現した。以来、二万一千円台を二度つけたが、昨年十一月、一万六千円の二番底を経て、新春には一万八千円と回復してきている。

これで下げ相場も三年、いずれ不景気の株高、業績回復相場につながっても不思議でない。

一万八千円でも、高値から半値以下。皆様がこの文を読まれる四月に、仮に二万円台にのせていても、まだ鍋底の中にある。もう一度、兜町は宝の山と大声を上げたところである。

昭和三十二年（一九五七年）諸株暴落の中で、売りの山種で知られた山崎種二氏が「兜町は宝の山」というキャッチフレーズで、今こそ株を買いましょうという新聞広告を出し、その後三年半続いた大相場を予見した故実がある。

次に「まだはもうなり・パート2」の格言はまだ充分お役に立つと思われるので、以下ご紹介する。

「野も山も皆いちめん弱気なら阿呆になって米を買

うべし」

英国で産業革命が始まった十八世紀半ばごろ、堂島の米相場の秘伝書として書かれた「三猿金泉秘録」（慈雲齊牛田権三郎著）にみられる格言である。三猿とは見猿、聞か猿、言わ猿の三猿で、これを相場の極意と考えた慈雲齊は、陰極まれば陽に転ず、と三十一文字の和歌百三十七首に託して東洋的な相場観を展開した。同書の中には、現代にも思っている格言が多い。たとえば

「三割の高下にむかふ 商内は かねのわきでる 泉とは知れ」

「百年に 九十九年の 高安は 三割を こえぬものと知るべし」

当時の米相場と現在の株式相場は背景も事情も全く異なるが、三割は一つの相場のフシとみることが出来る。

「万人が あきればはてる 値が出れば それが高下の 界なり」

半値以下が続出している昨今の株式相場には、百年に一度のあきればはてる値、と慈雲齊も驚倒するにちがいない。



「人気も弱く 我が考えも 弱き時 心を転じて 海中に 飛び入る心持ちで 買入れる可」(本間宗久著「宗久翁秘録」一七九六年)

「本間様には 及びもないが せめてなりたや 殿様に」と謳われた出羽酒田の豪商本間宗久は、大阪へ出て米相場で大儲けし、日本の相場野線の起源といわれる酒田五法を編み出したと伝えられている。その五法をまとめた「宗久翁秘録」には、「見切り千両」、「保ち合い放れにはつけ」、「利食い腰を強く 引かれ腰は弱くせよ」等々、今なお我々の胸を打つ生き生きとした相場格言が残っている。

それにしても「人買う時は売り、売る時は買え」という「三猿金泉秘録」にも「宗久翁秘録」にもみられる言葉は、英国の富豪ロスチャイルドの言葉「Buy when others are selling. Sell when they buy.」とピタリ一致する。株式投資を考えると、洋の東西、古今を問わず、普遍的な真理は変わらないといえよう。

(一九九四年一月十日記)

して、牡丹江をあとにし、何処へともなく移動しましたね。行方を知らされぬまゝ、いつのまにか満支国境の山海関をすぎ、汽車はどんどん南に下り、南京につきました。

ここで、僕等は湘桂作戦という、のるかそるかの大作戦に参加することが分かりました。南京の西南一〇〇キロメートルの、揚子江に面した蕪湖という港に集結し、ここより車両を貨物船に積み込み、揚子江を遡及し、大冶に向かうことになり、二月二十五日朝、港で第一陣の自動車に船に積み込み始めた途端、いずこともなく現れた敵機の銃爆撃にあい、蕪湖埠頭は凄惨な火焰地獄となり、戦友十六名もの尊い犠牲者を出しました。ここで初めて、戦争の現実とは何かを知らされました。鉄槌で頭をガンと殴られた思いと、何糞と奮いたった気持ちに駆られましたね。

三日後、大冶地区に上陸、武昌に進み、同地に一月半ほど駐留しました。この間、武昌や漢口の中心街をよく歩きまわり、夾竹桃の花ざかりに眼をみはりました。武昌の丘の上になつた黄鶴楼に上り、中国の歴史の一端を偲

## ある戦友へ

藤井 長治

拝復

「戦時死亡者関係書類」正に受領しました。

T君、君はいつになったら、太平洋戦争にかかわった日本の軍隊と縁を切るつもりですか？ われわれの軍隊だった独立自動車第四十九大隊の歴史や思い出を、タイプライティングし、印刷し、戦友に配布することを、いつまで続けるつもりですか？

君は、昭和十六年七月、京都伏見で編成された自動車第四十九大隊の要員となり、満洲牡丹江に渡り、関特演(関東軍特別大演習)に加わって警備にあたり、僕は昭和十七年東寧の自動車聯隊より君の部隊に移ったのでしたね。

昭和十九年二月、僕らは自動車二五〇両を貨車に搭載

んだりしました。武漢三鎮は、日本軍が完全に掌握していたので、どこに戦争があるのか不思議なほど、武昌も漢口も平穏でおちついた街なみでした。しかし、物品を売る店や飲食店を構えていた中国人の胸のうちは、どんなものだったのでしょね。

四月末、四個中隊編成の僕等の大隊は、各中隊毎に武昌を出発し、湘桂作戦の輸送行動に入りました。君は第二中隊、僕は大隊本部で長沙方面に向かい、毎日砂けむりを上げて走りだしました。楚の国の人、屈原の投身で名高い洞庭湖畔の汨羅をすぎ、新市という街のあたりに来ると、敵機の襲撃は目を追ってはげしくなり、銃爆撃で車両十数台を焼かれました。広々とした平野の道路の両側に、逃げまどった車が、赤々と炎上し、ガソリンや弾薬の破裂による轟音と、白煙黒煙が空一面を覆いつくし、正に凄絶な風景で、これが野戦の実体かと、体じゅうがひきしまりましたね。

五、六月の湖南省の雨期は日本の梅雨よりはげしく、野営のテントは水びたしでしたが、五月の終わりごろ、僕等は、湖南第一の都、長沙にのりこみました。人ひと



りいない、がらんとした街なかを車両で静々とのり入れ、長沙大学の校内に落ちつき、次の作戦指令の待てるのを待ちました。ある日、中心街の建物に「三井洋行」の看板をみつけた時は、三井物産はここまで入りこんで取引をしていたのかと、社員の僕は感慨一入でした。

長沙をあとにして南に下り、衡山、衡陽方面の輸送業務をはじめたものの、敵戦闘機がいつの間にか頭上にあられ、小山の陰や樹林の下にかくれる僕等を、五〇メートル位の高さから銃撃してくる敵機のパイロットは、首に派手なマフラーを巻いた若いアメリカ兵でした。

昼間は走れなくなり、夜間行動になりましたが、ライトをつけて走ると、忽ち敵機の急撃をくらうので、無灯火のまま車を走らせました。走るというより、自動車が歩くといったていたらくで、一晚五キロとか、せいぜい進んで一〇キロほどの夜行軍でした。昼は、森かげや草深い低地でまどろみました。橋のない川には橋をかけ、橋のかけられない広い浅瀬は、全力で車を突っさらせました。

昭和二十年六月、大隊本部は洪橋という村落に宿営し、

がありません。

昭和二十一年七月、僕等は上海でリバティー船にのせられ、浦賀に入港、直ちに部隊全員が解散しました。それぞれ身寄りをたよって、ちりぢりに別れました。ここで全く戦争から解放されたのでした。君はまっすぐ舞鶴の留守宅に帰りました。

それにしても、君は、あれから五十年もすぎた現在、いまだに戦時死亡者関係書類を僕から借りて、何かを纏めているとのこと、こんなに長年、熱意をもって戦争と戦友の記録を書きまとめ、まだ生きている戦友に配布しているのはなぜでしょう？ 何が君をそれに駆りたてるのでしょうか？ 僕は、君からその本当の理由を聞いたと、かねてから思っておりませんが、その前に、僕は独断を顧みず、君の真意をつぎのように推測してみました。

1、独立自動車第四十九大隊と、そこに生活し戦争を経験した戦友たちへの愛着と哀惜の入りまじった気持ちからでしょうか？

2、中支の戦場において、多数の仲間が戦死、戦病死でたおれました。その人たちの面影や声や一挙手一

中隊は周辺部落に駐屯し、歩兵、弾薬、ガソリン、病兵らの輸送に忙しかったが、八月十五日ごろ、日本は戦争に負けたいらしい、天皇がラジオで全国に、日本の敗北を放送した、という噂が辺り一面にひろがり、土着の中国人たちが、今までと打ってかわって、立ち居振る舞いが生々しだし、僕等を見下ろしはじめましたね。

その直後、僕等の部隊は、長沙で武装解除されることになり、洪橋から長沙に戻り、そこで自動車、銃、ピストル、刀剣、双眼鏡などを蒋介石軍に引きわたし、われわれは長沙北方の九福郷という部落の民家に収容されましたね。

それ以後、中隊の兵士は、時折車両の運転、修理、輸送などに駆りだされ、ある小隊などは、国民軍の参謀次長の指揮下にはいり、輸送業務などやらされました。しかし、僕等は捕虜の身とはなったが、戦争から解放されて自由を満喫し、九福郷の住民と楽しくすごすことができましたね。「仇に報ゆるに恩をもってせよ」と全軍に指令した蒋介石のお陰で、日本に無事帰ることができました。蒋介石には頭がありませんね。まったく頭があ

投足が、いまだに僕等の心の裡に残っておりますね。

その人たちの魂を鎮め、菩提を弔うためでしょうか？

3、五年という長い戦争体験を、子孫に残したいという君の念願がそうさせるのでしょうか？

4、日本人だ中国人だアメリカ人だイギリス人だと、戦争は涯もなく繰り返られましたが、人間は無意識の下では、日本人も、中国人も、アメリカ人も、イギリス人も、区別はありません。すべて人という存在だけです。それなのに、あの愚かしい戦争を企画し、何千万という人々を圧迫し、悲惨と辛苦と死別に追いこんだ、ほんの一握りの日本人への怒り、怨みが君にそうさせるのですか？

5、この二十年来、日本および日本人が、経済的にも政治的にも日常の生活でも、正気の沙汰ではなく、どこか狂っています。それに対する静かな憤りが筆をとらせているのですか？

ともかくも、君がこの二十年来、僕等の自動車隊とその仲間うちや、日本の陸軍について纏めてきたその真意を、このように推測しても始まりませんね。



君は、いかなる考えや思いにもとづいて書きつづけ、戦友たちに配っているのか、その辺の真意を、君からじっくりお聞きしたいものです。近い将来、どこかでお会いできる日を待ちのぞんで、筆を擱きます。

## 遊休能力

藤 岡 豊

ニューヨークはマンハッタンの、グランドセントラル駅に立ち飲みバーがある。午後五時過ぎから七時ごろまでの間、通勤列車の待ち時間を利用して一杯ひっかけた帰ろうとする勤め人で賑わっている。中には、待ち時間は単なる口実に過ぎず、アルコールが入って話が弾むと、二台、三台と列車を遅らせる人もいれば、発車間際になって、残ったビールを片手に、プラットホームへ駆けて行く人もいたりして、なかなか面白い。

いうもので、それを強いたりすると、かえって能力いっぱいすら出させなくする怖れもなしとしない。

日本は違う。全ての社員を平等に取り扱い、一様に八〇から九〇を期待する。六〇の能力しかない社員に八〇以上を求めると、逆に効率が落ちるし、また一〇〇の社員は八〇で良しとしてしまい、これまた効率が悪い。

個人の能力を見きわめた上で、それに見合った仕事を与え、それ相応の給料を払い、その分、フルに働かせる。難しい言葉で言うなら、人的資源の効率を高めるのが経営者の手腕というものだ。つまり、一〇〇の社員には一〇〇を発揮させねばならず、六〇なら六〇の能力をフルに出させればそれで良いのだ」

言われてみれば分かったような気もするが、日本式経営に馴らされてきた私には、ショックであった。

思えば、個人の人事考課や勤務評定が、日本の企業で採用されて久しい。しかし、それは勤務態度とか、実績にのみ重点が置かれ、生まれつきの個人差には、全く考慮が払われていないように見える。先の例で言えば、能力一〇〇の社員が八〇しか出していないのに、満点が

取引先であったアメリカの某大手鉱山会社のA社長とは、時たま、ここで落ち合った。アメリカのエグゼクティブはよく働くと言われるが、この人も例外ではなく、いつも八時を過ぎていた。日本通でもある同氏は、着任間もない私に、色々ためになる話を聴かせてくれ、大いに感謝したものである。

ある時のこと、突然、こんな質問が飛び出した。「会社の経営で、アメリカと日本で一番大きな違いはなんだと思う？」

とっさの質問で、直ぐには答えられなかったが、私に何か聴かせたい事がありそうなので、それを拝聴することにした。

「アメリカの会社経営では、社員一人一人の能力を、いかにして一〇〇パーセント発揮させるかが一番の課題とされている。

人間の能力は、持って生まれた人さまさまだ。一〇〇もあれば八〇もあり、六〇以下の人もいる。問題は、一〇〇の人間には一〇〇を、六〇の人間には六〇を、フルに出させることにある。それ以上を期待するのは無理と

っているのである。遊休能力があってはならない、とA社長は言いたかったに違いない。

教育についても、同じようなことがいえそうだ。日本の教育水準は、世界でもトップといわれているが、それは平均が高いという意味でしかない。言うなれば、飛び抜けた上もないければ、下もないということだろう。

その理由の一つは、能力のある人間にだけ特別の教育を施すのは、不平等とされるからである。小学校のころから、文部省によってカリキュラムが定められ、教師は、これに従って生徒全員を平等に教えればそれで済む。それ以上のことは何もしない。親は、経済が許す限り、塾や予備校に通わせるが、これは入試をパスするコツを覚えさせるだけのことである。

その結果はどうであろうか。社会へ出ても、応用問題を解くのはうまい。例えば、欧米で開発された技術を買取り、これを応用して多品種のものを生産するには長けている。しかし、オリジナルな新しいものをクリエイトする力はなく、世界に誇れるだけの発明は生まれない。天から授かった能力が、あたら埋もれてしまっているよ



うに思える。

世界大戦に敗れ、廢墟と化した日本は、半世紀も経たない内に、奇跡ともいえる復興と発展を成し遂げた。農業を除き、各産業とも、今や国際競争力を身につけるまでに成長している。生産性の向上がその原動力といわれているが、能力の生産性はまだ低いのではないだろうか。社員の全てに愛社精神を植えつけ、年功序列を重んじ、終身雇用を保証して、高成長時代に成功を収めた日本式経営も、低成長経済と高齢化の流れの中で、行き詰まりの時期に来ているような気がしてならない。

「とは言っても、日本の経営には学ぶべきことが多い。ではまた逢おう」

リップサービスを残し、A社長はバーを後にして、プラットホームへ向かって行った。

残りのバーボンをすすりながら、今まで考えもしなかったことに思いをめぐらした。自分は今、幾つかの仕事を与えられ、給料を貰っている。仕事は充分にこなしている積もりだが、それに安住させられてはいはしないだろう

るな出来事をもとに『若きウェルテルの悩み』が世に出ることとなった。

ライン川に架かる立派な石橋を渡って、町の中心であるフィッシャーマルクトに出ると広場の脇に、帝国高等法院であった建物が目につく。レンガ色に塗られた壁には神聖ローマ帝国の紋章、双頭の鷲がはめ込まれている。田舎町ともいべきこの町も、かつては帝国都市であり、神聖ローマ帝国の帝国高等法院が設けられた由緒ある町であった。中心部から少しはずれたところに「ロッテの家」がある。ヒロイン「シャルロット」が生まれ育った家である。元来はドイツ騎士団の館であった。彼女の父は、このドイツ騎士団の領地管理人であった。そのころのシャルロットについて、ゲーテは『詩と真実』の中で次のように語っている(岩波文庫より)。

「母の亡き後、大勢の子供を抱えた家族の主婦役として、至ってまめまめしい働き振りを見せ、やもめ暮らしの父親を独りで世話していた。……誰にでも好かれるように出来ている婦人の一人であった」と。

「ロッテの家」の中には、家具調度品や台所用品など

か。自惚れかもしれないが、もっと仕事が与えられれば、そしてそれに見合った給料が貰えるならば、もっと働けるのではなからうか。当然のことながら、答えは出ない。何か割り切れぬ思いで家路についたものである。

### シャルロットの跡を訪ねて

丸山 暢謙

フランクフルトの北五〇キロメートル程のところにヴェッツラーという町がある。ここは、高校生頃に読んだゲーテの名作『若きウェルテルの悩み』の舞台で、ヨーロッパ駐在の頃、運良く訪れることが出来た。

ストラスブルグ大学で学位を得たゲーテは司法修習生として、この帝国高等法院で研鑽を積むため、一七七二年にこの町へやって来たのである。この町での滞在は僅か四カ月と言われているが、そのときの体験やいろいろ

の外、家族の肖像画が展示されている。その中にロッテ自身の肖像画もあった。それを見たときの印象は率直に言って意外であった。心に想い描いていたロッテのイメージはもっと愛くるしい美少女か、魅力溢れる知的な美人であった。肖像画に描かれていたロッテはあまり美人とは言えない普通の女性であった。何か裏切られたような気がして、暫くその前に立ちつくしてしまった。夢の翼に乗って、想像の世界を駆け巡りすぎたようである。

やがて、ロッテはブレメンの公使館書記であったケストナーと結婚してハノーファーに移り住んだという。その後のロッテの足跡はどうなっているのだろうかと思っていた。

何年か後、ハノーファーメッセの折、偶然にロッテの墓がハノーファーに在ることを聞き、訪ねてみた。町なかの古い墓地には、ハノーファー選帝侯の宮中顧問官ケストナー未亡人にふさわしい堂々とした墓石が建っており、「シャルロット・ゾフィー・ヘンリエッテ・ケストナー、旧姓ブッフここに眠る」と刻まれていた。これが、あのロッテの「終の棲み家」かと、感無量の思いでお参



りをした。

帰国後に、ゲーテの研究者としても有名なトーマス・マンの小説『ワイマールのロッテ』を読む機会があった。小説は一八一六年、老境に入った六十三歳のシャルロットが、娘を連れてワイマールに住む妹アマリーエ夫妻を訪ねるといふ口実の下、当時六十七歳であったゲーテと再会する、感傷旅行とも言うべき物語である。

「私はシャルロットに別れを告げた。勿論フリーデリケとの別れのと看のような疚しい思いはしなかったが、心の疼きを伴わない訳にはゆかなかった」と『詩と真実』の中で語っているゲーテとの一別以来、四十四年後のことであった。

「ヴェッツラーに来たころ、彼は服装など少し気違ひじみた派手好みでしたし、女たらしでも申しますか、若々しさや快活さを気取ることが好きで、仲間うちで第一人者になって首頭を取ったがった」（新潮社、トーマス・マン全集『ワイマールのロッテ』より）と、シャルロットが語るかつてのゲーテは、年を経て今や、ザクセン・ワイマール公国の宰相から枢密顧問官となり、文豪

として世の賞賛を浴びていた。

シャルロットについてこの小説は、市中の噂を次のように伝えている。

「シャルロット婆さんがゲーテのところへ着ていった服は、あのウェルテルの恋人を暗示するような没趣味なものであった」と。

シャルロットのワイマール訪問の目的の一つは、妹の夫、ワイマール公国財政局参議官リーデル氏の昇進昇格を陰ながらゲーテに依頼することであった。

「私はゲーテにあなたの希望や念願をお伝えして、是非ともそのことでゲーテに何かの約束でもして頂こうと思っておりますのに、食事中も、食後にも、そこへ漕ぎつけることが出来ませんでした」と、リーデル氏に謝っている。

この小説に描かれているシャルロットは、私にとって、どちらかというと『若きウェルテルの悩み』のロッテというよりは、ヴェッツラーで彼女の肖像画を見たときの印象に近いものであった。時と場所によって、舞台を異にする度に、そこに描かれている人のイメージは変わる

ものらしい。いずれ、機会を見てワイマールを訪れてみたい。シャルロットが泊まったという「象印亭」が、現在でも開業していたら是非泊まってみたいものである。

小説の中で「ホテルの番頭マーガーは相手が『若きウェルテルの悩み』のヒロインであるロッテと知ると感動して、何回もあのロッテその人であるかと尋ねた。……

彼女が朝方に到着したときは、広場に人氣がなかったのに今は、大勢の人々が集まってすこぶる活気を呈していた。……

人々はいくつもの群れを作って、ホテル・ツーム・エレファンテンの窓を見上げていた。……

……門前につめかけていた人々は奥様のお姿をチラリとでも拝見したいと願っています。……」と、そのときの様子が描かれている。野次馬根性と言われるかも知れないが、人情は洋の東西を問わないようである。

私は今まで文学散歩と称して、機会をみては名作の舞台をヨーロッパの各地に訪ね、ひとり喜んできたが、私もホテルの番頭マーガー氏と大差ないようである。いまだに、機会があればワイマール以外にも、もっと訪ねて

## 往事漫筆

水谷汎

鉄道員、兵員として満州の各地で約二年半の勤務をしたが、その地の生活や出会った人たち、吹き捲く朔風砂塵、酷寒、春の百花繚乱の大原野など、半世紀前の時の流れの一齣一齣が昨日のここのように、鮮やかに思い出される。

一九四一年、満鉄に就職、神戸から黒竜丸に乗り、船中一泊、四月一日大連に到着した。



当時、日米関係は険悪化の一途を辿りつつあったが、敗戦亡国必至の無謀な戦争に突入するとは夢にも思っていなかった。

大連に半月滞在、新人職員教育を受けた。

そのときに衝撃を受けたのは、イスラム教のことであった。それまで不勉強で、イスラム教について全く無知であった。

満州にもイスラム教徒が多数住んでおり、彼らには豚がタブーで、彼らの飲食店と非イスラム教徒の飲食店とが峻別されている。

イスラム教徒用食堂の入口の左右には、青色のくす玉が吊り下げられており、非イスラム教徒用の店は、そのくす玉が紅色である。

青色の方の店で、もし豚肉を注文したら半殺しの目に遭うから、厳に注意せよ、と教えられた。

当時でも、戦死者の白骨が時々出るといふ二〇三高地などの戦跡を慰霊した。

この高地の南斜面の荒地には、暖かな春陽を浴びて、可憐な重すゐれがあちこちに咲いていた。

ていないのに、無謀な作戦を何故にするのか、と憤慨した。

重苦しい日夜が続いていたが、兵力輸送が急に停り、逆に南への反転が始まり、燈火管制、禁足も解除され、ようやく胸をなでおろした。

新京駅で、満州国皇帝溥儀を眼の前で二度も見たと、きゃしゃな、ひ弱な人だった。

実習のため全満に分散していた鉄道部の新入社員全員が八月末に奉天に招集された。

一室二人の寮生活で一か月の講習。この間に培われた友情の絆は、今も強いものがある。

奉天の市街地を時々彷徨したのだが、歓楽街に「艶楽書館」と呼ぶ三階建てで円筒形の大きな建物があった。

「書館」と呼ぶから本屋かと思ったが、さに非ず一枚鑑札の妓女が抱えられている喫茶店兼遊廓で、中国人の社交場の一つであり、この店に友人と入ったことがある。

女には、各自に個室があり、そこで客たちは女の給仕で茶を飲みながら談笑するのだ。

九月末に教育が終了、全員八十余名が四班に分かれて

ここが、日露が屍山血河の激戦を繰り返した地とは思われない、おだやかな風光であった。

この高地の一角に、題字「コンドラチェンコ少将戦死之地」の大石碑が日本の手によって建立されていた。

コンドラチェンコ少将はステッセル將軍の片腕として勇敢に戦って死んだ。敵将を追悼して碑を建立したのは、当時、武士道なお健在であったことの証左であろう。

この高地の頂上から俯瞰した旅順港とクリーム色の壁の家並みなどの麗らかな風景は忘れ得ない。この日は四月十三日であった。

四月下旬に新京（長春）駅での実習を命ぜられ八月下旬まで勤務していたが、七月になり「関東軍特別演習」が開始され、大本営は満州に七十万の兵力を集結した。

兵員、戦車、火砲、資材が連日連夜、北方へ鉄道輸送されて行く。シベリア侵攻のための大動員で、夜は燈火管制。鉄道員は外泊禁止の臨戦体制が敷かれた。

一九三九年のノモンハン戦争で一個師団（将兵一万八千）全滅の敗戦を大本営は何と考えているのか！ドイツのソ連侵攻にも拘らず、極東ソ連軍勢力はまだ低下し

全満見学旅行の途についた。

奉天を十月二日早朝に出発、まずアムール河畔、国境の町、黒河を目指して列車は走り、ハルピンで途中下車して一泊。市街、ロシア人墓地など帝政ロシアの風情が色濃く残るこの都市を見学した。

三日午後、再び乗車、列車は北満州の荒涼とした枯草の平原を北へ北へと走り続けた。

大草原はアルカリ性不毛地帯が多く、白い地肌が至るところに露出していた。

夜が来た。赤く燃える野火が車窓から見えて不気味だ。抗日ゲリラの襲撃の前触れではないかと不安になったが、落雷が原因だった。

深夜、黒河に到着。街路の上に散っている黄褐色の落葉が、ほの暗い街燈の下で冷雨にぬれて衰退した国境の町を物語っていた。

対岸のブラゴエチェンスク河岸には、大小の電燈が河面に映えていた。

一夜明け、対岸をじっくり眺めようと思っていると、官憲から警告が出た。



「河岸に絶対に出るべからず。昨夏、軍人が河岸に立っているところを狙撃され死亡したが、泣き寝入りとなつた」

物陰に身を潜めて対岸を見ると、中型の貨物船が三隻停泊していたが、人影はなく、河幅約八〇〇メートルのアムールは、中国人の呼称「黒竜江」にふさわしく、黒色の河水が悠々と流れていた。水に行く先は間宮海峡の北端である。

対岸との貿易が途絶しているため、黒河の街は北緯五十一度の一寒村となつてしまった。

冬期、アムールが結水すると、人、車両が氷上を容易に渡河できる。

かつて軍務中に、命令で氷上を渡って、命がけでプラゴエに潜入、偵察した危険な体験談を昨秋、某氏から聞いた。

この無謀な偵察がくり返され、多数の軍人が射殺され、帰つてこなかったとのことだ。

四日午後、黒河を離れた。駅で記念スタンプをノートに押す。これが今でも手元に残る唯一の黒河行の記念と

なっている。

ハルピンに戻り、牡丹江、図們を経由し、北朝鮮に入り、羅津、清津を見学した。

羅津の埠頭に、石炭が山積みされていたので、満州から内地への輸出炭だと思つていたところ、樺太から満州へ輸入したものだと思かされ、事の意外なのに驚いた。

満州は石炭の宝庫だと教えられていたが、偽宣伝だったのだ。

清津港では、多量に水揚げされる鱈から魚油を絞つていた。絞り滓の鱗は、ゼラチン原料としてドイツに輸出するという説明だった。搾油労働者は、晝飯の副食に鱈を焼いていた。

北朝鮮から間島省を経て奉天へいったん戻った。

間島省には、朝鮮族が多く住んでいて、金日成を首領とする反日帝パルチザンの根拠地で、列車には機関銃を備えて日本兵が厳戒していたが、不安な、油断の出来ない間島省を通過した。

奉天から錦州を経て熱河省の承德に赴いた。清朝が造営した離宮（避暑山荘）とラマ廟の見学が目的だった。

離宮は荒れていたが、清朝の盛時を偲ばせ、映画『西太后』にここが現地ロケされていて、周辺の岌々突兀とした岩山も映写され、当時を懐かしく想い出した。

離宮の庭園はNHKテレビの『庭園散歩』に録画されているが、中国各地の名勝を模した風景を採り入れて造園した広大なものである。

清朝がモンゴル族、チベット族を懐柔するために造営した壮大なラマ廟は荒廃が進み、仏像、仏具もかなり盗み出されていた。

廟は、広い山腹を土壁で囲んで寺域とし、麓から山頂に向けて順次にチベット式堂宇が建てられていて、大小さまざまな歓喜仏が安置され、灯明も点されていたが、ラマ僧は一人もおらず、老番人が二人いただけであった。

安井曾太郎画伯の名作『承德喇嘛廟』（愛知県立美術館所蔵）をテレビで偶然、数日前に見て、承德への遊志が湧いた。

承德に一泊、奉天に戻り待機していると、チチハルでの車掌勤務を命ぜられ、十月中旬の夜行列車で任地に直行した。プラットホームに降り立つと、寒気で震え上がっ

た。零下十五度だ。南満の奉天はまだ暖かく、ズボン下なしで暮らしていたが、北満では既に、朝は零下十五度以下がるとは思っていなかった。

チチハル在勤中に満州里、ハイラル、ドラガチェンカの酷寒地を、四泊五日で旅行の数日後、十二月八日に対米戦突入の報を聞き、祖国の敗亡は必定と直ちに帰郷した。（一九九四年二月）

## 考え方の選択

森田茂

現在のように、社会が不況で沈みがちになると、消極的なムードが人々の考え方に大きな影響を与える。かつてのバブル華やかなりし時は、事の善悪は別にして、考え方も積極的雰囲気に含まれたりした。

しかし、言うまでもなく、もの考え方は多様多彩で



ある。それは、性格とか育った環境や教育などが考え方に反映されるからであろう。性格を陽陰に大別すると、そこから生まれる考え方には、よく言われる「前向き」と「後ろ向き」がある。また、育った環境や教育により、考え方に大きな違いもでてくる。厳密に言えば、人さまさまなのであるが、大まかに分類してみると、常識的には三つのタイプが頭に浮かぶ。

#### 考え方の三類型

その第一は、消極的な考え方である。たとえば、会社が好況のときも不安を拭えず、不況に備えて慎重に考え行動しようとし、「反対に儲からない場合は、益々悲観し警戒するような過剰思考である。このタイプは、一見、理知的に見えるけれど、ともすると、堅実なやり方と錯覚して自己満足に陥りやすい欠点がある。

次は、これとは逆のタイプで、根明かの人のもつ樂觀的思考である。こういう人は、景気が良くななくても、その内になんとかなるだろうと考える。深刻ぶらないのは大きな長所なのだが、思慮がないよう、普通は甘い考え方と思われ勝ちである。

第三は、これらの両方を折衷したタイプで、好況のときは喜び、不況になると意気消沈する、純粹で単細胞的な考え方である。この場合、人間の内面があらわに出てしまう、ナイーブで経験不足のイメージが浮かび上がる。

ところが、戦後のある偉大なエネルギーの実業家は、「順境のとき悲観し、逆境のときは樂觀せよ」と、その信念のほどを述べている。

この考え方は、上記の三つのタイプの枠外にどうも飛び出しているようだ。これは相当な試練を乗り切った人でないと、なかなか言えないセリフではなからうか。「類型外の考え方」と思われる。

調子の良いときは悲観せよと言っても、これは楽しい悲観に違いない。悪いときは樂觀せよとは、オタオタするなということだろうが、冷静に時期の到来を待つ打算と自信に裏づけられているようだ。こういう実戦的心境になれたら、胃の痛みも感じることはないだろう。元気で体調が良ければ、考えもシッカリしてくる。逆境に強い人とは、こういう考え方に揺るがぬ信念を持っている人を指すのだろう。

#### 思考の三原則

自分が当面する課題に対して、どういう考え方を持つかは本人の責任と選択である。その場合に、次の思考の三原則を考慮に入れるべきだろう。

- 一、目先のことにとらわれないで、長い目で考えてみる。
- 二、物事を一面からだけ見るのではなく、全面的そして多角的に把えてみる。
- 三、枝葉末節を取り払い、何が根本かを常に熟慮してみる。

たとえば、いま利益が大幅に減っても、あわてずに長期的視点を見据えて対策を立てる。不況で大変だと合唱するが、目を転ずれば、不況こそチャンスと健闘している企業もある。経済の不安要素ばかり根掘り葉掘りしないで、社会の底流の動きに理性的な洞察を加えるなど、視点を変えて冷静に見つめることがどんなに大切かと思う。

#### 三識について

読書したり見聞したりして、得られた情報や知恵は、単なる「知識」にすぎない。それで満足してしまう人がある。しっかりした知識をもち、それを自分の思想・理念までに熟成してくると、それは「見識」となっていく。ところが、このレベルになると、見解とか個性の違いが浮き彫りになり易いから、人間社会の複雑な局面を醸し出すことにもなる。

このような状況の中で、どうにかして、個人の考え方を浸透させ実現していくには「胆識」を持たねばなるまい。「胆識」とは、個性ある「良識」をもって実行に移す知性と理解してもよいだろう。

我われは、知識、見識だけで充分と思わないで、ぜひとも胆識を持ちたいものである。単なる評論家や理屈屋だけでは、社会から高く評価されなくなるものだ。

少し説述調になり恐縮だが、我われ企業OBベンクラブの今後を考えると、理屈ではなく、思考三原則と三識を考慮に入れながら、あの「類型外の考え方」の選択が極めて参考になるのではないだろうか。



## 誰のための景気対策

八木 大介

毎年の恒例だが、ことしも正月に野沢温泉へスキーに行った。正月の三が日は混むのでそれを避けて、定宿に五日の夜からと申し込んだが、満員で部屋がないと言っ。あちこち探してもらった挙げ句、やっと確保出来た。なるほどスキー場へ行ってみると大盛況である。赤や青や黄色、緑のサイケデリックやカラフルなウエアが白いゲレンデに満ちている。

その上、何よりも驚いたのは家族つれの多いことである。三十代の父親が背中に赤ん坊を背負い、母親は小学生と幼稚園児を連れてリフトに並んでいる。それ自体は微笑ましく、めでたい現象だが、問題はサラリーマンらしいその一家の暮らし向きである。もちろん、不況で残業手当やボーナスのカット、あるいはリストラの対象になってくるかもしれないが、それでも、傍から眺めると

余裕に見える。

何よりも驚いたのは、ゴンドラの待ち時間である。数列で三百メートルは並んでいた。乗るまでに九時五分から九時四十分まで三十五分も掛かった。それが五日六日両日共である。正月でも、こんなことは無い。これが経済不況下の現象だろうか。

この現象については、地元をはじめ識者はいろいろ釈明したり、解釈をつけていたが、いずれにしても、スキーヤーの生活に余裕のあることは間違いない。

好況状態はスキー場だけではない。デパートやディスカウント・ストアは人でごった返しているし、デラックスなパチンコ屋が続々と新規や新装開店している。近所の植木屋は不況知らずだと言い、家を建て増しするにも大工が人手不足で引き受けてくれない。一般の商店も、八百屋や魚屋などは結構繁盛している。

今年の年賀状で、不況を嘆いて来たのは銀行をはじめ大企業の経営者や料亭の女将連中で、今まで『ラクをして儲けて来た』人種である。これらの人達の不況対策を聞いていると、バブル時代の『夢よもう一度』という訴

えに聞こえる。

まして不況対策に所得減税。財源として消費税率引き上げなどと言われると、一体誰を対象にした政策なのか。減税などと、まことしやかに国民のためめがちな言い方をしているが、高級サラリーマンの負担を減らして、大衆に肩代わりさせるだけである。減税して消費を増やすなら、消費税廃止の方が先決であり、効果も上がる。減税も徴税も国や国民のためではなく、税務官僚の勝手都合だけである。主権在民が泣く。

過去、長く続いた自民党政権は、一貫して生産者寄り、供給者寄りだった。世界に冠たる官僚統制組織を作って経済をコントロールして来た。いまだに一万一千件もある許可をはじめ法律や経済規制のほとんどはメーカー保護である。コメ／酒小売免許などもお上の権力志向や統制手段に過ぎない。自民党のやり方は、それなりに日本の経済繁栄に貢献して来たし、内外の評価も受けたが、言わば強兵による富国だった。

一糸乱れぬ統制の下に、悪戦苦闘や特攻にも耐え、済々と進む強さである。軍隊の特徴は、最低限全員が鉄砲を

撃て、命令通りに動く一致協力である。その代わりに知者も特技者も個性を抹殺されてロボット化する。社会主義国の恐ろしさはそこにある。

現在の日本も他から見ると、国民の一人一人は個性だけでなく、富も収奪されて、鶏のように卵を生み続け、国や企業の富国強兵に奉仕している。一応、平和で食うには困らないが、ブローラーのハッピーでしかない。

一九九二年度の国民総資産(国富)は七千兆円だが、そのほとんどは国有財産と企業内留保で、国民の個人資産は三割強に過ぎない。国富みて民貧しき状態である。

戦後の日本は、一応民主主義国家の形を標榜しているが、現状は決して民主主義ではない。官主義、統制経済、極言すれば官僚社会主義である。細川内閣も、規制撤廃を唱えながら、この絆から脱し切れなかった。

『今回の平成不況は、従来のような景気循環的なものではなく、水ぶくれ体質の構造転換を求める経済のリストラである』と言われている。即ち、単なる景気対策や企業救済では解決にならない。ましてや国民や消費者にしわ寄せをしてバブルを再現させるような糊塗策では経



済の成人病を悪化させるだけである。この際、相当な犠牲を払っても思い切ったスリム化を実施する必要がある。

具体的には、これ以上の景気対策はやめて現状で立ち直れない企業は潰すことである。少なくとも企業が社内に蓄積している内部留保や含み資産はリストラのために吐き出して整理させなければならない。都市銀行の一行や二行が本店ビルを売るくらいの荒療治が必要である。現在日本企業が所有している資産は四千兆円以上だが、これを二％の利率で回しても、八十兆円の経済効果がある。企業にはまず自助努力を求めよう。

この『自助努力』が困難と憂慮される場合には『資産課税』を導入する。企業が有する資産を時価評価して、それに二％の課税をすれば済む。現在の会計法でも、有価証券報告の貸借対照表の欄外に時価評価した資産額を注記するようになってはいるが、『ただし当分の間は注記しなくてもよい』規定があるため、だれも書いていないだけである。社内では決算時に計算しているので、改めて手数が掛かる訳ではない。

次の経済対策は行政改革である。国家予算を削減するには特別失業保険で対処すればよい。現在の失業率は二・八％、数にして一七〇万人だが、これが仮に五％三〇〇万人になったとしても、年間三〇〇万円の失業保険を景気回復まで払い続ければよい。それでも年間九兆円の予算である。景気対策として九兆円の公共事業費を計上しても、ゼネコンや政治家に食われて効果は半分もない。失業保険なら全額が消費に回るし、直接国民のためにもなる。財源は上記の資産課税である。

もう一つ極秘の効験は、企業のリストラに卓効を示す点である。すなわち、企業のリストラにとって最大の課題は余剰人員、特に中間管理職の整理と人事再編である。日本企業の弱点は人事効率、特にホワイトカラーの非効率、無失点主義、三無主義、マネジメントの責任回避とリスクテイクの無さに帰せられる。ところが、人事の効率化は大問題なので、どの企業も一番手したいの一手をつけられないのが実情である。そこで、もし手厚い失業保険が与えられれば、企業も思い切った合理化に着手出来よう。それが将来の世界的な競争力につながることは必定である。

国民の負担を減らすことが先決である。減税よりも消費需要拡大の効果は大きい。取り敢えずは許認可や行政指導などの規制を撤廃する。このままでは日本企業は護送船団方式の中で共倒れになってしまふ。いま自由化すれば当分は辛くても、二十一世紀には世界に伍して行ける競争力が付く。

規制撤廃のやり方は、不必要なものを止めるのではなく、三年間のサンセット方式で全部廃止する。どうしても必要なものは改めて立法措置を講ずればよい。現在の国会議員の数と余裕では三年間で一万一千件を全部見直すことだって可能である。かえってその方が仕事が出来て、議員は生きがいを感じるだろう。従来、日本の政治家も企業（ゼネコンなど）も余分な規制のためにわざわざ刑務所を造って来たようなものである。同じ堀の上を走るにしても、そこが刑務所でなければ遊歩道と変わらない。もう企業も刑務所の堀の上を走るリスクからは解放されるべきではないか。

最後は、サラリーマンの失業問題である。企業が行き詰まると雇用不安が生じると心配する向きがある。これについてながら、労働省は法規制で『六十五歳までの雇用を企業に努力させる』ことを目論んでいる（審議会答申）らしいが、とんでもない話である。そんなことをしたらコストが高くなり、国際競争力が落ちるだけである。その種の対策は、国自らがやるべき性質のものである。政府が横着をしたり、大名に対する治山治水のご用申し付け並みにお上風を吹かしては困る。

景気対策は、目先の苦痛緩和や情緒論に囚われず、将来の日本経済や国民自身のハピネスを見据えた施策が望まれる。

### ある良医のつぶやき

吉葉 芳彦

営業だってそうじゃないか、お客様とセールスマンとの心が通いあわなければ本当の商売にはならないだろう。患者と医者も同じ、日頃からのコミュニケーションと相



互信頼の積み重ねが大事だね。

定期健康診断も人間ドックも勿論大切、キチンと受けるべき。ただ、その結果は、半年や一年に一度の数値からだけではなく、毎日の、毎月の、息づかいや表情を併せてこそ、より効果的に読み取れ、活かせるもの。何でも、しょっちゅう、相談に飛んでくる患者さんには愛着と責任を感じるね。信頼されれば医者もそりゃあ命がけ。患者と医者と、一対一の真剣勝負さ。

専門外のことも、親・兄弟や家庭のことも、知らされていけば全部貴重な参考になる。得意分野以外の大切な診断・処置は、しかるべき先、母校大学病院や知り合いの専門医に紹介するよ。

一病息災ってほんとだよ。闘病というよりはむしろ、病気とも仲良く、医者とも仲良く付き合うことだね。救急病院ならいざしらず、初めて飛び込んできたり、日ごろは音沙汰なし、何年ぶりかで、イザと言う時だけ駆け込まれても、どうしていいか分からないことがあるよね。

ているさ。

要するに、心掛けておくのは、日頃の駆け込み寺・ホームドクター・掛かりつけ医、とでも言うのかな。出来れば、自分より五歳か十歳ぐらい若い医者ね。最期まで看取って貰えるほうがいいものね。

因みに、小生が半世紀あまりも付き合い続けてしまった駆け込み寺の主は、五歳年長である。おそらく、あらが先に往くだろう。今更、乗り換えにくいし。さりとして、このままでは看取って貰えないかもしれないし。密かに、後釜を探しているところである。

昭和五十五年八月八日、七対子(ちいといつ)の日。痛風と、手遅れぎみ胃潰瘍の挟撃をうけて、胃の四分の三を切除された。いまだに、鉄欠乏性貧血という厄介な後遺症ともども、前述の良医とも仲良く付き合っている。

大病をして、弱気になった患者の立場から、しみじみ

なんとかその場はおさめるけど。

最近では、検査技術も機器精度も一段と向上してきた。例えばエコー(超音波診断)など。石とか嚢胞とか、分からなくていいことまで分かるようになってしまったので、病人が作られている。何か言われれば気にするし、気にすれば病気になるってしまふ。検査で判ったことを、言う必要があるのか、どう伝えるかこそが、医者の大事な判断なのだがね。

四十半ば過ぎて、二元気だ、どこも悪くないと言っているのは余り賢くないね。償却もだいたい進んでいるはずだし、傷みが顕在しているか、潜在しているかだけの違いなのね。

日本は長寿国ではなくって、長命国なんだよ。長寿と長命とはだいぶ違う。

長命とはとにかく生き長らえていること、長寿とは健康やかに長命を保つこと。そりゃあ長寿が願わしいにきまっ

医者について考えてみた。名医によりも、良医にお世話になりたいと切に願う。病気をしらない強気のころは、名将・名人・名医がたに憧れていたのに。自己流ではあるが、医のなかみには医学・医術・医療・医業・医商などが含まれているように思う。医商と言うのは論外の輩。医学・医術に優れているのが名医のイメージで、有吉佐和子の華岡青洲とか、「白い巨塔」の財前教授とかが思い浮かぶ。

医療・医業に打ち込んでいる、例えば小石川養生所の赤ひげ、「本日休診」の三雲老先生がたには良医のおもむきが感じられる。名先生には肩書も功績も沢山ある。良先生からは、肩書は無くとも、病人と言う人間への温もりが伝わってくる。

その温もりこそが、今の良医を慕いながら、最期を看取って貰う若い良医を探させる所以である。とは言うものの結局は、このまま付き合い続けてしまつて、年長の温(恩)医の最期の病氣見舞いでもすることになるのである。



気楽ながら忙しき変わらぬ

小川

弘

私のこれまでの仕事は、おもに癌その他、病気の診断に應用するラジオアイソトープ標識化合物（放射性医薬品）の研究開発でした。これは戦後アメリカを中心にして急速に発展した学問です。

私は、去年六月の株主総会で専務取締役を退任し、特別顧問に就任しました。気楽になりましたが、忙しさは余り変わらず、会合にも欠席しがちで、申し訳なく思っています。

笑いと苦笑い

許斐 義信

ごく最近、テレビを見ていたら突然、子供と女房から「あなたは笑わないね」「笑いは健康に良いんだそうな」と言われてハツとした。思い出そうとしても、いつから

笑わなくなったのか、それさえ判らない。

エンタテイナーがいかにかに画面ではしゃいでも、「シナリオは誰が書いたのか」「表現力や演技が巧い」「視聴率はどの程度か」などと交通整理をしてみました。自分分が気がついた。指摘されて苦笑いしてみたものの、年をとってしまったとは正にこの事かと、内心では深刻であった。

柳生十兵衛にはなれない

清水

喬

晩秋、緑内障の手術で二十日間ほど入院しました。一昨年に左眼を、今回は右眼をやり、これでやれやれと、ひと安心です。

ビールをつぐのをこぼしたり、まだ不自由です。柳生十兵衛や政宗にはなれません。両眼は大切。複眼思考も大切なのでしょう。

「太平洋地域と映画」脱稿

関谷

裕彦

昨年初めより、創立来関係いたしました在日外資系海運・航空会社で組織する「外国運輸健康保険組合二十五

年史」編集に参加、本年九月完成をメドに作業中のため

例会にも出席出来ませぬ、申し訳なく存じます。最近の作品として「太平洋地域と映画」（太平洋学会創立十五周年記念論文集応募）を三月初め脱稿。引き続き「戦時下の歌舞伎」について資料収集中。懸案の海外駐在時代の亡妻との往復書翰集は整理進まず苦慮しています。

得る所多い異業種交流勉強会

中川

十郎

勤務先の愛知学院大学商学部で貿易英語、国際マーケティング論、国際物的流通論など。名古屋外国語大学英米学科、愛知大学経営学部で商業英語、時事・実務英語を教えている。

ほかに日本ビジネスインテリジェンス協会世話人として東京で月例会、名古屋で年四回異業種交流の勉強会をつづけており、得る所が多い。本年は四月ポストン、八月カナダ・ビクトリア大学、九月にはスペインでのOECDの中小企業国際会議などに出席の予定。

事務局を手伝って

西川

知世

北田さんからの突然の電話で呼び出され、昨年の四月から事務局を手伝っています。四十代半ばの主婦にとって、男性諸氏から西川さんとか、ちよちゃんとか呼んで頂ける場所は貴重で、楽しんでいきます。皆さまの活発な活動、広い知識に感心しつつ、何とかお役に立てればと思っていますが、行き届かないことが多く、また会員の方たちのお顔とお名前が一致せず、失礼を重ねているのが現状です。どうか気軽にお声をかけてご指導ください。俳句教室に参加させていただき、感謝しています。企業OBペンクラブのなお一層のご発展をお祈りいたします。

ヤジ馬根性は旺盛

林

篤二

去年の十一月に入会させて頂きました。生まれつきヤジ馬根性旺盛で、何にでも興味と関心があります。新聞社に長くいましたが、間口は広くても、一知半解の知識ばかり。七十の手習い"をやらせて頂くとうと考えています。よろしく。



「下手の横好き」多々あり 原 信

鳴澤会長のおすすめで、本年一月よりクラブに入会させて頂いた。多士済々の集まりなので、大いに啓発されることを期待する次第。

あと数年は学校勤め。色々好きなことをしたいのだが、当分は専門関係（金融と為替）に限定されそう。それに、この最大不況の中へ卒業生を送り出さなくてはならないのが目下の頭痛の種。趣味は下手の横好きという麻雀・ブリッジ・俳句、それにオペラを含む音楽・野球・ラグビーの鑑賞。どうかよろしくご指導の程を。

置き去りの俳句を再開 吉井 米三郎

一昨年の初夏、知人から見事に白い花を連ねた胡蝶蘭一鉢をいただいた。花がおわると、一本の茎の節から若い葉がでて、やがて空中に根を張りだした。鉢と水苔をもとめ、若者を移植してみた。この二代目が、数は少ないが、親ともども花をつけた。今夏も親子の花を楽

しみにしている。

この過程を見て「現役時代からは想像もつかない変わりよう。案外、仏様のお呼びが近いのかも」と、女房は呆れ怪しんでいる。

つれて、「平凡にたって行く時間の味を噛み締めるのでなければ生きていく甲斐もないし、その意味も解らない」（吉田健一）にうっすらと共感を覚え、若い時代の彼方に置き去りにした俳句を再開しているこのころである。

身在福中不知福 吉寄 清己

貧困、抑圧、強制を体験した者が真の幸福を知る。何恒国さんの言葉である。彼は、私が中国・南昌市塗料工場に技術指導のとき、日本語の通訳をしてくれた。父は中国人、母は日本人で、戦中、神戸の旧制中学を卒業、戦後、父と上海に帰国した。同年齢の彼から教わるが多かった。私は健康で生きる今の幸せを大切に、出会いの旅を続け、中国発展のお役に立ちたいと願っている。

（日本シルバーボランティアズ塗料専門家）

## ペン俳句 …半年の歩み…

平間 真木子 選

郭公の声に汗拭く山路かな 浅野 正春

原稿を書く手を置きぬ蝉しぐれ

居酒屋の屋根を濡らして秋しぐれ

七輪に残る思ひ出秋刀魚焼く

西の市降り込められて酒になり

元朝のたばこ深々吸ひにけり

日暮れまで泳ぎ疲れし土用波

荒れ庭の草刈る膝に赤とんぼ

満員電車触れ合ふ胸に赤い羽根

言葉切れ葡萄の珠を見つめをり

初日記快晴無事と書きにけり

よきことのあるを願ひて初詣

石川 正達

風強しサーファーをどる土用波 亀井 弘次

犬連れて夕暮れに見る雲の峰

赤い羽根胸にさしゆく面映ゆし

日の丸を見るも稀なり文化の日

街路樹にネオンきらめき冬めきぬ

一輪の薔薇に初日の射しにけり

妻留守のセーター探す遠花火 北田 純一

クラブ振る夕日斜めに枯芝に

暮れなづむ路地にかそけき羽根の音

静けさや二タ組のみの祝箸

かがり火や星天に満つ初詣

浜風にたちまち高しとんぼ風

青みかんおのが心の未熟さよ 小林 正憲

せみしぐれ吾も力の限り生く

北風の荒らぶ露天の湯のけむり

ビル街の鈴懸並木冬めける



駅前や枯れし銀杏に鳩の来て  
闘病の友より来たる年賀状

夏蜜柑食べて始まる句会かな

秋刀魚焼く煙の中に母浮かぶ

閑取のもまれて歩く西の市

師走風吹く大和路を妻と行く

破魔矢手に矢切の渡し舟に乗る

元日や屠蘇とワインを並べ置き

雨に濡れ蜜柑の色のまだ青し

もぎ取りし葡萄棚より日の洩るる

雑踏に妻見失ふ西の市

すすき枯れ山の麓の無人駅

浮浪者にひととき焚火明りかな

元日やグラスに冷えしワイン注ぎ

浴衣干す母のかひなの白さかな

箱根路やロープウェイに蝉しぐれ

三枝 亨

櫻井清治

佐份利 治

しろがねの光りまぶしき初秋刀魚  
をみなへし尋ね万葉園巡る

ラグビーの掛け声聞こゆ文化の日

木枯しに先達一人逝きにけり

文化の日妻とフランス料理かな 鳴澤秀影

北風や朝より荒るる能登の海

嫁ぐ娘のまなざしを受け秋刀魚焼く

枯葉舞ふ友の通夜への道くらく

焚火囲む人それぞれの國訛り

異国なる子よりの電話今朝の春

華やきて多く語らぬ賀状かな 原青峰子

恍惚と雑煮の湯気の中にをり

颯風の爪あと残り並木道 森田茂

寒い夏蟬のむくろのあはれなる

受章者に同じ氏名や文化の日

冬めく日柿の実一つ輝きぬ

病みあがりの妻の背丸し落葉焚く  
塾へ行く子等の走れる師走かな

休日ビルの高さや雲の峰

裏庭の夕日に屈み秋刀魚焼く

平安や織部の鉢に葡萄盛り

文化の日紅茶のレモン厚く切り

話止み焚火のうしろ闇深し

御降りや明けの武蔵野錆色に

吉井米三郎

尋ね来し家に盛りの萩の花

食卓の真中に置く初秋刀魚

公園に子等の声満つ文化の日

拭き上げし窓に日ざしの冬めける

母の声少しつやめく年の酒

玉砂利にひびく破魔矢の鈴の音

始めての句座に積まれし青蜜柑

厨房に二百二十日の灯を点す

西川知世

平間真木子

赤い羽根つけて新幹線に乗る  
暗き灯に七味売りをり西の市  
人悼む心に落葉焚きにけり  
元日や常のごとくにパンを焼き

一句鑑賞

平間真木子

平成五年八月に「ペン俳句会」が誕生した。その半年間の歩みとしての作品の中より、一句を取り上げて鑑賞させて頂く。

元朝のたばこ深々吸ひにけり 浅野正春

新年の句。今年こそは、或いは今年もまたと思うことの多い元日の朝。煙草を深々と吸うということだけで、そのすべての思いを読者に感じさせる、これが「省略の文学」である俳句の骨頂でもある。



満員電車触れ合ふ胸に赤い羽根

石川 正達

毎年恒例の「赤い羽根」は愛の羽根でもある。満員電車のぎすぎすした中に、ふと見えた赤い羽根。対象は若い女性であったかもしれない。心の和む一瞬をさりげなく表現していて、作者の優しさが感じられる。

駅前や枯れし銀杏に鳩の来て

小林 正憲

いつも通り馴れた駅前の景。つい半年前の作者であれば、なにかもなく見過ごしたその景である。俳句手帳を持つようになって、昨日までが嘘のように、違った眼をしていることに気がつかれたことであろう。

日の丸を見るも稀なり文化の日

亀井 弘次

十一月三日、文化の日。「明治節」として育った世代には、なにか面映ゆい思いがある。その昔は、どここの家にも掲げられた日の丸であったが、今はほとんど見られない。その事実をそのまま述べた句で、作者の人の柄のしるべられる作品である。

師走風吹く大和路を妻と行く

三枝 亨

納めの旅を大和路として、足取りもゆるやかに、楽しい作者の姿が見えてくる。忙しく、働きずめであった日々のおとに、妻との旅を楽しむことは、妻への感謝でもあり、これからの人生を二人で歩いて行こうとする気持ちの現れであろう。

クラブ振る夕日斜めに枯れ芝に

北田 純一

自宅の庭での練習風景であろうか。或る年齢の、余裕と落着きの感じられる作品で、夕日と枯れ芝の醸し出す風情が快い。句会にて、続けざまに一位を獲得する熱意と精進の方である。

恍惚と雑煮の湯気の中にをり

原 青蜂子

つい最近この会に参加された作者は、俳句歴の長い方で、すでに句集も上梓されておられる。今後、この会の牽引力となって下さることを期待したい。一句の中の「恍惚」の語に籠められた思いは大きい。

浮浪者にひととき焚火明りかな

櫻井 清治

不況を反映して、ホームレスと呼ばれる人が増えている。寒い夜の焚火に、ひとときの暖を得る姿を見ては、心の痛む作者である。その思いを「焚火明りかな」と表現したことに、俳句のありようを会得された、と拝見した。

塾へ行く子等の走れる師走かな

森田 茂

昨今は塾へ通う子等が走って行く「師走」となったようである。世相をたんとんと、しかし、きちんと見詰めて作る俳句も当然あってよいとおもう。川柳との差を守り切る努力をしなければならない。

木枯しに先達一人逝きにけり

佐份利 治

河村幸一郎氏を悼む句である。俳句は挨拶を大切にし、慶弔句を丹念に作り続けてゆくものである。先達として故人の面影を胸に度しむ作者の姿が見えてくる。ご遺族に差し上げるに相応しい一句といえよう。

御降りや明けの武蔵野錆色に

吉井米三郎

新年の季語「御降り」は、元日に降る雨または雪のことをいう。作者の住む武蔵野の肅条たる景を「錆色」と表現したところに、芸の力が感じられる。

母の声少しつやめく年の酒

西川 知世

ほんの一口の年酒に、頬を染めている母親の姿を、「母の声少しつやめく」と娘は見ている。元日の明るさ、華やきというものの感じられる作品で、楽しい俳句となっている。

文化の日妻とフランス料理かな

鳴澤 秀影

海外駐在の長かった作者らしい、ダンディな楽しい作品である。いまは何処にでもあるフランス料理店ではあるが、さり気なく「妻」と行くといい、それが「文化の日」というところに、作者の顔の見える思いである。



## 河村幸一郎さんを偲んで



当クラブ会員、河村幸一郎さんは、前立腺がんのため療養中のところ、昨一九九三年十一月七日、永眠されました。享年七十三歳。一九二〇年（大正九年）生まれ。昭和十八年、京都大学法学部を繰り上げ卒業、短期現役主計士官として海軍に入られ、終戦とともに住友電気工業株式会社に入社、のち住友商事株式会社に転じられ、アルゼンチン、英国など海外勤務を経て定年退職。企業OBペンクラブには発足以来参加、クラブの発展に寄与され、名誉会長を務められました。

### 見果てぬ夢を

西島 力

河村幸一郎さんへの追悼文を書きます。

世の中の慣習では、追悼文となると、やたらに亡くなった人を誉めそやし神様にしてしまう傾向があります。それは私の趣味ではなく、また河村さんもそういうこ

とはお嫌いだと思います。ましてや文筆をもって集うペンクラブの沽券にかけても、私は誉めるのは止めようと思います。

三十余年前、河村さんが住友電気工業から住友商事に移られ、私の直属上司になられてからのことですから、ペンクラブの会員の中でも私が一番お付き合いが長いのではないかと思います。

3、女性を大事にする

4、外国語の習得に熱心

5、書くことが生き甲斐

いずれも至極まともな事ばかりで、何が一体変わっているのか、と聞かれるとちょっと困るのですが、つまり世の中の標準がそうではないから、と答える他ありません。

課長であるミルキーさんの部下慰労のやり方は、特定の酒飲みの取り巻きを従えて飲み屋でぐだらぐだらとやるのではなく、年に何度かご自宅に男女課員の全員を呼んで家庭料理でご馳走されるのでした。これは奥様が大変な美人であり、かつ料理上手であるためでもあります。ところが、何となく国際派ミルキーさんの way of life

ところで河村さんのあだ名は

「ミルキー」です。お顔をご存じの方はハハーンとくるでしょう、あの不二家のポコちゃんペコちゃんのポコちゃんです。住友電気工業時代から既にミルキーさんで通っておりまして、ご本人もご納得のあだ名であります。その証拠に河村さんご自身が「Milky」というハンコをお作りになっていたくらいですから。

ミルキーさんは少し変わった方でした。もっとも人間はみんな少しずつ変わっていて、だからこそ個性というものが成り立つのです。どこが変わっているか、思いつくままだに並べてみましょう。

- 1、すこぶる純真
- 2、正論を尚ぶ

ズエラ駐在員として発令されたのは私自身で、河村さんは何年か後に念願のアルゼンチンに出られたのです。

その後お互いに所屬が転々とするうちに定年となりましたが、河村さんは在職中から文筆活動に積極的で、しばしば新聞紙上に積極的に会社人間でない立場からの言論を発表しておられました。私も文筆を志す者のはしくれとして、特に関心をもって拝見しておりました。こういう人種はなんとなく剣術の修行者に似て、先輩に対してまことに失礼ながら、「ムム、おぬし、できるな」などと呟いたものがあります。

私は定年退職後、ひよんなことからペンクラブに入りましたが、

を象徴しているような気がします。

河村さんは英語がご堪能な上、スペイン語も、下手な外語卒業生が真つ青になるくらいの熟達ぶりです。南米に駐在員で出たいというご希望をお持ちでした。東京オリピックの年でしたか、私は本部長から「南米各国を視察して本部から駐在員を出すとしたらどこがよいか調べて来い」という特命を受けました。出発に際して河村さんからは「俺の行く先を見付けてくれ」と耳打ちされました。私自身はスペイン語も出来ませんし、南米よりも東南アジアの方が性に合っていると思っておりましたので、河村さんに行って戴くというつもりで、ベネズエラを最適地として答申しました。ところがベネ



それまで企業OBペンクラブというものの存在も、そこに河村さんがおられるということも、全く知りませんでした。そこで再びあの昔と変わらぬミルキーさんにお会いしたのです。

会社時代、ペンクラブを通じて、私にはミルキーさんが何となく、見果てぬ夢を追い続け、痩せ馬に跨がり風車に向かって突進する、あの真摯にして硬骨の士、ラ・マンチャの男、ドン・キホーテに見えて仕方がありません。私は、河村さんに、ドン・ミルキホーテ(Don Milquixote)の称号を奉らうと思います。

ドン・ミルキホーテ、とこしえに見果てぬ夢を見続けて下さい。

## 河村幸一郎さんを悼む

平間 真木子

回復 河村 幸一郎

回復や君が手打ちの夏うどん  
回復を励ます梅酒いただきぬ  
ピアノ曲洩れくる窓の凌霄花  
梅雨寒の机に硬き爪を切る  
セーターを着て迎へたる大暑かな

河村さんは「青山」十一月号に上記五句を発表された。「回復」の二字が目にしみて、うれしい思いに拝見したのであった。だが、三年前に手術された前立腺癌の転移が思いのほか早く進み、十一月七日急逝された。享年七十三。深

悼。

菊地凡人さんのご紹介で青山に入門。声の大きな、元気な方という第一印象であった。爾来、勉強会・虎ノ門句会に出席され、ロマン会にも積極的に参加された。数年の歳月であったが、ひたすら風雅の交わりを深めて来られたのである。

東京生れの歯切れのよさに旧海軍出身のスマートさを加え、背筋の正しい姿勢はさすがであった。

住友商事に長く勤務され、海外経験を積まれた博識など、話題の豊富な楽しい方で、思い出されることが多い。

また、平成元年に結成されたビジネスマンOB有志の組織「企業OBペンクラブ」の名誉会長とし

て、その豊富な人生体験・幅広い国際見識・体験的企業知識などを駆使し、多数の出版や講演活動を行なってこられた。更に平成五年

八月より、新たに同会のペン俳句部会を起されたところであった。同ペンクラブにおける、なお一層のご活躍を期待されていた折のことと、まことに残念である。

十一月十日のご葬儀は、世田谷・太子堂の「圓泉寺」にて行われた。通常の葬儀・告別式につづき、旧海軍の有志による「海軍葬」が取り行われた。それは、柩を海軍旗に包み、十六人のラッパ吹奏による葬送ということである。冬空に響きわたるラッパの音は、戦後五十年の歳月を越えて、「海軍短期

十期生」であった故人を送るに、まさに相応しいものであった。

最後に、「青山」誌上に発表された趣味の写真の句、奥様への感謝の気持ちを含めての句ほかを掲げ、追慕と哀悼の一文とさせていただき、ご冥福をお祈り申し上げます。

揺れ止むを待つや接写の花すすき

(平5二月号)

接写して桜の精を撮りにけり

(平5七月号)

記念艦「三笠」艦上五月風

艦上に米国武官とビール酌む

(平4九月号)

古稀すぎの身を伸しめる柚子湯かな  
(平5四月号)

雛あられ妻へ感謝の気持とも  
草餅の二つにて足る二人かな

(平5六月号)

—青山・平成六年一月号より—

## 河村幸一郎さんと俳句

櫻井 清治

紅葉山重なりあふて奥深し

金沢八景「森の家」のペランダから、紅葉の山々を眺めての河村さんの句である。

平成四年十二月六日の夜、企業OBペンクラブ泊まりこみの忘年会が「森の家」で行われた。

割り当てられた同室者は、河村、



西島、上沢、佐份利、森田、角谷の諸氏である。宴会のあと、部屋でワインを飲みながら、おそくまで語りあったが、話題の多い、楽しい一夜であった。

次の日の朝、ベランダからみえる山々の紅葉が日に映えて美しい。そばに河村さんがおられた。かねて俳句の達人と聞いていたので、「一句いかがですか」と声をかけた。六、七秒くらいだったか、つぶやかれたのが冒頭の句である。

「絵をみているようだなア」と、トンチンカンなコメントをした。

その数日前、紅葉の奥多摩にいった。遠く近く重なりあう山々の色をだすのがむずかしかった。句の「奥深し」に、絵になる遠近感がよく出ていると思ったからである。

河村さんは「ウン」と軽くうなずいておられた。

河村さんがプロ・マネをしておられた「風と炎」のミーティングのあとだった。河村さんが二つの俳句をみせた。「櫻井さん、どちらがよいと思うか」とのおたずねである。

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

千代女

古池や蛙飛びこむ水の音

芭蕉

俳句にまったく素養のない私でも知っている名句である。「芭蕉の句の方がよいと思う」と答える。「どうして」となかなかきびしい。

「千代女のは理屈っぽい」と言ったが、またどうしてと聞かれそうなのがして、「短歌の写生論からの感じですよ」とつぶやいた。「その通りですよ」とおっしゃった。いい気分になって「写生論」「実相観入論」などを少し話した。余計なことだったかなア、とそのあとだった。

あるとき、河村さんがおっしゃった。「今度この会に入られた平間眞木子さんは、俳句の先生だよ」。その後、平間さんをお願いして句会が開かれることになった。河村さんが私に「これを機会に、俳句をはじめたら」とすすめてくれた。吉井米三郎さんからも誘われていた。

俳句について、何の知識もない

まま、この会に出席して驚いた。その場で題が出される。季語にはじまり、たくさんのルールがあるらしい。限られた時間のうちに仕上げねばならぬ。大変な瞬発力がある。短歌に似た型の短詩と思っていたが、解釋装置とプロセスは大分ちがう。同じ陸上競技の、百メートルとマラソンの違いのようである。

四苦八苦してようやく作ると、今度はみんで点を入れあうという。緊張することおびただしい。ある友人が、短歌と俳句のちがいを「能と歌舞伎」とっていた。とにかく、私のような、のろまで気の弱い人間にはむかないな、と思っただが、そのうち平間俳句会の落ち

着いた雰囲気が出てくるにつれ、余裕らしいものをもてるようになってきた。

この句会で、河村さんとご一緒になることはなかった。会のはじめまったところより、お体の調子がわるくなっておられたのだろうか。

河村さんがお元気であつたら、日本の詩の心と型のことなど話しあえたと思ひ、残念である。赤いチェックのボタンダウンや、ざくつとしたジャケットをダンディーに着こなし、目をひらき、口を少しとんがったようにして、心をこめてなにかと話して下さった河村さんのことを、折にふれて思い出す。

合掌

(一九九四年一月)



企業OBペンクラブの5年(年表) [敬称略]

平成元年(一九八九年)

8月X日 矢野成典が八木大介に電話で呼び掛ける。

9月13日 九大商社に会員推薦を依頼。

10月17日 第一回商社マンペンクラブ設立準備世話人会。出席：矢野、白川澄嘉、八木、木村親、坂本宇一郎、大西喜也。

10月22日 第二回世話人会。企業OB作家連盟に名称変更。出席：八木、木村、矢野、宮坂義一。

11月2日 『運営要領および運営方法』発送。

11月22日 企業OB作家連盟初会合(創立日)。出席：

八木、木村、宮坂、田岡義計、田中良平、北田純一、牛場靖彦、山本篤、矢野、白川、萩原康弘、岩田正男、横堀喜久、小林正憲、宇都宮弘昌。欠席：河村幸一郎、坂本。  
役員選出：世話人代表八木。事務局長木村。世話人矢野、宮坂、河村、坂本、白川。

平成2年(一九九〇年)

1月22日 1月例会。入会：阿部、山田、大丁原幸三、許斐義信。

2月23日 2月例会。6プロジェクト発足。入会：中川菊司、山辺武麿、浅香正美。

3月23日 3月例会。クラブ名を企業OBペンクラブと決定。入会：上沢準一、佐份利治。

6月22日 6月例会。入会：池田善行、帯刀与志夫。

7月26日 7月例会。入会：角谷朗宏、瀬戸新策。

一、クラブの誕生

一九八九年の秋、前参議院議員八木大介(以下すべて敬称を略す)から「ペンクラブを作るから出てこい」と召集令状が舞い込んだ。ペンクラブなどに興味はなかったが、とにかく指定された十一月二十二日に丸の内養和クラブに赴いた。

そこには三菱商事OBの八木大介、木村親(ちかし)、田岡義計、田中良平、牛場靖彦、山本篤。三井物産からは矢野成典、白川澄嘉、萩原康弘、岩田正男。住友商事から宮坂義一。ほかに八木の議員時代の後援団体から宇都宮弘昌、横堀喜久、小林正憲らが集まっていた。この日は欠席したが、住友商事から河村幸一郎、丸紅から坂本宇一郎も参加するので、私を含め総勢十七名となる。

すでに『企業OB作家連盟(仮称)運営要領および運営方法』案が配られており、当日は役員選出が行われ、世話人代表は八木、事務局長に木村、世話人は矢野、宮坂、河村、坂本、白川が選ばれた。こうしてペンクラブ

は結成された。会の名称が現在の『企業OBペンクラブ』になるのは翌年三月二十三日(平成二年)の月例会であるが、当クラブの誕生日は、この旗揚げ日の一九八九年十一月二十二日とするべきであろう。

記録によれば、ペンクラブ構想の切っかけは、一九八九年八月(平成元年)、参議院議員をやめたばかりの八木に矢野が電話をかけたことに始まる。

八木は三菱時代の同僚、木村に声を掛け、矢野と三人で相談を重ねた。最初の構想は、総合商社OBによる『商社マンペンクラブ』だった。同年九月十三日付けで九大商社に手紙を出し、会員の推薦を頼み、十月十七日に第一回設立準備世話人会を開いた。集まったのは八木、木村、矢野、白川、坂本とニチメンの大西喜也の六名。十月二十二日に第二回設立準備世話人会を開いたが、出席者は八木、木村、矢野、宮坂に過ぎなかった。このため募集範囲を広げ、名前も『企業OB作家連盟』に改め、十一月二十二日の旗揚げに持ち込んだものである。クラブの生みの親は提言者である三井の矢野というべきであり、第一の功労者は三菱の八木と木村である。



8月24日

8月例会。プロジェクト現状報告。

一、駐在員体験記の国別執筆者決定。

二、体験的英会話河村リーダーの病気で中断。

三、八木が「無邪気な日本人」を提案。

会員講話 木村クウェートの内幕。

9月28日

9月例会。事務局長交替北田が就任。無邪気な日本人、マネジメント社で出版決まる。

退会：帯刀。

10月18日

「無邪気な日本人」のプロジェクト会議、百編方式の嚆矢。

10月26日

10月例会。外部講師講演 ダイヤモンド社 川島讓社長。

11月9日

臨時世話人会。PR方法検討。

11月21日

11月例会。

役員異動：代表八木。事務局長北田。

世話人矢野、萩原、河村、宮坂、木村、浅香。入会：竹内京一、城田修一、杉本碩也

野村嘉彦。退会：山本。

12月19日

12月例会。

一、「無邪気な日本人」出版記念パーティー実施決定。

二、フジモリ大統領支援決定。

三、事務局増員：浅香、竹内事務局入り。会員講話 野村 北朝鮮の内幕。

平成3年(一九九一年)

1月23日

1月例会。印税配分方法を決定。

会員講話 北田 大変革の予兆。

2月25日

2月例会。外部講師講演 鳴澤宏英 ソ連東欧の経済情勢。

2月25日

出版記念パーティー「知らぬは日本人ばかりなり」。

3月20日

3月例会。入会：鳴澤、増田一美、安藤富三、関谷裕彦、広瀬英策、村上啓二、矢野昭典、森田茂。退会：横堀。

4月17日

4月例会。

二、クラブの基礎固め

世間一般のペンクラブは文筆を業とするプロの親睦団体であるが、当クラブはプロ集団ではない。目的とする国際感覚の啓蒙をどのような方法で実行するか具体策が見付からず、もたもたしているうちに、早くも一九九〇年の一月には坂本、白川、岩田、宇都宮らが退会した。しかし、入れ替わりに、一月に阿部良夫、山田栄作、大工原幸三、許斐義信、二月に中川菊司、山辺武鷹、浅香正美、三月に上沢準一、佐份利治らが入会。クラブは活気を失うことはなかった。

活躍の場を求めて世話人が出版社や雑誌社を駆け回って調査し、二月には六つのプロジェクト・チームを組織して原稿を集めることになった。(括弧内はプロジェクト責任者)

- 一、難民と外人労働者 (八木)
- 二、駐在員体験記 (木村)
- 三、島国根性とナショナリズム、体験的英会話(河村)
- 四、異文化の交流 (矢野)
- 五、日本本社と海外、現地化とは (萩原)
- 六、国際的経営とは (阿部)

しかし、掛け声ばかりで原稿が集まらないので、本当に書ける人材を求めて勧誘に努め、一九九〇年には十七名の新会員が入会した。退会者六名を差し引いても年末の会員数は二十八名とほぼ倍増した。

プロジェクトも自然淘汰され一九九〇年八月まで残っていたのは次の四つである。

- 一、駐在員体験記米州編(中経出版社) 責任者 北田
  - 二、" アジア編(中経出版社) " 浅香
  - 三、体験的英会話 (中経出版社) " 河村
  - 四、無邪気な日本人 (未定) " 八木
- 中経出版社の三冊は何回も書き直した揚げ句、結局計画は中断し、原稿は今もそのまま残っている。幸いにも『無邪気な日本人』は着眼点の良さが買われ、マネジメント社家辺社之助社長の引き受けることとなり、当クラブの栄光ある最初の一冊となった。

十月十八日、マネジメント社の平原琢也編集長を招いてプロジェクト会議が開かれ、一編二ページ(四百字詰め原稿用紙三枚)、百編で一冊になる百編共著方式の説明を受けた。この百編方式は素人集団には極めて取り付きやすい方法で、以後当クラブの基準方式になった。



役員呼称変更：会長八木。名誉会長矢野、宮坂、河村。事務局長北田。常任幹事浅香、竹内。専門幹事阿部、小林、佐分利、城田、瀬戸、森田。  
入会：石山茂宣、小野胖、永井義昭、西島力、福井律、吉田昭、石川義一、石川正達、保科、吉井米三郎。

5月15日

5月例会。役員呼称再変更：会長八木。名誉会長矢野。副会長阿部、宮坂、河村。事務局長北田。常任幹事浅香、竹内。専門幹事石川、小林、佐分利、城田、瀬戸、西島、森田。  
入会：小川弘、櫻井清治、真尾悦子。退会：保科(会員数47名)。  
会員講話 城田 ビルマの内幕。

6月19日

6月例会。雑誌・新聞へ重点シフト。入会：岩崎慶二、宮沢漸、藤田隆、遠藤俊也。  
会員講話 牛場 直近の欧米。

7月17日

7月例会。雑誌路線強化、没原稿の集中管

理。

一、雑誌スクウェア21、マテリアル・マネジメント。

二、国際開発ジャーナル。

三、日本経営者新聞にゴマスリ作法。

入会：長澤孝太郎。退会：中川菊司。

会員講話 許斐 日本産業の軌跡。

8月21日

8月例会。入会：三枝亨、大海宏。  
会員講話 関谷 南アフリカ。

9月18日

9月例会。  
会員をABCにクラス分け。  
企画委員会設置：委員長は会長、委員：役員とA会員(小林、山辺、佐分利、西島、桜井、森田、浅香、三枝、野村)。  
入会：飯島尚真、木村勲。  
会員講演 矢野 直近のアメリカ。

10月16日

10月例会。会長代行・企画委員長代行を設置：佐分利が就任。  
呼称変更：常任幹事、専門幹事を廃止し、

八木を中心に、阿部、池田、宮坂、木村、小林、佐分利、山辺、大工原、北田が無我夢中で筆を進めた。しかし、リーダーの八木は、素人のなぐり書きに近い原稿を一冊の本に纏めるのに大いに苦労した。八木はこれに懲りて文章習練を喧しく口にするようになった。  
それにしても、海のものとも山のものとも分らない素人クラブに温かい手を差し伸べてくれた家辺社長には感謝のほかはない。当クラブによりやく曙光が見えはじめたのである。

### 三、PR作戦

一九九〇年九月二十八日は私にとって厄日であった。木村事務局長が癌治療のため入院するというので、この日の例会で私が不在のまま後任の事務局長に任命されてしまったからである。

最初の課題はクラブのPRであった。十一月九日には臨時世話人会を開き、この問題が討議された。八木は『無邪気な日本人』の出版記念パーティーを開き、マスコミ関係者を招待することを提案した。矢野は印税の一部をペルーのフジモリ大統領に寄付することを提唱した。

いずれも名案である。人手のない事務局にとっては荷が重すぎるが、クラブ発展のためにはやるしかない。

パーティーは費用が問題だった。八木は彼の印税取り分を全額寄付すると申し出たが、これで足りるわけではない。とにかく資金はマネジメント社に一時立て替えてもらうことで凌いだ。

フジモリ大統領支援の段取りも頭が痛かった。ペンクラブだからペンをペルーの子供達に贈ると、実際の贈与に先立って新聞発表をする作戦をとった。

大統領宛ての手紙は三菱商事の村上啓二に頼んだ。彼は自分の訳文を神田外語のメキシコ人に見せて大統領宛ての手紙として恥ずかしくないかどうかをチェックし、完璧なものを作ってくれた。駐日ペルー大使にも手紙を書きパーティーへの出席を頼みに行った。

一九九一年二月二十五日に『無邪気な日本人』は『知らぬは日本人ばかりなり』と名をかえて出版された。記念パーティーも三井物産のカフェテリアを借りて大成場のうちに開かれた。ペルー大使も駆け付けてくれた。会場での募金も九万円に達し、ペルー基金は印税分を足して約十五万円になった。だが、十五万円ぼっちはペン



企画委員を主筆と改称。

入会：黒澤慎治。

会員講話 佐份利 日米の技術交流。

11月6日

「国際マナーの常識非常識」出版記念パーティー開催。

11月20日

11月例会。日刊ゲンダイより「歪んだ日本株式会社」の連載依頼を受ける。

外部講師講演 石城太造 歴史研究会書式。

12月18日

12月例会。会計担当新設(森田就任)。  
年会費値上(¥一〇、〇〇〇)決定。

クラブ書式を歴研方式に統一。

「総合商社の未来像」マネジメント社で出版さまる。日本実業出版より「よくわかる商社業界」「知的老後生活」の依頼あり。

会員講話 黒澤 日本の技術。

平成4年(一九九二年)

1月22日

1月例会。退会：城田(一月九逝去)。  
会友制度創設。

稼働中プロジェクト点検

一、雑誌連載 スクウェア21 話のパーティ

オ

二、〃 マテリアルマネジメント こー

ひーぶれいく。

三、〃 国際開発ジャーナル ビジネ

スマンの備忘録。

四、新聞連載 日本経営者新聞(日本経営

者同友会)「ゴマスリ作法」。

五、〃 日刊ゲンダイ 歪んだ日本株

式会社。

六、単行本 マネジメント社「総合商社の

未来像」。

七、〃 日本実業出版社「よくわかる

商社業界」。

八、〃 「知的老後生

活。

九、原稿買取 学習研究社「サラリーマン

ゆうゆう生き方知恵袋」。

会員講話 瀬戸 ゼロ戦と技術

2月21日

2月例会。

の贈呈にしても余りに少なすぎる。

しかし、やればできるものである。話を聞いた三菱鉛筆が「それぐらいなら無償で差し上げます」と時価百万円相当の鉛筆とボールペンを寄付してくれた。

ペルーへの輸送は日本ペルー協会の後押しもあって川崎汽船が船長託送つまり只で運ぶことを承知してくれた。ところが意外にもペルーの経済悪化で、日本からの船便がほとんど無く、やっと十月になってエムデン号なるチャーター船が見つかり、遅れ馳せながら何とか無事積み出すことができた。クラブは出費ゼロで第一回の支援作戦を完了した。十二月になって大統領秘書官から丁寧な礼状を頂戴した。

出版記念パーティーとフジモリ大統領支援の狙いは的中した。『知らぬは日本人ばかりなり』がユニークだったこともあって、日経、産経、朝日、毎日、読売の各社が次々に企業OBペンクラブを記事にし、NHKもテレビで報じてくれた。多くの雑誌社からも取材を受けるようになった。PR作戦が成功し、企業OBペンクラブは知る人ぞ知る存在となった。

#### 四、試行錯誤

第一作が成功したことにより、クラブは勢いづいた。『アメリカ縦から横から斜めから』、『日本人とマナー』など九つもの新しい企画が次々と提案された。会員も続々入会し、一九九一年末には会員数五十六名に達した。だが、原稿の集まりは悪い。プロジェクトは中途半端な数の原稿を抱えたまま、軒並み暗礁に乗り上げてしまった。

折角の原稿を無駄にしないため、これらを雑誌社や新聞社に売り込むことを考えた。八木の顔と『知らぬは日本人ばかりなり』の評判のお陰で、にじゅういち出版社や国際開発ジャーナル社などから出稿を求められた。単行本と違い、雑誌は毎月が勝負である。穴をあけるわけにはいかない。以前にもまして会員の質の向上が求められるようになった。

レベル向上策として、外部から有識者を招いて教える仰ぐことになった。その一番手として一九九〇年十月二十六日の月例会にダイヤモンド社川島讓社長を招き、業界の内幕を聞いた。同社がロンドン・エコノミスト誌に提携を申し入れたところ、レベルが違つと断られた話が



入会：柴垣復生、石城太造、アブドルカー  
ダー栄子。

退会：矢野、宮坂、牛場、萩原。

会友：岩崎、角谷、宮沢、村上、石城、ア  
ブドルカーダー。

掲載完了：日刊ゲンダイ「歪んだ日本株式  
会社」。

発刊：マネジメメント社「総合商社の未来  
像」。

新プロジェクト

週刊ダイヤモンド 人事考課苦勞話佐分利

講演 日本能率協会先輩からのメッセージ

北田。

会員講話 長澤 欧米の企業風土比較

3月17日

3月例会。会則委員会発足、委員長河村

入会：池松保央、西東玄、小林元常、衛藤

甲子郎、岩瀬昭三、浅野正春、高後雅行。

退会：阿部。

会友：石川(義)、石山、増田、山田、岩瀬

小林(元)。

新プロジェクト

印象的だった。

一九九二年二月二十五日には東京銀行の鳴澤宏英(現  
企業OBペンクラブ会長)に、ソ連・東欧の経済情勢に  
ついての講演を、同年十一月二十日には産経新聞OBの  
石城太造に文章の書き方について講義してもらった。こ  
のとき教えられた歴史研究会の書式がクラブの標準書式  
となって会員に定着した。

貧乏所帯では外部から度々講師を招くわけにはいかな  
い。そこで会員の相互理解促進もかね、会員が毎月一人  
ずつ専門分野について話をするようになった。

木村のクウェートの話、山辺のアラブの系譜、野村の  
北朝鮮、許斐の日本産業の軌跡、黒沢の日本の技術島嶼  
長沢の企業風土の欧米比較などが印象深かった。

一九九二年六月から日本能率協会の講演プロジェクト  
が発足したので、会員講話はそのリハーサルを兼ねるよ  
うになった。だが、毎月一人ずつでは全員が話し終わる  
のに五、六年もかかる。会員の相互理解促進は思うよう  
に進まなかった。

文章力は石城の講演のほか、八木や石川が文章教室を  
開いたり、原稿を直接チェックして向上を計った。会員

日本工業新聞 随想

福井

会員講話 上沢 アフリカ裏表。

4月15日

4月例会。

入会：齊藤勤、大塚滋、亀井弘次。退会：

浅香。

掲載完了：週刊ダイヤモンド「人事考課の

苦勞話」。

新プロジェクト

風と炎に触発されて 産経出版

河村

会員講話 上沢 続アフリカ裏表。

5月20日

5月例会。会則制定。

入会：石井正紀。

発刊：学習研究社「サラリーマンゆうゆう

生き方知恵袋」。

計画中止：中経出版 駐在員体験記 北田

延期決定 “ 体験的英会話 森田

新プロジェクト

パラダイムシフト

フライト・ライフ

上沢 柴垣

の筆力は短期間に長足の進歩を見せた。しかし、自分の  
原稿に人の手が入ることは気持ちの良いものではない。  
プライドを傷付けられ、まかり間違えば、反目の素地と  
もなりかねない。

事務局の最大の苦心は、いかにして多くの会員を会の  
行事に参加させるかであった。行事そのものを面白くす  
ることも大事だが、欠席会員にクラブの現状を知らせ、  
いつからでも参加して貰えるように連絡し続けなければ  
ならない。事務局長はワープロ打ち、コピーとり、封筒  
入れ、切手貼りなどに明け暮れることになる。そんなサー  
ビスを重ねても月例会出席者は二十数名、常時文筆活動  
に参加してくれる会員は十名あまりになってしまふ。

この現実を踏まえ何度も制度改革が計られた。クラブ  
発足の当初は役員の名称も世話人代表、事務局長、世話  
人だけだったが、一九九一年四月に会長、名誉会長、事  
務局長、常任幹事、専門幹事、更に翌五月には副会長が  
加わった。

同年九月には会員を活動力の有無に従い本人の申告で  
ABCの三クラスに分け、A会員を企画委員としてBC  
会員の奮起を促そうとしたこともある。



会員講演 八木 陋規と清規。

6月17日 6月例会。会員の慶弔規則決定。  
理事辞任：山辺。

入会：清水喬、中川路明、藤岡豊。  
発刊：日本実業出版社「よくわかる商社業界」。

「六〇歳からの知的生活」。

掲載完了日本経営者新聞「ゴマスリ作法」  
新プロジェクト

日本実業出版社「六〇歳からの趣味達人」

森田

会員講話 北田 北米と南米の比較。

7月22日 7月例会。入会：正木豊、木村昭。

新プロジェクト

一、マネジメント社「アメリカ人と理解し合うために」 佐份利

二、エモーチオ新人生ペンクラブ運動八木  
三、アジア時報アジアほかでの体験 石川

四、マネジメント社「平成再建」 北田  
五、未定 こんな日本に誰がした 八木  
会員講話 三枝 アラブの裏表。

8月19日 8月例会。新理事：石川正達。

文章教室発足 講師 石川。  
会員講話 柴垣 メーカー営業の神髄。

9月17日 9月例会。新理事：浅野。

入会：泥谷直大。  
会員講話：西島 国際間の誤解

10月21日 10月例会。

英文名称決まる。The Company Veterans  
PEN Club(CV PEN Club)  
小説研究会発足 リーダー 八木。  
会員講演 森田 英語のジョーク。

12月6日 忘年会兼研究会 横浜上郷森の家

12月17日 12月例会。会長改選選挙(はがきで投票)  
会員講話 小林 無駄の効用。

この制度は翌一九九二年には発展的に解消され、A会  
員を主筆、C会員を会友と呼び、仕事は主筆が手分けし  
て処理する態勢を取った。会友は名前だけの存在となっ  
た。

一九九一年十月には会長代行、企画委員長代行が設け  
られ、いずれも佐份利が就任した。プロジェクトの多様  
化、多量化にともない、渉外業務が急増して会長と事務  
局長だけでは手が回らなくなったからである。

仕事の増加に従い、原稿料収入も増え、その配分業務  
や税務申告用書類の作成など会計事務が忙しくなったた  
め、一九九二年より会計担当を設けて事務局から独立さ  
せた。最初の会計担当は森田茂、一九九三年には三枝亨  
にバトンタッチされた。

### 五 隆盛期

一九九一年十月、第二作『あっと驚く国際マナーの常  
識非常識』がマネジメント社から発売され、十一月六日  
に二回目の出版記念パーティーを開催した。企業OBペ  
ンクラブ隆盛期の始まりである。

出版業界はクラブの特色に着目した。海外経験、企業

内知識、定年後のノーハウの豊富さに注目し、マスコミ  
もペンクラブを好意的に報じてくれた。あちらこちらか  
ら原稿や講演の依頼が舞い込むようになった。一九九二  
年初頭のプロジェクト(カッコ内は責任者)は

- 1 マネジメント社 総合商社の未来像 (八木)
- 2 日本実業出版社 よく分かる商社業界 (三枝)
- 3 〃 六十歳からの知的生活 (森田)
- 4 学習研究社 サラリーマン悠々生き方(佐份利)
- 5 雑誌スクウェア21 話のパーティオ (西島)
- 6 マテリアルマネジメント こーひーぶれいく(〃)
- 7 国際開発ジャーナル ビジネスマンの備忘録(野村)
- 8 週刊ダイヤモンド 人事考課の苦勞話 (佐份利)
- 9 日本能率協会講演 先輩からのメッセージ(北田)
- 10 日刊ゲンダイ連載 歪んだ日本株式会社 (八木)
- 11 日本経営者同友会 ゴマスリ作法 (石川)
- 12 日本工業新聞 随想 (福井)

と盛り沢山で、しかも、このいずれもが一九九二年中に  
実を結んだ。

なかには『話のパーティオ』や『こーひーぶれいく』の  
ようにそれぞれの雑誌の名物読み物となって、今日なお



平成5年(一九九三年)

1月20日 1月例会。八木会長再選(得票率95%)。会友廃止。

入会：平間真木子、中野隆夫。  
退会：飯島、岩崎、矢野昭典。

発刊：日本実業出版社「六〇歳からの趣味達人」。

〃 マネジメント社「アメリカ人と堂々わたりあう本」。

会員講話 長澤 欧米の企業風土。

2月17日

2月例会。新組織策定委員会発足 委員長 北田。

入会：中川十郎。

退会：池松、大工原、広瀬、藤田、小林(元)村上、安藤、石山、杉本、山田、大海、石川義一。

発刊：マネジメント社日本再生一〇〇創案。会員講話 河村 クリントン政権と日本。

3月17日

3月例会。

新設：編集委員、企画委員、編集協力者、

編集企画委員会(廃止：理事会)。

原稿料配分率改定：執筆者6、プロマネ4、クラブ経費は各自が手取の20%。

編集企画委員会確認プロジェクト

一、小説山本元帥 雑誌「黙」 宮沢

二、体制批判 マネジメント社 八木

三、人生のリカバリー 〃 三枝

四、世界の裏味 〃 柴垣

五、藪にらみの科学 日本実業出版 小林

六、60歳シリーズ第3弾 〃 北田

七、日本を外人に説明する本中経出版森田

八、体験的英会話 〃 〃

九、パラダイムシフト 未定 上沢

一〇、駐在員の妻たち 〃 真尾

一一、定年後の生活 〃 衛藤

一二、話のパティオにじゅういち出版西島

一三、こーひーぶれいく 〃 〃

一四、随想 日本工業新聞 福井

一五、講演 日本能率協会 北田

一六、〃 情報工学処理協会 木村

4月21日

4月例会。

ロングランを続けているものもあれば、日本実業出版社の『六十歳からの知的生活』のように七版を重ねるものも現れた。

日本実業出版社からは引き続き『六十歳からの趣味達人』を依頼され、マネジメント社からは『アメリカ人と堂々わたりあう本』と『日本再生一〇〇創案』が持ち込まれた。これらは年内に脱稿し、翌一九九三年一月に一斉に出版された。

一九九二年には単行本だけでも春に三冊、秋に三冊を書き上げるなど、会員は執筆に追われ、これに雑誌や新聞を加えると忙しすぎる程であった。

原稿料収入も鰻登りに増え、一九九二年の年末にはクラブの準備金は二百万円に達した。一九九三年四月から事務局に事務担当者を置くことができるようになった。

一方、一九九二年にはクラブ設立時からの会員、矢野宮坂、阿部、萩原、浅香、牛場と城田(急逝)の七名が退会した。しかし、新たに十九名が入会した。

会員数が増加したため、翌一九九三年から会友制度が廃止され、会友や常時欠席者の多くが退会し、クラブはさらに若返った。

一九九二年は企業OBペンクラブにとって、まさに隆盛期であった。

#### 六 停滞の年

一九九三年は一転して停滞且つ混乱の年になった。マネジメント社から出版した『アメリカ人と堂々わたりあう本』と『日本再生一〇〇創案』の売れ行きは芳しくなかった。当クラブの実力に限界が見えはじめ、平成不況と相俟って、新企画のほとんどは見送りとなった。

このような事態はある程度予測されていた。そして、その対策をめぐって会員の中に意見が分かればじめた。

八木は一九九三年度の会長を引き受けるに際し、会員の精進を要請した。とくにプロジェクト・マネージャーのレベルアップが必要と考え、自ら先頭に立って指導する姿勢を示した。

八木の要請に基づき編集委員、企画委員、編集企画委員会が新設され、それらの長を兼ねた八木が直接プロジェクト・リーダーを指導できるようになった。

この考え方はキャプテンシーを絶対視するスポーツの世界に似ている。



八木会長辞任発言。  
西東玄氏に退会勧告決議。

事務局員パートタイム採用 西川知世。  
新プロジェクト

一、ゆとりクラブ海外の老後生活 佐份利  
二、アジア時報、話のひろば アジア、ア  
フリカでの経験 石川  
中断 日本能率協会講演。

会員講話 大塚 世界の鉄道。

5月19日

5月例会。

会長辞任。編集委員長、企画委員長も辞任。  
会長代行に河村名誉会長が就任。

廃止：編集委員、企画委員。

新設：企画委員会(編集企画委員と旧理事)。

小説研究会解散。

会員講話 櫻井 世界の食糧。

6月23日

6月例会。

入会：水谷汎、福田平三郎、丸山暢謙。

宮沢小説研究会問題を理事会に提訴。

新プロジェクト

会員の中には八木の考えに疑問を抱く者も少なくなかつた。

趣旨が全員に浸透し、所期の成果を上げるには時間がかかる。しかし、遅々として改革が進まないのは会員に八木に対する反発があるためと映ったのか、八木は突然会長辞任を表明した。

事務局長の私は困惑した。あまりに唐突で八木の真意を測りかねた。加えて適当な次期会長が見当たらなかつた。ペンクラブの会長は人柄だけではなく文筆の実績と社会的名声の両方が必要である。事務局長はしばらく事態を静観した。

もう一つ問題が起きた。八木の提唱で小説研究会が発足し、山本元帥をテーマとした小説を共同執筆しようとしていたが、幸か不幸か、計画が固まる前に、『黙』への連載が決まってしまった。

八木は励ましの意味もあって、小説研究会に加わった宮沢漸を執筆者兼プロジェクト責任者に任命、経営者向けの経済小説として書き進めるよう指示した。しかし、宮沢の原稿は、八木の意図と違うものとなったので、八木は雑誌『黙』に売り込んだ責任上、宮沢を解任し、自

一、ライフワーク 日本実業出版社 森田  
二、オールセールズ書評 ” ”  
会員講話 亀井 ビール秘話。

7月21日

7月例会。

副会長に上沢が就任。企画委員会を廃止し  
理事会を復活。(新理事：河村、上沢、佐  
份利、北田、三枝、石川、衛藤、西島、森  
田、浅野、櫻井、小林。)入会：新井進。

9月22日

9月例会。

選挙委員会発足(委員田中、鳴澤)印税配分  
率変更。執筆者6、プロマネ4(再版以降  
は執筆者8、プロマネ2)。

新プロジェクト

一、俳句勉強会発足 講師 平間  
二、国際マナー常識辞典オメガ社(学研) 佐份利

三、マイライフプラン講座神奈川新聞石川  
四、クラブの同人雑誌創刊 石川

五、「体制批判」を「政治家官僚への48の  
提言苦言」に変更。

ら執筆することにした。この処置に不満な宮沢は、理事  
会に提訴したため、その扱いをめぐるクラブ内は混乱し  
た。

結局、八木の辞任は確認され、病氣療養中の河村名誉  
会長が会長代行となって事態收拾が計られた。

それまで多忙であった鳴澤が時間に余裕ができて、ク  
ラブの会合に顔を出すようになったので、次期会長選挙の  
選挙委員を引き受けてもらった。彼は立候補制でまず役  
員を選挙し、役員の互選で会長を選ぶ方法を提唱した。

この方法により理事の選挙が実施され、新理事の互選に  
より鳴澤が会長に就任した。一九九四年度は新執行部に  
よって運営されている。

一九九三年には四冊の単行本の仕事舞い込み、その  
うち日本実業出版社の『ライフワークの見つけ方楽しみ  
方』、マネジメント社の『政治家・官僚への48の苦言・  
提言』が出版され、学習研究社の『国際マナー辞典』が  
一九九四年四月上梓となった。しかし、昨年と異なり、  
一九九四年以降に繋がるプロジェクトは皆無に近い。企  
業OBペンクラブは今、新しい方向を模索している。し  
ばらくはインプット重視の道を歩むことになる。



執筆 者 名 簿

氏 名	(カッコ内は本名)	出 身 会 社	生 年
浅野正春	あさの まさはる	(株)日立製作所	1934
アブドルカーダ 一栄子	アブドルカーダ えいこ	ニューサウスウェルス 州立コレスポンデンス スクール日本語教師	1933
新井進	あらい すすむ	伊藤忠商事(株)	1931
池田善行	いけだ よしゆき	日商岩井(株)	1917
石井正紀	いしい まさみち	千代田化工建設(株)	1937
石川正達	いしかわ まささと	毎日新聞社	1921
伊庭継也 (衛藤 甲子郎)	いば つぐや えとう こうしろう)	住友商事(株)	1924
岩瀬昭三	いわせ しょうぞう	北海道建設業信用保証(株)	1928
遠藤俊也	えんどう としや	(株)東京銀行 丸紅(株)	1924
小川弘	おがわ ひろし	第一製菓(株)	1928
角谷朗宏	かどや あきひろ	三井物産(株)	1928
上沢準一	かみさわ じゅういち	三菱商事(株)	1927
亀井弘次	かめい こうじ	キリンビール(株)	1928
北田純一	きただ すみかず	三菱商事(株)	1928
木村親	きむら ちかし	三菱商事(株)	1927
きりん たかし (正木 豊 まさき)	ゆたか)	(株)マサリヤ社	1930
許斐義信	このみ よしのぶ	三菱商事(株)三井物産(株)	1944
小林正憲	こばやし まさのり	大和毛織(株)国際工機(株)	1930
三枝亨	さいくさ とおる	三井物産(株)	1927
斉藤勁	さいとう つよし	呉羽化学工業(株)	1925
櫻井清治	さくらい せいじ	三井物産(株)	1926
佐份利治	さぶり おさむ	京セラ(株)	1926

10月20日

10月例会。役員選挙方法決定。

入会：林篤二。

発刊：マネジメント社政治家官僚への48の  
提言苦言。

外部講師講演 中国での技術指導吉寄清巳

11月17日

11月例会。

退会：河村(十一月七日逝去)。

入会：吉寄。

発刊：ライフワークの見つけ方・楽しみ方。

12月22日

12月例会。次期(1994年)役員発表。

その中であって、唯一つ平間真木子さんの俳句勉強会  
が活気を呈している。往年の企業戦士も年齢には勝てず  
侘び寂びの世界を求めはじめた証查かもしれない。ある  
いは、この年に逝去された俳句好きの河村会長代行を偲  
んでのことだろうか。



編集後記

昨年九月、三枝亨さんから「会員みんなが参加できるペンの広場を設けましょう」という提案があった。同人誌づくりが始まりました。

初めての試みなので、印刷・経費はどうしよう、どんな構成にするか、などと試行錯誤を繰り返しながらも、編集メンバー、役員、また会員各位の知恵を拝借して、ようやく発刊の運びとなりました。

はじめの計画では、三十編・一〇〇ページ程度を予定していたのですが、会員の八割近い方々のご参加によって四十数編が寄せられ、ページ数も一三〇ページを超す、質量ともに充実した同人誌ができあがりました。みなさまのご協力で深謝いたします。

誌名「悠遊」は、応募されたものを多少アレンジして、二月の月例会で決めたものです。寄せられた原稿は個性あふれる作品ばかり。ことに木村親さんの「ガン告知」には胸を打たれました。文章・文体もさまざまで、編集・校正に際しては、ワープロの打ち間違いやテニヲハの訂正程度にとどめ、出来る

だけ、それぞれの個性を生かすよう努めたつもりです。なお不十分な面が残ったかとも思いますが、ご寛容をお願いします。

最近ワープロ原稿が増えています。印刷のほうも電子組版の技術が進んでいるので、今後はフロッピー持ち込みが大勢となるでしょう。今回も、かなりのフロッピーを提供して頂き、ありがとうございました。

これで、同人誌づくりのレールを敷くことが出来た、と思っています。さらに充実した「悠遊」第2号が続くことを祈っております。

(編集世話人 石川 正達)

「編集メンバー」鳴澤宏英、上沢準一、佐藤利治、櫻井清治、北田純一、小林正憲、三枝亨、竹内京一、西島力、衛藤甲子郎、平間真木子

「事務局」西川知世

氏名	(カッコ内は本名)	出身会社	生年
清水 喬	しみず たかし	(株)ポーラ化粧品本舗	1933
関谷 裕彦	せきや ひろひこ	ローヤル・ネドロイド・ライズ	1932
竹内 京一	たけうち きょういち	(株)トープラ	1931
田中 良平	たなか りょうへい	三菱商事(株)三菱総研	1923
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業(株)	1929
中野 隆夫	なかの たかお	三菱商事(株)	1931
鳴澤 宏英	なるさわ こうえい	(株)東京銀行	1922
西島 力	にしじま つとむ	住友商事(株)	1930
野村 嘉彦	のむら よしひこ	三井物産(株)	1917
林 篤二	はやし とくじ	毎日新聞社	1924
原 信	はら まこと	(株)東京銀行	1924
平間 真木子	ひらま まきこ	(社)日本機械輸入協会	1925
福井 峻	ふくい たかし	明光証券(株)	1924
藤井 長治	ふじい ちょうじ	三井物産(株)	1919
藤岡 豊	ふじおか ゆたか	三菱商事(株)	1932
丸山 暢謙	まるやま まさのり	(株)あさひ銀行	1934
水谷 汎	みずたに ひろし	満鉄・友愛信用組合・横浜メキシコ名誉領事館	1917
森田 茂	もりた しげる	出光興産(株)	1930
八木 大介	やぎ だいすけ (木元 平八郎・きもと へいはちろう)	三菱商事(株)	1926
吉井 米三郎	よしい よねさぶろう	三井物産(株)	1926
吉 寄 清 己	よしざき きよみ	関西ペイント(株)	1925
吉 葉 芳 彦	よしば よしひこ	出光興産(株)	1931
西川 知世	にしかわ ちよ	企業OBペンクラブ事務局	1948



企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」創刊号

一九九四年四月二十七日発行

編集・発行者 企業OBペンクラブ「悠遊」刊行委員会

代表 鳴澤 宏英

印刷所 株式会社 ヨコタ

東京都江東区亀戸三―一〇―三 (〒136)

☎ 〇三―三六三八―五四二一

連絡先 企業OBペンクラブ事務局 佐份利 治

横浜市緑区あざみ野四―八―一七 (〒225)

☎ 〇四五―九〇―一五三三八

口座 第一勧業銀行丸の内支店 企業OBペンクラブ

(普通 1633830)

頒価 八〇〇円

(税込み)